2013 年度　博士論文

初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムの開発と評価

－子どもの両親との役割関係葛藤の解消に向けて－

岩手県立大学大学院

看護学研究科

氏名　木村　志穂

2013 年度　博士論文

初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムの開発と評価

－子どもの両親との役割関係葛藤の解消に向けて－

Development and Evaluation of an Educational Program for Grandparents Expecting Their First Grandchild

For Resolving Role-Related Conflict between Grandparents and Parents

指導教員　武田　利明

岩手県立大学大学院

看護学研究科

氏名　木村　志穂

目次

第１章　序論・・1
Ⅰ．はじめに・・1
Ⅱ．研究目的・・2
Ⅲ．用語の操作的定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
Ⅳ．概念枠組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
ｖ．研究の意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第２章　文献検討
Ⅰ．日本における孫の育児の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
1．現代における祖父母世代と親世代の育児の様相の差異・・・・・・・・・・・・・ 5
2．祖父母にとっての孫の育児・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
Ⅱ．孫の育児における役割関係葛藤の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
1．孫の育児において家族内で役割関係葛藤が生じる要因・・・・・・・・・・・・・ 9
2．孫の育児において家族内で役割関係葛藤が生じた際の対処法・・・・・・・・・ 10
Ⅲ．家族成員間の関係性に働きかける看護援助の現状・・・・・・・・・・・・・・・・11
1．孫の育児に向けた出産前の教育の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
2．育児に向けた家族成員間の関係性に働きかける看護援助の実態・・・・・・・12
Ⅳ．孫の育児に向けて祖父母に行う教育プログラムの実態・・・・・・・・・・・・・・ 12

第３章　予備研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
Ⅰ．研究目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
Ⅱ．研究方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
1．研究デザイン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
2．対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
3．データ収集方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
4．分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
5．倫理的配慮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
Ⅲ．結果・・ 17
Ⅳ．考察・・ 24

第４章　初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムの開発・・・・・・・・・・・・27
Ⅰ．教育プログラムの作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
1．プログラム作成の根拠・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

2. プログラムの目的と目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
3. プログラムの実施時期と回数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
4. プログラムの内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
5. プログラムで使用する資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
Ⅱ. プログラムの運用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
1. プログラム全体の運用方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
2. グループワークについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
3. グループワーク運用に際しての看護の均一化・・・・・・・・・・・・・・・・34

第 5 章　初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムの実施と評価・・・・・・・・・・ 36
Ⅰ. 研究目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
Ⅱ. 研究方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
1. 研究デザイン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
2. 対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
3. データ収集方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
4. 分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
5. 倫理的配慮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

第 6 章　結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
Ⅰ. ケースの概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
Ⅱ. グループワークによる効果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
Ⅲ. 質問紙調査によるプログラム実施前後の比較・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
1. 祖父母の役割獲得状況に関する調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
2. 祖父母の役割受容と家族機能、情緒的役割関係における変化・・・・・・・47
Ⅳ. 産後 3 ヶ月時の育児の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・ 49
1. ケース 1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
1. ケースの紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
2. 役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・49
3. 家族関係の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・・・51
2. ケース 2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
1. ケースの紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
2. 役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・52
3. 家族関係の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・・・53
3. ケース 3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
1. ケースの紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
2. 役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・56

3．家族関係の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
4．ケース４・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
1．ケースの紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
2．役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・・60
3．家族関係の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・・・・62
5．ケース５・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
1．ケースの紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
2．役割調整の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・・・・64
3．家族関係の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・・・・66
6．ケース６・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
1．ケースの紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
2．役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・・69
3．家族関係の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・・・・69
7．ケース７・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
1．ケースの紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
2．役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・・71
3．家族関係の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・・・・73
8．ケース８，ケース９・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
1．ケースの紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
2．役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・・76
3．家族関係の実態からみたプログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・・・・77
9．全ケースからみた初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムの効果・・・・79

第７章　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
Ⅰ．本プログラムの有用性および効果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
Ⅱ．本研究における限界と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90

第８章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92

謝辞・・ 94

引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96

資料

資料１：研究協力依頼文書　育児中の母親用（予備研究の調査依頼）・・・・・・・・ i
資料２：研究協力依頼文書　祖父母用（予備研究）・・ ・・・・・・・・・・・・・・・ ii
資料３：調査内容説明文書　祖父母用（予備研究）・・・・・ ・・・・・・・・・・・・ iii
資料４：研究協力依頼文書　家族用（プログラム実施後）・・・・・・・・・・・・・・ iv
資料５：調査内容説明文書　家族用（プログラム実施後）・・・・・・・・・・・・・・ v
資料６：研究同意書　対象者保管用と研究者保管用・・・・・・・・・・・・・・・・・ vi
資料７：面接調査における事前調査用紙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ vii
資料８：質問紙調査　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ viii
資料９：研究協力依頼文書　地域助産師用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ xiii
資料１０：研究同意書　地域助産師用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ xiv

第１章　序論

Ⅰ．はじめに

わが国では古くから里帰りの慣習があり、核家族化が進む現代においても、妊婦は出産前から実家に帰省し、実父母からの支援を受けている。また、義父母と同居している場合には、出生直後から自宅に戻り、祖父母の支援を受け育児をしており、多くの家庭において拡大家族の協力のもとで育児が行われている。この背景には、出産直後からの夫協力の希薄さが問題視されている。妻の育児休業取得率が83.6％(2012年)であるのに対し、夫の育児休業取得率は2011年に2.63％と前年の1.38％よりやや上昇したが、2012年には1.89％と再び減少してきており、本制度が男性には活用されていない現状がある。さらに、平成23年社会生活基本調査（総務省統計局，2012）によると、子どもの父親が家事や育児にかける時間は、1日平均で1時間という現状であり、固定的な性役割分業意識の見直しが謳われてきているものの、「子育ては母親がするもの」という社会通念はいまだ健在である。島田ら（2006）が行った全国調査によると、産後の退院先が母方の実家である者は半数以上であり、産後1ヶ月間の主な援助者が親である者は76.0％と大半であった。この傾向は年々強まり、実家の滞在期間または親による援助の期間は延長している（石井ら，2011）。このように、育児において祖父母が育児支援のキーパーソンとして重要な役割を担っている。

しかしながら、祖父母のサポートが有効に機能していない現状が明らかとなってきている。育児における実母や義母の支援は母親の乳児への愛着を高めたり（榮，2006）、授乳においても肯定的な思いを抱く（井関，2010）等、祖母の支援がプラスの側面に働く一方で、実母による支配的・回避的なサポートが母娘関係の緊張や母子愛着障害のリスクとなっている現状がある（白井ら，2006）。また、研究者（2009）の研究においても、身近に祖母がいる母親の約1割が、実母との育児観の相違からストレスを感じているという実態が明らかとなっている。宗像（1996）は父、母、夫、妻といった立場に伴う役割イメージは世代別、階層別、地域別の社会によって差があり、世の中が変わるにつれ、当然と思っていたイメージも変化してくると述べている。そのため、特定の立場に伴う固定した役割イメージを相手に期待できず、互いの役割期待と遂行の仕方にずれが生じやすい。これらの理由から、育児において祖父母と子どもの両親との間で役割関係葛藤が生じている現状がある。そのため、看護者が家族員の関係性にアプローチしていくプログラムは必要であると考える。しかし、現時点では妊娠期に、祖父母や親になる夫婦との関係性に働きかけた看護援助の

研究は行われておらず、家族の関係性に働きかける支援方法は確立されていない。孫の育児において、祖父母と子どもの両親との役割関係葛藤が少なく、祖父母の力を発揮できるようになるためには、祖父母に対して孫の出産前に教育を行い、祖父母としての役割獲得プロセスが円滑に移行できるようなプログラムと、家族の関係性にアプローチしたプログラムの開発が必要であると考える。

Ⅱ．研究目的

本研究は初孫を迎える祖父母を対象に、孫の育児で生じうる役割関係葛藤がどのような要因で生じるのかを明らかにし、役割関係葛藤の解消に向けて、祖父母役割獲得の促進と、子どもの両親との関係性の強化に向けた教育プログラムを開発、評価することである。

Ⅲ．用語の操作的定義

１．役割関係葛藤

子どもの両親と祖父母が互いに期待する、あるいは期待される手段的役割と情緒的役割（統率、調整保護、自立、追従、合わせる、甘える）期待をめぐり、家族成員間でズレが生じ、互いが不快や不安を抱き、悩むこと。

２．祖父母

40 歳代後半から 70 歳代前半までの世代で、孫からみた立ち位置の者。

３．祖父母役割獲得過程

祖父母となる者が祖父母の役割に関する知識や技術を習得したり、子どもの両親との関係性について考える時間を持ったりすることで、育児における自らの役割をイメージ化でき、役割を受容するとともに、育児において祖父母として手段的側面あるいは情緒的側面から子どもの両親をサポートしていく役割を遂行していくこと

Ⅳ．概念枠組み

本研究における理論的背景として、家族関係が重要なキーワードであり、家族内における各家族員の役割が大きく関与している。そこで、まず本研究における「役割」に関する各用語について、中村（1972）による役割概念を参考にする。役割とは、祖父母が家族内で相互作用の相手となる子どもの両親との位置関係において、孫育てという行為を遂行していくことである。役割を遂行するにあたり、ヒトは自分の置かれている位置に対して、

他者からどのような期待をされているのかについて認知する役割期待と、役割の相手との相互作用を適応的に行うために、役割知覚を行う。家族では育児や家事といった生活上の手段的な役割分担と、お互いの気持ちや感情を補足的に充足するために、情緒的役割をもっている。しかし、役割についてのイメージは、個々の家族員に定位した世代別、階層別、地域別の社会によって差があるため、それぞれ異なることが多い（宗像, 1996）。そのため、お互いの役割期待と遂行の仕方にズレが生じたり、情緒的な役割期待をめぐってズレが生じることがある。ズレがお互いの許容範囲を越えたときに不安や不快を抱き、役割関係葛藤が生じる。以上のことから、祖父母と子どもの両親が互いの役割のイメージについてのズレを少なくするような教育プログラムが必要であると考える。また、互いの不満や不安を解消できたり、人間関係を改善するには、互いの考え方や感情に気づいたり、理解することができ、それを通して互いの良さが見えてくるような関係づくりが必要である（宗像, 1996）。そのため、孫の育児における役割関係葛藤を解消するためには、妊娠中に祖父母が子どもの両親と向き合い、互いの思いを理解し、祖父母と子どもの両親との関係性を強めていくような教育プログラムが重要であると考える。それによって、祖父母となる人々は自らの役割を受容し、孫の育児において役割を遂行でき、子どもの両親との役割関係葛藤の解消につながっていくと仮定する。

以下に本研究の概念図を示す。

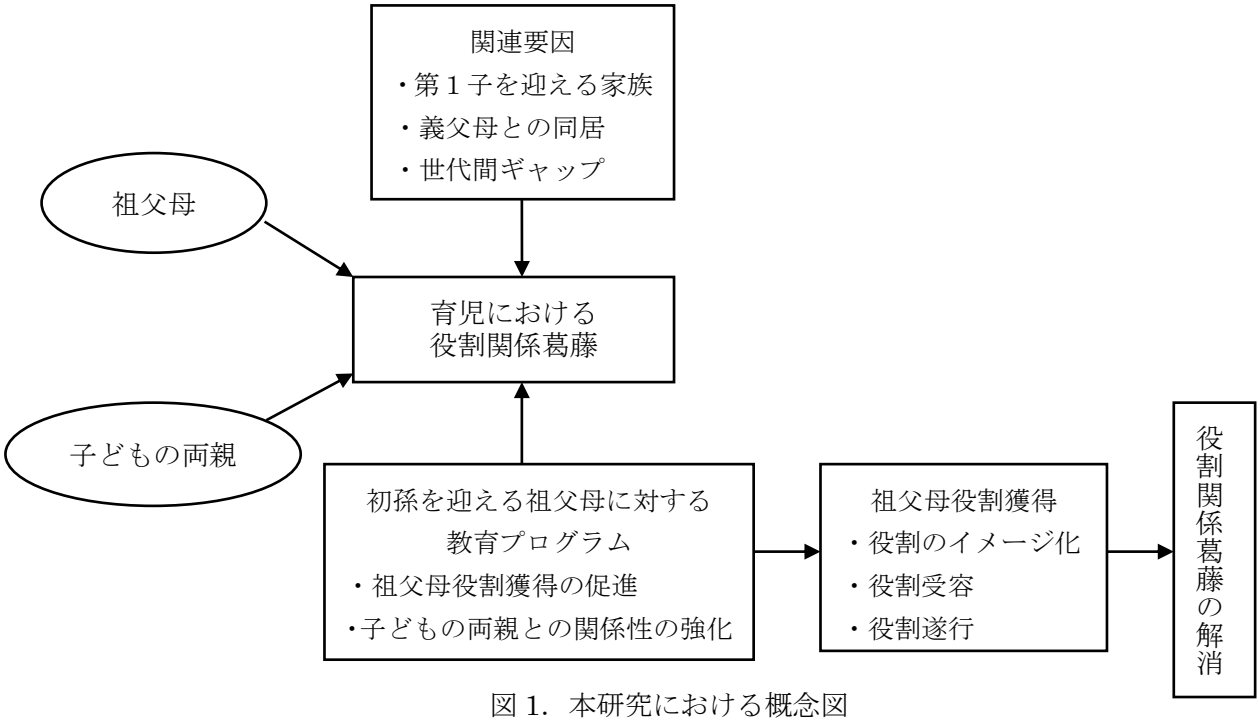

図 1．本研究における概念図

Ⅴ．研究の意義

孫の育児に向け、出産前に祖父母が現代の育児知識や技術を習得し、イメージづくりをしていくことは、子どもの両親にとって大きな支援となる。また、祖父母が子どもの両親と、妊娠期から向き合い、今後の役割について語り、互いの育児に対する思いを知ることで、祖父母は手段的役割や情緒的役割といった、祖父母としての役割について考えることができる。そして、育児において子どもの両親との間で役割関係葛藤を生じることが少なく、役割を遂行していくことにつながっていくと考える。さらに、家族が妊娠期から効果的なサポート体制について検討していくことは、育児において子どもの母親の「孤立化」を防ぐことにつながると考える。祖父母にとって、子どもの両親と協働しながら行っていく育児は、祖父母の存在を価値づけ、人生の喜びや満足感を得ることができ、生活の質の向上につながり、孫の育児がいきがいになりうると考える。

第 2 章　文献検討

Ⅰ．日本における孫の育児の様相

１．現代における祖父母世代と親世代の育児の様相の差異

祖父母世代と親世代の育児の様相の差異について、まとめたものを表 1 に示す。表 1 に挙げた項目は、祖父母世代と親世代のそれぞれの育児観に影響を与える背景要因と、各世代の育児の常識とされていて、祖父母と子どもの母親で考え方の相違が生じやすい項目（角川，2006）で構成した。

わが国の育児環境を概観すると、世帯構造において、三世代世帯の割合は戦後一貫して低下し続け、1960 年の 30.5%から 2010 年には 7.9%と 3 分の 1 以下になっている（厚生労働省大臣官房統計情報部，2012）。また、平成 19 年度版国民生活白書によると、地域におけるつながりの希薄化が強まり、深い近隣関係を望まない人が増加してきている。従来の大家族から夫婦だけで育児を担っていく核家族へと家族形態が変化していく中で、母親は育児において新たな悩みを抱えており、日中夫が不在の生活の中で行われる育児は「孤育て」と言われてきている。少子社会に関する国際意識調査報告書（内閣府政策統括官，2011）によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に賛成する人の割合は男性 65.0%、女性 56.8%と、国際的にも見ても上位の結果である。祖父母世代と親世代において、この考え方には差異がない結果である。このような育児の背景もあって、母親は育児に対する不安感や嫌悪感を生じ、「育児不安」や「育児ノイローゼ」あるいは「子どもの虐待」として社会問題化し、マスコミでも大きく取り上げられてきている。

総務省「労働力調査」（2012）によると、50～54 歳の労働人口比は 84.2%であり、55 歳から 59 歳が 78.2%、60～64 歳が 60.5%と、60 歳を超えてもなお約 6 割の祖父母が就業をしている現状にある。また、1974 年に合計特殊出生率が人口置換水準の 2.08 を割り込み、2.05 となっており、祖父母世代の育児経験が少なくなっている。そのため、現代の祖父母世代は身近に祖父母の役割モデルが少なく、育児支援に不安を抱いているという現代の状況がある。さらに、初産年齢の高齢化に伴い、自分自身の育児時代から数十年という月日が経っていることも重なって、約 7 割の祖父母が孫育てに対して不安や悩みを抱えている現状にある（宮中ら，1996）。さらに、祖父母自身の育児期は実母や姑の助言を参考にしており、母親学級を受講し、学習した者は少ない。姑からの経験に基づく知恵で育児を行ってきた者が多く、一方、現代の子どもの母親は育児に関して書籍やインターネット、各種

学級などから得ており、両者の間で育児観の相違が問題となっている。

わが国では古くから産前産後の里帰りの慣習があり、核家族化が進んできている現代においても、いまなお多くの女性が里帰りをしており、家事および育児のサポートを祖父母から受ける女性が多い現状にある。そのため、祖父母は就業しながら、娘あるいは嫁の家事や育児をサポートしている。このような日本独自の慣習もあり、育児における相談相手として実父母を上げている子どもの母親は約７割であり（八重樫ら，2003)、祖母の育児参加が多い母親では、祖母の育児参加が少ない母親に比べて「育児が楽しい」、「育児に自信がついた」と育児への肯定的な捉え方をしている（松岡ら，1996)。また、里帰り等により産褥早期の段階で実母から育児協力を得ることは、実母が褥婦の母親モデルとして存在することとなり、母親になる過程において肯定的に働くと言われている（榮, 2006)。さらに、渥美（2007）は、働く女性が多い地域では出生率が高く、祖父母を含む家族の子育て参加が充実していると述べており、育児における祖父母の存在は、子どもの母親にとって大変重要な意味を成している。

表１．現代における祖父母世代と親世代の育児の様相の差異

項目	祖父母世代	親世代
初産の平均年齢 合計特殊出生率	1974 年　24.7 歳 1974 年　2.05	2012 年　30.3 歳 2012 年　1.41
家族形態	1975 年　三世代家族 16.9%	2010 年　三世代家族 7.9%
育児に関する情報源	親の経験を頼りにしていた	インターネット，育児雑誌， 各種学級
授乳方法	規則的授乳 1970 年代母乳育児率 31.7% 人工乳の推奨 母子異室制 生後 1 年で断乳	自律授乳 2010 年　母乳育児率 51.6% 1975 年より母乳育児推奨 母子同室制 断乳から卒乳へ
母乳以外の補足	沐浴後に白湯を飲ませる	特に生後 6 か月までは母乳以外のものを補足する必要はない（UNICEF/WHO）
離乳食開始時期	果汁は生後 2 か月から開始してよい	生後 6 か月から乳児の状態を見ながら開始する
抱っこ	抱き癖がつく 「泣くのも運動である」	抱き癖はない 抱くことで基本的信頼感を獲得する
日光浴と外気浴	生後 1 ヶ月より日光浴	生後 2 ヶ月より外気浴
ベビーパウダー	汗疹やおむつかぶれ等の皮膚トラブル予防のため使用	1987 年 ベビーパウダーの主成分であるタルク鉱物にアスベストが含まれていたとして使用を禁止 現在はコーンスターチが主成分であるが、微粉末であるため吸い込む危険性がある
乳幼児突然死症候群（SIDS） 揺さぶられっこ症候群	1980 年代子どもの頭の形が良くなるなどの理由でうつ伏せ寝を推奨 「高い、高い」で空中に投げてキャッチを繰りかえすことで子どもが喜ぶという認識	1992 年うつ伏せ寝の禁止（アメリカ小児科学会） 生後 6 か月未満の新生児や乳児の身体を過度に揺することで内出血などの外傷が生じるため禁止
育児の情報源	姑 近隣住民 育児書	育児書 インターネット 同年代の母親 医療者（母親学級など）

２．祖父母にとっての孫の育児

安藤（2001）は、祖親性（祖父母になること）に関する研究の背景には核家族化が関連していると述べている。核家族化に伴い、孫の教育に対して祖父母が全面的な責任を負う必要はないという意識に変化してきていると報告されており（Albrecht，1954）、これはわが国おける祖父母の傾向と一致している。同様に、Aldous（1995）は孫の育児参加に関して祖父母は、不干渉規範と扶助義務規範を持つと述べている。つまり、家族間の境界を維持するために深い介入をすることを避け、必要時手助けをするという考えを持っている。このことは、杉井ら（1996）の研究においても同様の結果が述べられており、同居家族であってもイエ規範で孫育てが規定されるのではなく、不干渉規範と扶助義務規範が交錯する孫育てであると示していた。

孫の育児における祖父母の意味について、津間ら（2012）は祖母による「孫育て」に関する文献検討をした結果、孫育ては祖父母と孫との関係性を密にし、祖母の生活を豊かにすることで、祖母の生活向上につながり、また育児支援に祖母力を積極的に活用していくことは祖母らの生涯発達によい効果がある可能性が高いと述べている。祖母による孫育ては子ども世代の期待する孫育てに沿うことであり、孫育てにより生活の中心が変化したり、孫が健やかに育つためにできる限りの支援をしている（津間，2013）。また、久保ら（2008）によると、祖母は育児経験がある「人生の経験者」として、育児を手伝うことに役割意識の復活を感じ、自分の再認識につながっていた。このように、祖母の多くは自身の育児の反省や学びを生かしながら、「第二の子育て」として楽しんでいる現状がある。その反面、孫の育児を“重荷”と捉える場面もあり、孫育てによる身体面での疲労を感じていることも事実である。さらに、日本の伝統文化の中には「家の繁栄」「子孫繁栄」という考え方があり、その考えは徐々に薄らいできているものの、イエ制度が残っていた時代に幼少期を過ごしてきた祖母にとっては、孫を持つことにより家の継承ができ、自己の役割を果たしたという達成感をもつことも明らかとなっている（久保ら，2011）。

小野寺（2003）の調査では、孫よりも仕事が楽しい、祖父母自身の時間を犠牲にしてまで子どもに献身すべきと考えている者はいなかったという結果が出ており、祖父母自身の生活を主体的に選択してきている時代へと少しずつ変化してきていることがわかる。少子化、三世代同居の減少、祖父母の就業割合の増加等に伴い、祖父母の生活も、子どもや孫世代との関係も、孫の育児に対する祖父母の思いも変化してきている。

Ⅱ．孫の育児における役割関係葛藤の現状

１．孫の育児において家族内で役割関係葛藤が生じる要因

孫の育児における家族内役割葛藤についてはこれまでに多くの研究がなされてきている。なかでも、「子どもの母親と祖父母で育児方針や育児の仕方が異なる」「孫の親と育児について意見が合わない」といった結果が最も多く報告されており、時代を経ても今なお問題となっている（飯島ら，1991；林ら，2000；研究者，2009）。また、育児における嫁姑関係や世代間の関係における悩み、役割期待の認識のズレについても報告されている（杉井ら，1996；北村，1998；小野寺，2004）。実父母と娘との役割関係葛藤について、井関ら（2013）は実母と娘との間で生じる不協和音は、実母に対する娘の希求内容と、実際に実母が有する育児情報や育児能力および支援内容との不均衡によるものと推察している。特に、産褥期の女性は段階的に母親役割獲得過程を辿っていくため、それに伴い娘のサポート希求が変化することから、サポート授受の不均衡や娘との不協和音が生じやすい。一方、家族形態による差異については、義父母と同居している母親は、自分の時間がなく、義父母の協力が得られないと感じていた（三輪ら，2006）。また、研究者（2009）の調査では、義父母と同居している母親は、義父母と同居していない母親よりも有意に祖父母学級への参加を希望していた。これらの結果から、義父母との同居において役割関係葛藤が生じやすいと考えられる。さらに、第２子以降よりも第１子において、役割関係葛藤が生じやすいことが明らかとなっている（林ら，2000；研究者，2009）。

子どもの母親は祖母に対し、補助的育児援助を願っており（杉井ら，1996）、育児の主体は母親であると認識していた。そのため、育児についての意見が尊重されることを願っており、実母による娘の意思を尊重しないサポートは、母娘関係に緊張を引き起こすことが明らかとなっている（白井ら，2006）。また、柳川（2003）は祖母との二者関係には物理的距離である同居か別居よりも、精神的距離である情緒的親密性の程度が関与していると述べている。

祖父母が孫育ての中で不安を感じる内容として、笹田ら（2010）は「教育やしつけに関すること」が 33%、「発育や発達に関すること」24%であったと述べており、北濱ら（2011）の研究では母乳の与え方や乳房の手入れに関しての相違や質問が多くみられていた。そのほか、うつぶせ寝や離乳食の開始時期、抱き癖、日光浴など、祖父母世代に常識であったものが新しいエビデンスにより変化した内容において、役割関係葛藤が生じやすいことが明らかになっている。

このように、育児に対する価値観の相違が時代の変化に伴うエビデンスの変化によって生じていることは明らかとなっているが、義父母との同居や第１子の育児において役割関係葛藤が生じやすいことから、家族の関係性が影響していることが考えられる。そのため、家族の関係性について質的に研究していくことで、その詳細が明らかになると考える。

２．孫の育児において家族内で役割関係葛藤が生じた際の対処法

研究者（2009）の研究において、1 歳 6 ヶ月の子どもを持つ母親において、実母や義母と育児に対する考え方の相違からストレスを感じていた者はそれぞれ約 1 割であった。考え方の相違が生じた際の対処法として、直接話し合う者は 1 割未満、夫に相談する者、何もしない者がそれぞれ約 4 割という結果であり、家族内コミュニケーションが図れていない現状が明らかとなった。また、柳川（2003）の研究では、子どもの母親と祖母の間で相違があった場合に、子どもの母親は「自分自身で決定する」という意見が大半であり、「実母と話し合って決定する」や「実母の決定に従う」と回答した者はごく少数であり、「義母と話し合って一緒に決定する」者はいないという結果であった。小野寺（2004）の研究結果では孫へのケア内容を巡る悩みについて、「相談して対応策を決める」という回答が最も多く、相談相手として孫の親が最も多い結果だった。特に、実父母と娘の関係においては、些細な事柄においても逐一連絡・相談がなされる傾向にあった。しかしながら、相談することによって問題が解決された例はごく少数であり、役割関係葛藤の解消にはつながっていなかった。そのため、小野寺はケアギバーとしての祖父母に必要な支援は、悩みを主体的に解決できる能力を身につけさせ、またケアギビングに関するプラクティカルな支援を提供する場所や機関が用意されることが必要であると述べている。さらに、成人期の親子関係を主体的に構築し、家族関係に能動的に関わっていく力を育てるための教育として、グランドペアレンティング教育が重要であると示唆している。現代の家族関係において、役割関係葛藤が生じた際の対応策として、家族内でコミュニケーションを図るという手段は十分に行われていないのが現状である。

家族は互いに影響しあい、密接に関わりながら、意味のある世界を形成しており、真に家族を理解するためには、各々の家族の主観的な体験や意味の世界を、研究者が追体験的に捉えることが必要である（長戸ら，2005）。そのため、個々の家族背景を踏まえ、家族内で役割関係葛藤が生じた際に、対応が困難である要因について明らかにしていくことが必要であると考える。

Ⅲ．家族成員間の関係性に働きかける看護援助の現状

１．孫の育児に向けた出産前の教育の現状

出産前の教育として、妊婦を対象とした母親学級は祖父母世代の育児期にも行われていたものであるが、徐々にその対象は胎児の父親に焦点が当たり、父親学級や両親学級が行われるようになってきた。しかし、Martell (1990) は実母と初産婦の娘との関係において、出産した母親へのケアに祖母も組み入れることを提案しており、柳川（2003）は周産期における保健指導について、祖父母学級や母親・両親学級といった祖父母、親に限定にするクラスだけではなく、祖父母世代をも含めた家族を対象とした、包括的保健指導としてのクラスのカリキュラムの必要性を提案していた。この背景には先述したように、子どもの両親と祖父母間で育児についての価値観や方法の相違が生じていることが大きい。

そこで、祖父母が育児において重要なキーパーソンであるという現状を受け、2000 年代前半から各地の保健医療施設や自治体において、祖父母を対象とした出産前の教育が「祖父母学級」や「孫育てセミナー」といった名称で行われるようになってきた。研究者自身も 2005 年度より岩手県において、初産婦である妊婦をもつ祖父母を対象に孫育てセミナーを各地で開催してきた。また、日本助産師会においても 1 歳半までの子どもを持つ家族を対象に「孫育て講座」を開催しており、2009 年には「孫育て講座」を開催する助産師を対象としたプログラムの開発を試み、助産師の育成に努めている現状がある。

しかし、現在行われている学級は、主に孫の育児の不安解消に向けたプログラムであり、妊娠、出産、育児に関する知識や技術の提供を中心とし、意図的学習形態となっている。石井（2011）は現存の孫育児支援活動は孫育児を通して祖父母自身の QOL 向上を目指している反面、育児に関する最新の情報提供に比重が置かれているため、祖父母の QOL 向上に結び付いていないと述べている。また、祖父母の感情表出を促したり、参加者同士で共有したりする関わりが意図的に実施されると、祖父母生殖性の発揮を実感し、QOL の向上につながると考察している。現時点では子どもの母親の視点に立った育児支援活動が多いが、孫の育児に関わることが祖父母の生きがいになるという観点から考えると、祖父母世代の QOL 向上を実現するための育児支援も重要である。また、小林（2010）は実父母と娘という実の親子関係において、感情的な問題として見過ごされがちな問題においても、専門家による介入が必要であると述べ、世代間を結ぶ介入の必要性を示唆している。

２．育児に向けた家族成員間の関係性に働きかける看護援助の実態

育児における家族成員間の関係性に働きかける看護援助について、先行研究を概観してみると、神庭ら（2006）は養育期の家族の育児不安に対する支援には、家族内の関係および社会との関係をふまえて家族機能を把握することが重要であると述べている。また、狩野（2011）は祖父母の育児支援に関する文献を概観した結果、育児の経験者である祖母であるがゆえに、育児に干渉する人が多く、子どもの母親がストレスフルになるという現状を踏まえ、両者が納得できる関係づくりへの介入が必要であると述べている。大月他（2006）は母親役割獲得を促す有効な看護介入について、修士論文、博士論文および原著論文から文献検討をした結果、考察において家族成員間の関係性に働きかける援助の必要性を記述している論文が検索されたが、祖父母や親になる夫婦との関係性に働きかけた看護援助の研究はほとんど行われていないと述べていた。このように、家族に働きかける看護援助方法は十分に確立していないという現状を踏まえ、前原ら（2007）は出産 1～3 か月の母子と家族への看護介入プログラムを作成し、実施した。このプログラムの目的は「家族が地域生活に適応しながら主体的に子育てに取り組める対処能力を高めること」であり、①家族成員の育児対処能力、②家族の関係性、③家族と社会との関係性、の 3 つの焦点を当て介入を行っていた。しかし、この研究は結果として母子のみの参加であり、対象とした祖父母が参加せず、母親を介して祖父母に働きかける支援となっていた。また、石井ら（2008）は家族員の育児対処能力向上のための孫育児支援プログラムの有用性の課題という研究を行っており、対象は産後 1 歳未満の育児にかかわっている祖母 2 名であった。いずれの研究も母親のみ、あるいは祖母のみを対象とした研究であり、その他の研究においても、子どもの両親を対象とした介入研究はみられるが、子どもの両親と祖父母双方を対象とした研究は見当たらなかった。このことから、現存の孫の育児に向けた看護援助のあり方を見直す必要性があり、特に妊娠中から、家族成員間の関係性に働きかける看護援助について開発していく必要があると考える。

Ⅳ．孫の育児に向けて祖父母に行う教育プログラムの実態

現在行われている育児支援プログラムの対象は、子どもの両親が中心であった時代から、孫の育児に注目し、祖父母を対象とした教育プログラムが実施されている。その内容は、祖父母と子どもの両親との育児知識に関する世代間ギャップを少なくするために、現代の育児に関する知識の提供が主体である。しかし、先述したように、役割関係葛藤の要因に

は、家族の関係性が大きく影響していることが考えられ、現代の育児において生じている役割関係葛藤の要因を明らかにした上で、育児の実態に即したプログラムを考案していく必要があると考える。また、子どもの両親との祖父母の役割獲得を促進させるためには、知識や技術の提供だけではなく、世代間の関係性をより強めるために、妊娠期から家族の関係性にアプローチした教育プログラムが重要であると考える。先行研究において、初孫を迎える祖父母を対象として、妊娠期に家族の関係性に焦点をあて介入をした研究はなく、その教育プログラムは確立されていない。

第３章　予備研究

Ⅰ．研究目的

孫の育児において、祖父母と子どもの両親との間で生じる役割関係葛藤の要因について、祖父母の立場から明らかにする。また、現代の家族において、役割関係葛藤が生じた際にどのような対応がとられているのかを明らかにする。

Ⅱ．研究方法

１．研究デザイン

質的記述的研究

２．対象

先行研究において、第１子において役割関係葛藤がより生じやすいことから、初孫を迎える祖父母を対象とした。生後３ヶ月から６ヶ月の初孫を持つ祖父母８名とした。この月齢を対象とした理由として、育児早期は生まれた子どもを中心として新たな家族の関係性を構築していく時期であり、特に出産後 1～2 ヶ月は祖父母を頼って育児をしていく家族が多い。より親密に家族が関わりあう時期を経て、3 ヶ月を経つと各家族員が育児にも徐々に慣れ、各家庭での育児法を確立し、家族の関係性が安定していく時期にあると推察した。そのため、心理的にも安定がうまれ、これまでの育児を振り返る余裕ができ、調査に協力しやすい時期ではないかと考えたからである。

３．データ収集方法

１）研究期間

平成 22 年 3 月～平成 22 年 8 月

２）研究内容

下記の３点を明らかにすることで、教育プログラムの基礎資料とした。

（１）孫の育児において祖父母はどのような役割期待を認知しているのか

（２）孫の育児においてどのような要因で役割関係葛藤が生じているのか

（３）孫の育児において役割関係葛藤が生じた際に、祖父母はどのような対応をとっているのか

３）研究方法

A 県 B 市で行われている A 県助産師会主催の子育てサークルに参加した子どもの母親に対し、研究の趣旨を説明し、身近に住む祖父母に説明書を手渡してもらえないか、口頭で依頼をした。手渡すことに同意の得られた母親には、研究の趣旨を記載した紙面を渡し、祖父母が研究への参加に同意をした場合には、直接研究者に連絡をしてもらうよう依頼した。１家族につき 2 名までの祖父母を依頼した。

半構成的面接法にて行い、面接内容は研究目的に照らし合わせて以下の 4 項目を設定した。研究目的（１）について、①祖父母は孫の育児において、子どもの両親からどのような役割を期待されていると感じているか、とした。次に、研究目的（２）について、②妊娠中期から産後 3 ヶ月にかけて、孫の育児においてどの時期にどのような不安や戸惑いがあったか、③妊娠期から産褥期にかけて、子どもの両親との間でどの時期にどのような考え方のズレがあったか、とした。そして、研究目的（３）について、④子どもの両親との間で考え方のズレが生じた際に、祖父母はどのような対応をしたか、とした。

面接は対象者が希望する場所にて行い、時間は 1 時間程度とした。面接内容を録音してよいか事前に確認を行い、同意が得られなかった場合には、筆談してよいか許可を得た。

４．分析方法

面接調査の分析は木下の修正版 Modified Grounded Theory Approach （以下 M-GTA とする）を用いた。M－GTA は従来の grounded theory approach（以下 GTA とする）のデータに密着した縦継続的比較分析という特性を踏まえ、さらにデータを切片化せず、データの解釈の主体を「研究する人間」と明確にし、概念生成の説明力とデータの密着性を確保しており、面接調査に適している。また、データの範囲や分析テーマを設定することで方法論的限定を行うものである。GTA に適した研究はヒューマンサービス領域としており、現在起こっている問題の解決に実践的に研究結果を戻していくことが可能である。さらに、研究対象としている現象がプロセス的特性をもっていることを条件としている。本研究は祖父母が子どもの両親と互いの役割を調整しながら変化していくプロセス的特性を有していることから、データの分析に M-GTA を用いることは適正であると判断した。

面接終了後、対象者の語りを録音した IC レコーダーから逐語録を作成し、すべてのデータを分析対象とした。木下（2003）の M-GTA を参考に分析ワークシートを作成した。分析テーマは「孫の育児における役割関係葛藤のプロセス」とした。分析焦点者の立場で分

析テーマに基づき、各対象者のデータの中から「役割期待」「役割関係葛藤」「役割関係葛藤が生じた際の対処法」に関する文脈について語られている箇所を抽出してヴァリエーションを作成し、１つのヴァリエーションごとに定義づけを行い、分析ワークシートを作成した。分析ワークシートには、定義、具体例を記録し、理論的メモ欄には解釈や疑問について記述した。1 概念 1 ワークシートの作成で全データの中から類似例を探し、類似例、対局例が見当たらなければ概念の小さい理論的飽和に達したと判断した。複数の分析ワークシートを作成し、各ワークシートの関連性を検討するとともに、新たなデータ収集を並行して行い、同時進行で分析を行った。生成された概念同士の意味の類似性で類似化し、カテゴリーを生成した。

本研究の分析における妥当性を確保するために、分析過程において母性看護学における質的研究指導者のスーパーバイズを継続的に受けた。

５．倫理的配慮

いずれも自由参加とし、強制力が働かないことを約束した。また、参加に同意した後に、途中中断をすることが可能であることを紙面および口頭にて、事前に説明を行った。面接調査の実施に際しては、本研究の趣旨について説明後、研究への協力に賛同が得られた方には同意書を用いて同意を得た。面接調査で得た情報については研究のみで使用し、個人が特定されないよう、暗号化して論文や研究成果の発表時に記載することを約束した。

なお、本調査は岩手県立大学看護学研究科倫理審査委員会の審査を受け、実施した。（承認日　平成 21 年 6 月 11 日）

Ⅲ．結果

B 市内の子育て支援サポーターの代表の同意を得て、子育てサークルに参加した母親に対して研究の趣旨を説明し、対象者を募っていることを呼びかけた。10 名に説明書を配布し、後日 8 名から電話にて内諾を得ることができた。面接調査当日に再度対象者に対して文書を用いて研究についての説明を行い、同意を得た。対象者の属性は表 2 に示す。

なお、分析の結果、抽出されたカテゴリーは【　】、概念は＜　＞で示した。

表 2．対象者の属性

	A	B	C	D	E	F	G	H
年齢	50 歳代	50 歳代	50 歳代	60 歳代	50 歳代	50 歳代	60 歳代	60 歳代
職業	あり	なし	あり	あり	なし	あり	なし	あり
家族背景	実父	実母	実母	義父	義母	義母	実母	実母
孫の月齢	3 ヶ月	3 ヶ月	6 ヶ月	3 ヶ月	3 ヶ月	6 ヶ月	6 ヶ月	6 ヶ月

8 名の祖父母を対象に孫の育児における役割期待と役割関係葛藤の実態について調査した結果、祖父母は育児における役割期待として【子どもの両親を思う祖父母としての気遣い】から孫の育児に関わっていると認識していたが、子どもの両親との間で齟齬が生じていた。さらには【時代背景による育児観のギャップ】から祖父母と子どもの両親との間で役割関係葛藤が生じていた。また、祖父母は家族内でのコミュニケーションが重要であることを認識しているものの、【孫の育児における関係葛藤解消のための調整の困難さ】から役割関係葛藤が解消されない状況にあることが明らかとなった。孫の育児における役割関係葛藤の要因についてまとめたものを表 3 に示す。以下、詳しく述べていく。

（1）孫の育児において祖父母が認知している役割期待

祖父母は孫の育児において、＜苦労した経験による思いやり＞や、＜ヘルパーとしての役割意識＞をもち、＜脇役としての立ち位置＞をとりながら、＜距離を持った遠慮しあう家族関係＞を形成していた。このように、【子どもの両親を思う祖父母としての気遣い】をもちながら、子どもの両親に接していた。

＜苦労した経験による思いやり＞

現代の祖父母となっている人たちが出産・育児をしていた時代は、「産んで当たり前、育てて当たり前の時代」であり、「家のことは女がやるもの」で「夫は仕事中心」のため、夫からの支援はほとんどない時代であった。また、妊娠、出産、育児に関する情報を病院から得る機会は少なく、姑を頼りに育児を担っていた。実母である H 氏は「今みたいに福利厚生とか、産前産後の育児休暇とか、完璧になかったし。今の人に比べればうんと働いたなって気はしますね。」と語り、福利厚生が充実していない時代の中、仕事をしている女性にとって、育児はさらに負担が大きいものであった。そのため、「もうぎりぎりのところで自分を保って子どもを育てて、生活をしてそういう踏ん張ってきているから。当時のことを考えると、涙が出てきちゃいます。」と語っていた。また義母である E 氏は、「何もかもが自分らでやって、私もすごいくたびれちゃって、大変な思いをして子育てをして、仕事もして、大変な思いをしたから、私はできるだけお嫁さんにそういう思いはさせたくないなあって。」と育児で苦労した経験を切実に話していた。このように、祖母自身が妊娠中や子育てにおいて苦労を実感しているため、「娘にはできるだけのことをしてあげたい」、「嫁には苦労をさせたくない」という思いを抱いていた。さらに、H 氏は「先走って言っちゃうことがあって。変なところで苦労してほしくないなって言うのがあって・・。自分が苦労したもんだから、ついつい言っちゃうんですね。」と話していた。祖母自身が苦労した経験があるゆえ、先走って子どもの母親に介入しすぎてしまうという背景がみえてきた。しかし、こうした祖母の思いについて、祖母は子どもの両親に伝えていなかった。義母である F 氏は育児への支援について、「私も手伝ってあげたいし、やってあげたいなって思うけど、お母さん、あまり入ってこないでって息子に言われちゃうんですよ。」と語り、育児への介入の難しさを語っていた。祖父母は子どもの母親の負担を軽減させたいという気遣いから、育児を支援したいと考えているものの、子どもの両親から関わりを拒否され、介入できない現状があった。

＜ヘルパーとしての役割意識＞

孫の育児における祖父母の役割について、子育ては親の役割であり、祖父母はそれを支える“お手伝い的役割”であると認識していた。同様に、子育ての中心は子どもの両親であるため、祖父母として子どもの両親の子育てを見守り、支援を必要としているときには“ヘルパー”として支えていた。また、時代が変わり、育児に関する情報が変わってきて

いるため、「子どもの両親から頼まれることをやっていく」程度の関わりにとどめ、必要以上の介入をしないようにしていた。実父母、義父母ともに、“子育ては親の仕事”であると認識しており、祖父母はあくまでもお手伝いとしての役割であると認識していた。

＜脇役としての立ち位置＞

孫の育児における子どもの両親への関わり方として、義父である D 氏は「わたしらがね、子育てしているときはこうだったよとか話しちゃうとね、ぜんぜん年齢差って言うのがありますから、私はね、うまくいかないなって思うんですよ。」と語り、続けて「わたしらは手を出したいけれども、少し気を遣うと。あまり出しゃばらない。」と語っており、孫の育児において祖父母は一歩引いた態度をとり、育児の経験や手伝いたいという思いを子どもの両親に伝えることなく、家族関係が保てるように気遣っていた。また、実母である H 氏は「今の人たちに昔はこうだったから、こうするといいのよって言ったって受け入れてくれないじゃないですか。いいと思って言ったって、果たしていいと思っているかどうかもわからないし、今はこういう時代だからって言われれば終わりですもんね。」と語り、子どもの両親と育児方法についての考えのズレを感じているものの、子どもの両親に自らの経験談を話しても聞き入れてもらえないという認識から、意見を押しつけないように留意していた。ただし、必要なときには助言をしようという気持ちは持っていた。

＜距離を持った遠慮しあう家族関係＞

嫁と義父母との関係において、義父である D 氏は「どちらも“遠慮”って言うのがあってね、これでうまくいくと思うんですよ。親子とは違う、嫁さんとの関係っていうのは。親子とは違いますよね。ですから、時間がかかる。」と語り、また、義母である F 氏は「私も気を遣って言わない部分はあるけれども。（中略）育ってきた環境も何も違うんだから、しょうがないわって。」と語り、義父母と嫁ではこれまでの生活環境に違いがあるため、互いに気遣い、遠慮しながら、ゆっくりと時間をかけて親子関係を築いていこうとしていた。また、子どもとの付き合い方や孫との付き合い方など家族内で各々の立場が異なることから、互いの距離間を保ちながら、それぞれの居場所を確保していくことが必要であると認識していた。

表 3. 孫の育児において祖父母が認知している役割期待

カテゴリー	概念	定義
子どもの両親を思う祖父母としての気遣い	苦労した経験による思いやり	祖父母自身が妊娠中や子育てにおいて苦労をしているため、娘や嫁に苦労をさせたくないという思い
	ヘルパーとしての役割意識	子育ては親の仕事であり、祖父母はあくまでもお手伝いとしての役割であるという考え
	脇役としての立ち位置	時代の変化に合わせて、祖父母の考えを一方的に押しつけることはせず、必要なときに助言を行い、一歩引いた態度をとることで家族内の関係性を保つこと
	距離を持った遠慮しあう家族関係	義父母と嫁ではこれまでの生活環境に違いがあるため、互いに気遣い、遠慮しながら、ゆっくりと時間をかけて親子関係を築いていくこと

（2）孫の育児における役割関係葛藤の要因

孫の育児において、祖父母と子どもの両親との間で生じた役割関係葛藤の要因の 1 つは、【時代背景による育児観のギャップ】であった。その概念として＜世代間ギャップに伴う葛藤＞と＜情報化世代と経験世代の相違による考え方のズレ＞の 2 つがあった。

また、孫の育児において役割関係葛藤が生じた際の祖父母の子どもの両親に対する対応からみえてきた役割関係葛藤の要因として、【孫の育児における役割関係葛藤解消のためのコミュニケーションの困難さ】があった。祖父母は育児において、＜子どもの母親を気にかけ言葉に配慮した助言＞をしており、その中で＜家族内でのコミュニケーション不足＞を感じていた。表 4 に示す。

＜世代間ギャップに伴う葛藤＞

孫育てを担っていく過程において、祖母自身の育児時代と現代の離乳食の進め方に相違があり、子どもの母親と意見の違いが生じていた。また、現代では育児用品が豊富にあることから混乱が生じており、祖父母自身も育児用品に関する知識を希望していた。年代によって育児の知識が変化していくため、子どもの両親と祖父母との間で葛藤が生じていた。さらに、祖母自身の子育て時代は産後の入院期間が長く、臍帯が取れてからの退院であったが、現代は入院期間が短いため、臍帯の消毒の必要性が生じている。このように、祖母

自身が経験していない状態に関しては不安が生じるため、現代の育児方法に関する知識を希望していた。

＜情報化世代と経験世代の相違による考え方のズレ＞

実母であるG氏は「(娘が私に）強く（意見を）言ったり。育児についても私たちの時にはこうだったのよじゃなくて、今のやり方で、ですよね。」と語り、子どもの母親との育児観について、祖母自身の育児経験による意見よりも、現代の育児方法を子どもの母親から強く求められていた。また、H氏は「情報がありすぎるから、知識は豊富なんですよ。だから、そんなことを言わなくてもわかるのにとか、わかるのに言ってとか。」と語り、現代の母親は育児知識が豊富であることから、祖父母は子どもの母親との関わりの難しさを痛感していた。このように、祖父母の育児時代に比べ、現代の子どもの母親は出産や育児に関して十分な情報を持ち、自分なりの考え方ややり方があるため、祖父母に口出しをしてほしくないという思いをもっていると、祖母は感じていた。特に、実母に対して娘は意見を言いやすい立場にあり、強い態度で接していた。

＜家族内でのコミュニケーション不足＞

妊娠先行婚で嫁との関係性が十分築けないまま同居し、出産に至っている家族において、義母であるE氏は、「話し合いも何もない家庭だったから、やっぱしいろいろ話し合ってやっていかないと、トラブルがあったんですよね。何でも話して解決していかなきゃいけないっていうのがわかってきたもんで、つい最近ですよ。話し合いもしようということになって。」と語った。しかし、実際には「(現段階で）あまり話し合う機会がないというか、タイミングがうまくできないから、どこらまでやったらいいのかとか、向こうはどう考えているのかとかね。」と話すように、産後3ヶ月の時点では家族で育児について話し合う機会がなく、祖父母としてどこまで育児に介入してよいのかわからないという現状があった。そのためコミュニケーションの必要性を感じており、家族内でトラブルが生じる前に話し合いの場を設け、なんでも話し合える雰囲気づくりの大切さを実感していた。実父母であるA氏とB氏は、娘夫婦との同居家族においても同様にたくさん話し合いをし、互いの思いを言葉に出して伝えあうことで、トラブルを回避することが必要であると感じていた。義父母と息子夫婦の同居家族において、義母であるF氏は「息子は自分が間に立つのは嫌だから、お互いに思うことがあったら、直接話してって言うんですよ。だから、息子には

嫌な思いをさせるのもいやだし、直接話すようにしているんですけど。」と語り、息子を介して嫁に思いを伝えるのではなく、直接嫁と話し合いをするように心がけていた。しかし、「やっぱり義理の中だから、どういう風にとったかはわかりません。（中略）こっちの意図していることが伝わっているのかなと思うことはありますよね。お互いなんでしょうけど、言葉って難しいじゃないですか。だから、違うニュアンスで捉えられていたりすることがあるだろうし。」と話し、現状として義理の家族関係であるがゆえに、思いの意図がどこまで伝わっているか疑問に感じていた。

このようにいずれの祖父母も娘や嫁とのコミュニケーションの重要性は実感しているものの、実際には直接話し合う機会を設けることができておらず、お互いの気持ちを十分に伝えられない状況にあると捉えていた。

＜子どもの母親を気にかけ言葉に配慮した助言＞

祖母は自らの妊娠や育児経験をもとに、子どもの母親の食事について配慮したり、孫の離乳食においても教科書通りのやり方ではなく、孫の成長に合わせた進め方を助言していた。実母である C 氏は「意外と娘も神経質だから。細かいから、これ何グラムとか、気になるらしくて・・。何時と何時に飲んだから、次は何時ってきっちりきっちりいこうとするんですよ。でも、泣いている赤ちゃんの具合によってこれはもう駄目だな、あげなって。これだけスヤスヤしているんだから、もうちょっと寝かせてあげていいんじゃないとか。ある程度状態を見て。」と語り、授乳において孫の様子を見ながら、そのときに合った授乳方法を選択し、自らの意見を押しつけないように配慮しながら、子どもの母親に助言をしていた。さらに、実母である G 氏は「お母さんのときはこうだったよ。ああそういうことだったらいいわねっていう感じで、お話しすることはありますね。いきなり頭ごなしに私の時にはこうよって言わないように心がけています。状況を見て。」と語り、自分の経験談を押しつけないよう、伝え方にも配慮しながら、子どもの母親に助言するように心がけていた。このように、教科書通りに育児を実践しようとする子どもの母親に対し、祖母は子どもの母親の思いを配慮しながら、自らの経験を生かし、孫の状態を見て助言をしていた。

表 4. 孫の育児における役割関係葛藤の要因

カテゴリー	概念	定義
時代背景による育児観のギャップ	世代間ギャップに伴う葛藤	年代によって育児の知識が異なるため、子どもの両親と祖父母との間で葛藤が生じること
	情報化世代と経験世代の相違による考え方のズレ	昔に比べ、現代の子どもの母親は出産や育児に関して十分な情報を持ち、自分なりの考え方ややり方があるため、祖父母に口出しをしてほしくないという思いから、祖父母との間で葛藤が生じること
孫の育児における役割関係葛藤解消のためのコミュニケーションの困難さ	家族でのコミュニケーション不足	家族でコミュニケーションが図れないことから、トラブルが起こる前に、互いの思いを伝えあい、トラブルを回避することが難しい状況のこと
	子どもの母親を気にかけ言葉に配慮した助言	自らの妊娠や子育て経験をもとに、孫の様子を見ながら、押しつけにならないように、子どもの母親に伝えていくこと

Ⅳ．考察

予備研究の面接調査から、孫の育児において祖父母と子どもの両親との間で生じる役割関係葛藤の要因として、祖父母は育児における役割期待として【子どもの両親を思う祖父母としての気遣い】から孫の育児に関わっていると認識していたが、子どもの両親との間で齟齬が生じていること、また祖父母と子どもの両親との間で【時代背景による育児観のギャップ】があること、さらには【孫の育児における役割関係葛藤解消のためのコミュニケーションの困難さ】が明らかとなった。

【時代背景による育児観のギャップ】については、文献検討において先述した結果と同様であり、祖父母が育児をしていた時代と現代では育児の環境が大きく変化してきていることから、祖父母と子どもの両親との間で育児観のギャップが生じていた。井関ら（2013）は、子どもの両親に対する祖父母の捉え方として、「現代の子どもの両親は専門知識や最新の育児情報に価値を置いている」と述べており、今回の調査結果においても同様に、現代の子どもの両親は祖父母世代と異なり、育児情報が豊富であるがゆえに、経験世代の祖父母との間で役割関係葛藤が生じやすくなっていることが明らかとなった。このことは実父母と娘との関係においても、経験世代の実母の意見を素直に受け入れられない現状があった。そして、子どもの両親は知識があるがゆえに、経験世代の祖父母に対する反発が強く、北村（14998）が述べているように、従来の「姑優位型」から「嫁優位型」へとシフトしてきている現状があった。このことも役割関係葛藤の増大を招いていたといえる。そのため、祖父母が子どもの両親と同じ育児知識をもつことで、この問題は解消されると予測される。

次に、祖父母は孫の育児において【子どもの両親を思う祖父母としての気遣い】をもちながら、子どもの両親に関わっていた。祖父母は＜ヘルパーとしての役割意識＞や＜脇役としての立ち位置＞をとっている現状があったが、これは井関ら（2013）の研究において、実母は「娘（夫婦）の育児を見守る」という結果と同様であった。現代の祖父母は「聞かれれば答える」「自分は娘の補佐役」という考えであり、杉井ら（1996）の報告にもあるように、子どもの両親との役割関係葛藤の増大を懸念し、できるだけ深い介入を避け、必要時手助けをするという不干渉規範と扶助義務規範をとっていることが今回の研究でも明らかとなった。

一方で、祖母は自身の育児時代の＜苦労した経験による思いやり＞から、その苦労を娘や嫁にはさせたくないという一途な思いから、育児においてさまざまな助言をしているという現状があった。しかし、娘や嫁にとってはその関わりが“干渉”と捉えられ、役割関

係葛藤の要因の１つとなっていた。このことは実父母と娘との関係においても同様であり、役割関係葛藤が生じる要因となっていた。祖母が子どもを育てていた時代は「産んで当たり前、育てて当たり前の時代」で、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という性役割分業意識が根強い時代であり、さらに勤労している女性にとっては福利厚生が十分に整っていない状況において、多くの苦労をしてきた世代である。対象者のうち、約半数の祖母が夫の協力を得られない状況下で育児を行ってきており、多くの苦労をしたと語っていた。しかし、その思いを夫にも家族にも打ち明ける機会をもてないまま、現在に至っており、祖母の悩みや苦しみは家族に伝わっていない現状が明らかとなった。また、現代の祖父母は育児に関わりたいと思いを抱いているものの、時代の変化や子どもの両親からの拒否により、祖父母はその思いを子どもの両親に伝えることなく、一歩引いた立ち位置をとっていた。祖父母の育児に対する思いが子どもの両親に伝わっていないため、役割関係葛藤を生じさせる要因につながっていると考える。そのため、祖父母がこれまでの育児経験に伴う、育児に対する思いを表出できる場面を設け、子どもの両親と語りあう場や、思いを共有する場が必要であると考える。

そして、家族内で役割関係葛藤が生じる場面で【孫の育児における役割関係葛藤解消のためのコミュニケーションの困難さ】があった。役割関係葛藤が生じた際の対応について、池亀ら（2007）が行った多世代間葛藤に対する対処方略に関する研究では、「しょうがない」「相手に合わせる」などの譲歩的対処をとっている者が最も多いという結果であった。今回の調査においても、祖父母は子どもの母親の考えに合わせながらも、孫の状況によっては、助言する必要性を感じ、＜子どもの母親を気にかけ言葉に配慮した助言＞をしていた。その際には、自身の体験を子どもの母親に押しつけないように、言葉や話すタイミングに配慮しながら、助言を行っていた。祖父母が育児をしていた時代には姑の経験や助言を頼りに育児を行っていたが、現代においては祖父母自身の体験を話す際にも、配慮が必要な時代となってきていることがわかった。このように、育児において祖父母は子どもの両親とのコミュニケーションの難しさを抱えていることが明らかとなった。

予備研究の結果、産後 3 ヶ月の時点において、祖父母は＜家族のコミュニケーション不足＞を感じており、家族でコミュニケーションを図ることが難しい現状にあることがわかった。その理由として、１つには妊娠先行婚が要因となっていることが今回の調査で明らかとなった。妊娠先行婚で第 1 子が生まれた割合は、『平成 22 年度「出生に関する統計」の概況　人口動態統計特殊報告』によると、結婚期間が妊娠期間より短い出生＝できちゃ

った婚の割合の全国平均は 25.3%で、約 4 人に 1 人であった（厚生労働省，2000）。近年、家族関係の構築における問題点として、妊娠先行婚の増加により、妊娠期に義父母と嫁との間で家族関係が築けないまま出産、育児に至っている現状がある。このことが家族でコミュニケーションを図ることが難しい要因になっていると考えられる。三井ら（2005）の研究では、結婚期間が短い家族において、父親の役割間葛藤が大きくなっていることが明らかとなっており、夫役割適応と親役割適応への葛藤が生じていた。これらのことから、妊娠先行婚であることで、家族員個々の役割獲得や家族形成が難しいといえる。もう１つの要因として、義父母と嫁との間でのコミュニケーションの難しさがあった。これは古くから生じている問題であるが、柳川（2003）は義母との間では異世代間での考え方・やり方の相違に加え、意思疎通といった情緒的関係の難しさがあると述べている。今回の研究においても、義父母は嫁との間に“遠慮”があると語っており、そのことがコミュニケーションを図る機会を設けるきっかけを失っていた。さらに、「義理の家族関係であるがゆえに、思いの意図がどこまで伝わっているか疑問に感じた」と語る祖母もいた。このように、家族でありながら、産後 3 ヶ月においても互いの思いを確認し合う場が設けられていないことは、役割関係葛藤を解消するには困難な状況である。今回の予備研究によって、産後に家族内で役割関係葛藤が生じてから、家族で話し合う場を設けることは難しいことが明らかとなった。そのため、妊娠中に祖父母が子どもの両親と向き合い、互いの思いや考えについて語る場を設けることが必要であると考える。

第４章　初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムの開発

Ⅰ．教育プログラムの作成

１．プログラム作成の根拠

妊娠期は母親役割獲得の準備期間と言われているように、祖父母にとっても「祖父母」という新たな役割を受容していく、役割獲得過程の準備期間でもある。役割獲得は、役割演技の模倣や、空想、モデルからの脱分化のプロセスによって進められる。しかし、祖父母にとっては妊娠期に役割演技の模倣を得る機会が少なく、空想するモデルが身近にいないことで「祖父母としての役割がわからない」といった声が聞かれている現状がある（研究者，2006）。また、予備研究の結果から、孫育てにおいて、子どもの両親から祖父母に対する役割期待と、祖父母が捉えている役割認知の不一致によって、役割関係葛藤が生じている。この不一致は、祖父母が役割遂行にあたり、さまざまな思いを子どもの両親に直接伝えられないことで生じている現状がある。

役割期待の混乱を防止するには、第一に事前の役割学習を効果的に行うことが必要であり、役割知覚において他者の役割を知るには知識的、体験的学習が必要であることから（宗像，1996）、育児に関する知識を体験的に学ぶことのできるプログラムとする。先述したように育児経験のある祖父母であるが、姑に頼りながら育児を行ってきていたことや、自らが育児をしてからの年数が経っていることから、不安や戸惑いを抱えていた。そのため、育児が始まる前に、育児技術について再確認する場を設けることで、孫の育児への自信につながると考える。第二に、祖父母が子どもの両親と互いの役割期待について、語る場を設けることが必要である。予備研究の結果より、祖母自身がわが子を育てていた時代には、社会福祉制度が十分に整っておらず、夫のサポートが少ない環境下で、多くの苦労を体験してきていた。家族の中で、その思いの表出をする場がなく、そのために娘や嫁との間で役割関係葛藤が生じている現状があった。そのため、プログラムの中で、互いが語り合う場を設けることは、祖父母への準備性を高めていく上で非常に重要な内容であると考える。

そこで、初孫を迎える祖父母に対する教育として、育児において生じうる役割関係葛藤の解消に向けて、祖父母としての役割獲得を促進するとともに、祖父母と子どもの両親との関係性を強化することで、育児において祖父母の力を有効に発揮できるような教育プログラムを開発していく。

２．プログラムの目的と目標

本プログラムの目的は、「新たに祖父母となる者が現代の育児についての知識と技術を習得することで、祖父母としての役割獲得の促進につながる。また、妊娠中に祖父母が子どもの両親と向き合い、関係性を見直すことで、より関係性を強めることができる。さらに、祖父母と子どもの両親との間で生じうる役割関係葛藤の解消につながる。」とする。

プログラムの目標は、①育児における祖父母としての役割のイメージ化が図ることができる、②育児における祖父母としての役割を理解し、受容することができる、③祖父母として育児で役割を遂行できる力を身につけることができる、④子どもの両親との関係性を強めることができる、の 4 点とする。

３．プログラムの実施時期と回数

プログラムは全 2 回とし､勤務している家族員も参加しやすい土曜日の午後の開催とし、1 回あたり 2 時間とした。開催回数や時期の妥当性としては、石井（2011）の研究において、孫育児支援プログラムの多くが「2 回」「2 時間程度」「週末に開催」という結果が出ており、対象者のニーズに適合させた実施方法であるといえる。

４．プログラムの内容

本プログラムは 2 部構成とし、第 1 部は「現代の育児を理解する」、第 2 部は「子どもの両親との関係性の見直しを図る」とした。プログラムの内容は、まず、研究者（2009）の研究結果を参考にした。子どもの母親から祖父母学級に対するニーズとして要望の多かった上位 5 項目である「祖父母の役割について」「おやつの与え方」「産後の生活」「衣類の調整」「子どものしつけ」を講話に盛り込んだ。「おやつの与え方」については従来とは開始時期などが変更になった「離乳食」について説明した。また、祖父母側からもっともニーズの高かった「乳児に起こりうるトラブルについて」の講話を盛り込んだ。次に、日本助産師会で行われている孫育て講座の「育児のちがい今・昔」の内容をもとに、世代間ギャップが生じやすい内容を盛り込んだ。

さらに、本教育プログラムでは家族で自由に語り合うグループワークの時間を設けた。予備研究の結果から、現代の祖母は自らの子育て時代の苦労が多く、その苦労を子どもの母親となる娘や嫁にさせないようにとの思いから、＜苦労した経験による思いやり＞を抱いていた。しかし、育児期において家族でコミュニケーションが十分に図れないことから、

その思いが子どもの母親には伝えられず、役割関係葛藤が生じていた。そのため、家族で育児に対する互いの思いを共有しあう場を提供することが必要であると考えた。

プログラムの内容は先行研究の結果と日本助産師会という組織で行われている孫育て講座の内容から構成することで、妥当性を確保した。

表 5 に、初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムを示す。

表 5. 初孫を迎える祖父母に対する教育プログラム

時間	学習目標およびプログラムの内容	担当者
	タイトル：「じぃじ・ばぁばセミナー」	
第 1 回	第 1 部「現代の育児を理解する」	
60 分	１．本プログラムの趣旨、全 2 回の内容についての説明	研究者
	２．褥婦の身体的および精神的変化について	研究者
	学習目標：祖父母が妊婦や褥婦の生理的変化を理解することで、娘や嫁に対して情緒的側面でサポートをすることができる	
	内容：実際の胎児の重さと同じ「胎児ちゃん」人形（妊娠 3 ヶ月から妊娠 8 ヶ月）を用いて、現在の胎児の大きさや重さを実感してもらう 産後起こりうるマタニティブルーや産後うつ病についての説明と褥婦への関わり方の留意点についての説明	
	３．乳児期に起こりやすいトラブルと対処法について	研究者
	学習目標：乳児期に起こりうるトラブルを把握し、トラブルの予防に向けた対応と発生時の対処法を理解できる 従来の育児方法との違いを根拠に基づき理解できる	
	内容：便秘や乳児性湿疹等の対応について、写真や物品を用いて説明する	
	４．現代と昔の育児の違いについて	研究者
	学習目標：祖父母が社会の変化に伴う育児知識の相違を理解し、現代の育児について祖父母が子どもの両親と共通認識を持つことができる	

	内容：現代と昔の育児の違いについて、Q&A 方式で○×クイズを行い、知識の確認を行う 根拠をもとに、現代の育児への変更理由を伝える 離乳食の開始時期と留意点について説明する	
60 分	５．沐浴演習 学習目標：祖父母が育児についての技術を再確認し、育児に向けての準備を具体的にイメージすることができ、手段的側面での支援について考えることができる 内容：おむつ交換，臍の処置，便秘の際の対処法など乳幼児の世話について実際に体験する 介入方法：新生児人形、沐浴槽などの物品を用い、家庭に近い環境を整え、実際に児の抱き方や沐浴などの演習をする。演習終了後、各家族で実際の役割分担を検討してもらう。	研究者 および 助産師 ４名
第 2 回 60 分	第 2 部「子どもの両親との関係性の見直しを図る」 １．祖父母の役割について 目標：祖父母が子どもの両親との関係の中で、どのような役割を担っていくとよいのかについて考えることができる 内容：一般的な 1 日の育児の流れを提示し、各自で役割をイメージしてもらう 祖父母の役割として、「見ること」「話すこと」「聞くこと」について説明する	研究者
	２．0～3 歳までの子どものしつけについて 目標：人を育てる根っこの部分を祖父母としてどのようにして育んでいくとよいのかについて考えることができる 内容：図式化した資料と、しつけの際のポイントを伝える	研究者
60 分	３．育児における家族内での役割について 目標：祖父母が子どもの両親と向き合い、育児に対する思いについて語ることで、価値観の見直しを図ることができ、育児において情緒的側面での支援について考えることができる	研究者 および 助産師 ４名

	育児において家族内で意見の相違が出た時の対応策について検討してもらう 内容：グループワーク 介入方法：1～2 家族で１つのグループとする。1 グループにつき１人の助産師がファシリテーターとして対応する。 ● テーマについての自分の考えを付箋に書く（５分間） ● １つの付箋に１つの事柄を書く，何枚書いても良い ● 付箋の内容をもとに、１人につき３分間話してもらう ● 誰かが話しているときには口を挟まずにしっかり聞く ● 各家族成員が話し合った内容について、グループ間で発表する ● 他の家族成員の思いや考えを聴いてどのように感じたか話してもらう ● 他の家族のやり方を参考に、自分の家族を見直す	

５．プログラムで使用する資料

本プログラム終了後、「孫育て手帳」という冊子を参加者全員に配布した。この冊子は妊娠中から幼児期までの育児情報を盛り込んだもので、教育プログラムで伝えた内容を再確認できるという目的と、本プログラムでは時間制限があり、丁寧に紹介できない内容を含めることで、困ったときに読み、参考にするための冊子として配布した。本冊子は 2008 年度から 2010 年度にかけて、文部科学省科学研究費若手研究 B「祖父母教育に向けた孫育て手帳の開発と評価」（課題番号 20791732）により作成したもので、祖父母に対してニーズ調査を行った結果を基に作成したものである。事前調査では約 9 割の祖父母が孫育て手帳を希望しており、乳幼児期の安全に関する内容についてニーズがもっとも多かった。より孫の育児をイメージ化しやすいように地域助産師や育児中の母親の意見を参考にしながら素案を作成した。素案を初孫が生まれる予定の祖父母に配布し、文字の大きさや色調、内容について意見を収集し、加筆・修正し、約 70 ページにわたる手帳を完成させた。この孫育て手帳の中に盛り込んでいる内容を資料に編成しなおし、各回の朝に参加者に配布した。

Ⅱ．プログラムの運用

１．プログラム全体の運用方法

2 回にわたる教育プログラムは、土曜日の 13 時から 15 時までの 2 時間、大学内の演習室にて開催し、4 名の地域で活動をしている助産師に協力を得た。講話の場面では講義形式のような椅子の配置としたが、適宜対象者に質問を投げかけ、わが子を育てていた時の様子を語ってもらえるように工夫をした。また、第 1 部の沐浴演習では研究者自身がデモストレーションを行い、その後 5 グループに分かれて、それぞれ助産師と研究者が担当となり、アドバイスを行った。第 2 部のグループワークでは、それぞれのグループでロの字となるように椅子を配置し、飲み物を用意して自由に語れるよう配慮した。できるだけ参加型のプログラムとなるよう、○×クイズを行ったり、実際の胎児や新生児と同じ重さの人形を抱っこしてもらう等、工夫をした。

２．グループワークについて

本プログラムではファシリテーターが参加者に関わる際に、文脈療法における考え方を参考にした。文脈療法について、中釜（2010）の著書「個人療法と家族療法をつなぐ」をもとに以下説明する。文脈療法は、1980 年代後半にボゾルメニ・ナージが創始した個人と親密な関係にある人々を対象とする心理療法理論である。親密な人々の生活経験と、数世代にわたる家族の歴史を重んじるという意味において多世代理論の特徴を備えており、対人的相互交流の背後にある個人の内的プロセスや、関係性の「隠れた」側面に光を当てようとする精神分析的志向性を備えたアプローチである。家族員間で生じる問題は家族の「関係性」が深く関係しており、その背後には家族員 1 人 1 人が背負っている生活経験や歴史の相違が大きく影響しているのである。そこで、家族間の不一致や衝突の背後にある個人の内的プロセスについて、家族相互に対等な状況でそれぞれに語ってもらい、相互理解をはかり、新たな家族関係を築き上げていく。そのなかで、セラピストは多方向の肩入れをしていく。肩入れにおいては、第一に「共感」が重要である。多方向の肩入れにおける共感の特徴は、1 点目として場の構造が 1 対多数であることである。援助者とクライエントが数他の関係に思いを馳せることになる。2 点目として聴き手が他にもいるという状況であるため、語り手は緊張感を持つ。3 点目はセラピストが担う役割が家族個々の言い分をセラピスト以外の他者にわかりやすく噛み砕いて伝えるということである。現代のように人々の価値観が多様化して、世代差、男女差、個人差が広がれば広がるほど、葛藤が根深ければ

根深いほど、援助者には高度な肩入れ技術が求められる。

今回のプログラムでは文脈療法の特徴である「多方向への肩入れ」という考え方を参考にして、家族員１人１人がじっくりと自分の思いを語る時間を設け、家族員の思いをファシリテーターが解釈し、他の家族員に伝えていく役割を担っていくこととする。その理由として、予備研究で家族内において【孫の育児における役割関係葛藤解消のための調整の困難さ】があり、祖父母は育児における役割期待として【子どもの両親を思う祖父母としての気遣い】から孫の育児に関わっていたが、子どもの両親との間で齟齬が生じている現状が明らかとなった。そこで、家族内で生じうる役割関係葛藤の解消に向けて、妊娠期に祖父母が育児に対してどのような悩みや苦しみを抱えているのか、その思いを吐露する場が必要であると考えた。家族への心理的アプローチ法にはさまざまな手法がある。ブリーフセラピーのように、クライエントの持っているリソースや解決像に焦点を当て、一緒に解決を作り上げていく手法や、ソーシャルスキルトレーニングのように、家族の問題をコミュニケーション技術の側面から捉え、コミュニケーションスキルを向上させることによって問題を解決していく方法もある。しかし、現代の一般的に健康な状態にある家族では解決する力が不足しているのではなく、コミュニケーションを図るきっかけが不足していることが予備研究で明らかとなった。そこで、妊娠中に育児について家族で語り合う機会として、グループワークを設けることをプログラムに盛り込んだ。ファシリテーターは家族の問題や原因探しをするのではなく、家族員個々が解消されていない悩みや苦しみを表出し、それをファシリテーターが共感的に理解することで、思いを受け止める作業を行う。また、特定の家族員だけに焦点を当てるのではなく、家族員１人１人の思いをじっくりと共感し、家族全員で共有し、最終的には対象者にとって重要な人の積極的貢献をきちんと認められるようにしていく。

助産師は妊娠期から分娩、産褥期と長期間にわたり母子とその家族に関わる機会が多く、母子とその家族が本質的にもっている能力を最大限に発揮できるよう支援していく専門家である。そのため、助産師の専門性を生かし、それぞれの家族が抱えている悩みを引き出すことで、家族が互いを理解し、解決の方向性を見いだせるよう、ファシリテーターとして関わることが重要であると考えた。さらに、本研究の目的である初孫を迎える祖父母が子どもの両親との間で生じうる役割関係葛藤の解消に向けて、祖父母と子どもの両親との間で生じやすい世代間ギャップに伴う役割関係葛藤について、経験的に理解している助産師が介入することで、より子どもの両親と祖父母双方の思いを理解でき、介入しやすいと

考えた。そして、今回のプログラムの目的を達成するためには、地域で両親学級や新生児訪問等で子どもの両親と関わった経験の豊富な助産師に、ファシリテーターとして協力してもらうことで、より対象者の思いが表出しやすくなると考えた。

グループワークにおける課題は、祖父母および妊婦の夫に対して「出産後、ご自身が担っていけそうな育児や家事はどのようなことですか？」とし、妊婦に対しては「出産後、祖父母や夫にしてほしいことはどのようなことですか？」とした。また、参加者全員に対し、「育児において意見の相違が生じた時にはどのように対応しますか？」という問いを提示した。グループワークでは課題についての個人の考えを付箋 1 枚につき 1 つずつ書いてもらい、模造紙に貼っていく。その際、付箋は何枚使用してもよい。その付箋をもとに 1 人ずつどんなことを担っていけそうか語ってもらう。1 人が語っているときには、他の人は口を挟まず、しっかりと話を聞く。1 グループにつき 1 人の助産師が担当とし、担当助産師はそれぞれの思いを他者にわかりやすくまとめ、否定せず共感的に受け止める。全員の思いを語ってもらった後、互いにどのように感じたかを話し合ってもらい、互いの価値観のズレのある部分について認識をしてもらう。また、育児を行っていく中で役割関係葛藤が生じた際に、祖父母としてどのように対応していくかについて検討してもらう。

３．グループワークに際しての看護の均一化

グループワークを行うにあたり、研究者のみでグループワークを進めていくことは困難であり、ファシリテーターとして、地域で活躍している経験豊かな助産師の協力を得る必要がある。そして、どのように介入をしていくのかをファシリテーター間で統一する必要がある。そこで、グループワークにおける関わり方の参考となる文脈療法について、研究者が知識および技術を学修することとした。研究者は統合的心理療法研究所 IPI（Institute for Psychotherapy　Integration）主催の公開講座「臨床心理士のための理論講座」全 8 回を受講し、文脈療法の考え方や基礎理論、個人や家族に面接する際の技法について学び、プログラム実施における関わり方の参考にした。本教育プログラム実施前に、研究協力の同意が得られた助産師に対して、できるだけ同じ視点でグループワークを進行していけるよう、事前に助産師と打ち合わせを行った。対象者への関わり方に関する講義を 2 時間行い､その後具体的なグループワークの進め方に関するディスカッションを約 1 時間行った。フリーディスカッションでは家族への関わり方として、言葉や対話によって、「真実」が構成されてしまうことに配慮し、例を提示して、単なる質問にとどまらないように、質問の

工夫の仕方について具体的に説明した。また、問題を解決していこうとする考え方ではなく、今うまくいっていることを広げていこうとする考え方になるように、コーピング・クエスチョンやスケーリング・クエスチョン、ミラクル・クエスチョンについて、例を提示して説明した。そして、1 人の対象者の中で当たり前とされている問題や問題のストーリ等について、その対象者のもつ背景について語ってもらえるよう質問方法について例題を示した。協力助産師には、グループワークの進め方と対象者への関わり方について具体的な方法を明記した資料を配布し、ファシリテーターとしての関わり方を理解できるよう工夫した。

第 5 章　初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムの実施と評価

Ⅰ．研究目的

初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムを実施し、評価することを目的とする。

Ⅱ．研究方法

１．研究デザイン

初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムの開発のための介入研究

２．対象

１つの命の誕生により、妊娠中から家族員それぞれの役割獲得が必要となるため、本研究では祖父母だけを対象としたセミナーではなく、胎児の両親も参加できるプログラムとした。先行研究において、第 1 子において育児方針の相違が多く見られていることから（林ら，2000；研究者，2009)、対象は初めての孫の出産を迎える祖父母とその家族 9 組とした。また、孫の育児への祖父母の関わりの頻度が多い家族において役割関係葛藤が生じやすいことから、対象者はできるだけ同居家族であること、あるいは身近に妊婦とその夫が住んでおり、孫の育児に頻繁に携わっていく予定の祖父母を対象とした。本研究結果は、わが国の特徴の 1 つである世代間ギャップが影響を受ける可能性があることから、対象は日本人のみとした。事前に研究の趣旨を説明し、本研究の趣旨に賛同、同意の得られた祖父母を対象とし、対象の基準に合致し、参加希望のあった者すべてを対象とする便宜的標本抽出法とした。対象は新聞および病院内で開催されている両親学級にて呼びかけ、希望者は研究者に直接連絡する方法をとった。

３．データ収集方法

１）研究期間

プログラム開催日：平成 25 年 1 月 19 日、26 日の 2 日間

面接調査期間：平成 25 年 5 月～7 月下旬

２）データ収集の内容と方法

本教育プログラムを評価するために、①グループワークにおける参加者の語りの内容、②質問紙調査、③面接調査、という 3 つの方法を用いた。

１）グループワークにおける参加者の語りの内容

グループワークにおいて、祖父母やその家族がどのような思いを語り、また語ることによって、これから始まる孫の育児において、祖父母はどのように役割調整を行っていこうと考えているのかを把握するために、ファシリテーターである助産師に、参加者の語りについて可能な限りメモを残しておくよう依頼した。ただし、グループワークのねらいは、家族員の語りをじっくり傾聴することであり、メモに集中しないよう留意した。プログラム終了後、研究者と協力助産師が集まり、それぞれのグループでどのような語りがあったのかを確認する時間を設け、メモした用紙にデータを追加した。

２）質問紙調査

プログラム開催初日の実施前に祖父母に対して下記の質問紙調査を実施し、また産後 3ヶ月時にも同様の質問紙調査を行い、プログラムの評価を行った。なお、質問紙調査はプログラムを評価していく上での一指標であり、絶対的な評価指標としては用いないこととした。

（１）祖父母の役割獲得状況に関する調査

本セミナーの目的・目標に基づき、独自に作成した 10 項目からなる質問紙である。内容は祖父母としての役割獲得状況を把握するものであり、孫の育児に対する喜びや育児対処能力、祖父母としての役割意識の程度と、子どもの両親との関係性から構成されたものである。なお、これらの内容は石井ら（2008）の調査を参考に作成した。

（２）情緒的役割関係葛藤尺度

宗像（1996）は家族のそれぞれの状況や立場に伴う保護、統率、追従、自律などという情緒的な役割イメージがあると述べている。そして、子どもの育児という手段的役割を遂行する場合でも、期待する、あるいはされる情緒的役割イメージが異なり、父と母、また嫁＝母と姑＝祖母の間においてズレることがあると述べている。この情緒的役割期待をめぐって家族間でズレが生じ、お互いが不快さや不安を抱き、自分たちの感情が押さえられないくらいに高まるとき、情緒的役割関係の葛藤が生じる。本プログラムにより、どれだけ役割関係葛藤が変化していくのかを明らかにするためにこの尺度を用いた。情緒的役割

関係葛藤尺度は 9 項目で構成され、2 検法で得点が高いほど、情緒的役割関係葛藤が高い。Cronbach の α 係数は 0.83 と内的整合性が確認されている。

（3）役割受容尺度

三川（1990）は役割の特徴について、その人が自分の人生における役割にどの程度満足し、それを評価しているか、あるいはそれらの役割をどの程度達成し、どのような有能感を得ているかという役割受容と密接な関係があると述べている。孫の出産を迎え、それまでの親という立場から祖父母という立場に変化していく過程において、ライフスタイルの変化を余儀なくされ、新たな役割に対する不安も生じてくる。そこで、本プログラムでは祖父母という新たな役割について認識し、受容していけるよう、教育プログラムを実施した。プログラム実施前後で、祖父母の役割受容がどのように変化していくかを把握するために、客観的指標の 1 つとしてこの尺度を用いた。

本研究では自分の生き方や生活に対する満足感を表す、役割満足についての 8 項目と、自分の果たすべき役割のほかにもさまざまな役割を積極的にこなしていくという役割達成についての 7 項目の計 15 項目を用いた。Cronbach の α 係数は役割満足 0.87、役割達成 0.74 であり、内的一貫性が認められている。

（4）家族機能測定尺度

家族関係の測定用具の開発・研究において、1980 年代頃から盛んに使用されてきたのが Olson（1985）の円環モデルである。Olson は家族システムにおいて、家族関係を適応性、凝集性、コミュニケーションの 3 つに集約している。家族凝集性は家族員を結び付けている絆であり、話し合いや役割といった構成要素が含まれている。また、家族適応性では情緒的結合や時間、空間といった要素で構成され、家族凝集性と家族適応性の 2 つの側面を促進する働きをするのが家族コミュニケーションである。この 3 つの次元について、草田（1993）をもとに説明する。

第 1 の次元の凝集性は家族メンバーが互いにもつ情緒的つながりであり、凝集性が非常に高いレベル、あるいは非常に低いレベルでは家族機能がうまくはたらかず、中間レベルでは家族機能がよくはたらく。第 2 の次元の適応性は家族に危機的状況や発達的危機があった場合に、家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力である。凝集性の次元と同じく、非常に高いレベルや非常に低いレベルでは家族のライフサイクルを通して

問題が多く、中間のレベルでは家族機能が適切にはたらく。第 3 の次元であるコミュニケーションは凝集性と適応性の 2 つの次元がうまく機能するように促進的なはたらきをもつ次元である。

育児において、祖父母と子どもの両親との間で役割関係葛藤が増大した際に、この 3 つの次元のバランスが崩れることで、家族機能が低下していくと考え、家族機能の側面から本プログラムを評価した。草田（1993）は Olson の考えをもとに、本尺度を作成しており、今回の研究で用いることとした。

３）面接調査

祖父母は孫の育児においてどのような役割葛藤を経験し、どのように役割を遂行していたのかを質的に評価するために産後 3 ヶ月時に面接調査を行った。現在、約 8 割の母親が出産直後から祖父母の支援を受けている状況であり、産後 1～2 ヶ月間は祖父母のもとで育児を行っている現状にある。産後 3 ヶ月になると、自宅に戻って家事と育児を調整しながら新たな生活を始めていく。この産後 3 ヶ月は母親役割獲得プロセスにおいて、出産後の公式的な段階、非公式的な段階を経て、個人的段階に移っていく時期である（Mercer, 1981）。そして、新たな生活の場で、子どもの母親は自分の役割をライフスタイルに合わせて適合させていく段階にある。また、子どもの母親の身体的側面からみても、産後 8 週間で妊娠前の状態に回復するといわれており、産後 1 ヶ月時に比べて産後 3 ヶ月は心身ともに安定してきている時期にある。祖父母にとっても、産後 1 ヶ月は祖父母として新たな役割を遂行していくために、生活の調整をしながら子どもの母親を支えていくため、孫の世話を重荷と捉えたり、負担に感じる祖母もいる（久保ら,2008；津間，2013）。しかし、子どもの母親が徐々に育児に慣れ、非公式的な段階に入ることで、祖父母の負担が軽減してくると予測される。そのため、研究対象者である祖父母および子どもの母親が、出産から現在までの育児状況を冷静に振り返って考えることができる産後 3 ヶ月時に、面接調査を行うことが妥当であると考えた。さらに、プログラムの評価は、妊娠期に受講したプログラムについて、育児の現状とともに、プログラムでの学びを振り返りながら、調査を行っていくため、これよりも遅い時期になると振り返りが困難であると考えた。この先も孫の育児において、役割関係葛藤は生じていくものであるが、産後 1 ヶ月頃までの公式的段階を経て、祖父母としての役割を獲得してきている産後 3 ヶ月の時点で、教育プログラムの効果を検証できると考えた。

面接の対象者はプログラムに参加し、面接調査に同意が得られた実父母、義父母、子どもの両親、また参加しなかった子どもの両親とし、同居の有無も含め、関心相関的に抽出した。子どもの両親には、祖父母がプログラムに参加したことで祖父母がどのように変化したのか、あるいは祖父母との関係性がどのように変わっていったのか、という視点で調査に協力して頂いた。

面接内容は、①孫の育児において家族内でどのように役割を遂行しているか、②出産後祖父母は子どもの両親との間でどのような考え方のズレがあったか、③考え方のズレが生じた際に、祖父母としてどのように対応をしたか、の 3 項目とした。

４．分析方法

１）グループワークにおける参加者の語りの内容

グループワークで語られた内容について、意味を損なわないように素データに忠実に、内容分析を行った。

２）質問紙調査

SPSS Statistics Ver21.0 を用い、プログラム実施前後での得点比較をし、Wilcoxon の符号付き順位検定を行った。いずれも有意水準は 5%とした。

３）面接調査

面接終了後、対象者の語りを録音した IC レコーダーから逐語録を作成し、すべてのデータを分析対象とした。木下の継続的比較分析法を参考に、分析を行った。分析焦点者の立場で何度も繰り返しデータを読み、各対象者のデータの中から「役割遂行」「役割関係葛藤」に関する文脈について語られている箇所を抽出した。次に、背景が似通っている別の対象者の語りを選択し、比較検討しながら類似性と差異性を抽出した。面接を重ねるごとにこれを継続して行い、次の対象者の面接や分析に活用した。最後に、抽出したデータの類似性と差異性を検討しながら、カテゴリー化する作業を繰り返し、相互の関連性に基づいて命名した。

なお、孫の育児における役割関係葛藤の解消についての判断は、子どもの両親と祖父母との関係において、情緒的役割（統率、調整、保護、自立、追従、合わせる、甘える）期待をめぐり、家族成員間でズレが生じた際に何らかの手段を用いて解消されたと、対象者

自身が判断した状態とした。

５．倫理的配慮

「岩手県立大学看護学部研究倫理の手引き」に基づき、以下の点に留意した。

１）研究協力への権利の保障について

参加および面接調査、質問紙調査への研究協力はすべて任意であり、途中中断が可能であることを事前に説明した。

２）情報の開示について

プログラムへの参加者の募集は、新聞およびポスター掲示等で行い、希望者が研究者へ電話連絡する方法とした。なお、募集の際には質問紙調査があることを明記し、開催当日に再度質問紙調査について口頭および紙面にて説明した。

３）プライバシーおよび匿名性の保証について

質問紙調査を行う際には、開催前後の比較をするため、個人が特定されないように各自でニックネームをつけて頂くよう依頼した。調査によって得られたデータは、論文作成および学会への研究成果の発表時に、個人が特定されないよう暗号化して記載した。

４）協力助産師への謝礼

地域で活動をしている助産師であり、勤務の調整をしたうえで本プログラムに協力してくださることを考慮し、謝礼として１名につき１万円（5 千円（2,500 円／時間）×2 回）を支払った。なお、本教育プログラムの実施にあたり、グループワークの進め方について共通認識を持つために、事前に 3 時間程度の打ち合わせが必要であることを説明し、承諾を得た。

なお、本調査は岩手県立大学看護学研究科倫理審査委員会の審査を受け、実施した。（承認番号　23-D03）

第６章　結果

Ⅰ．ケースの概要

プログラムへの参加は第 1 回 23 名、第 2 回 22 名であった。1 回目に参加した祖父 3 名が仕事の都合で 2 回目に参加できなかった。しかし、1 回目に仕事で参加できなかった子どもの父親 2 名が 2 回目に参加していた。そのため、2 回目の参加者は 1 名少ないだけで、ドロップアウト率は低い結果であった。

すべての参加者のうち、18 名の参加者から面接調査に対する協力への同意が得られた。また、プログラムには参加していなかったが、実母がプログラムに参加した子どもの母親 2 名から面接調査への同意が得られた。各自が希望する場所と時間を設定し、1 時間から 1 時間半程度の面接調査を行った。対象者の属性については表 6 に示す。

今回参加者である 9 組の家族のうち、2 組は出産後も子どもの両親が遠方に住んでいることから、孫の育児に直接関われない状況にあった。そこで、今回は里帰りや同居などで、祖父母が孫の育児に密に関わった 7 組の家族について、役割関係葛藤の現状や役割遂行の実態について具体的に述べていく。

表6. 対象者の属性

	対象者	孫の月齢	同居の有無	孫育ての頻度	孫育ての不安	プログラムに参加した他の家族員	面接調査協力者
ケース１	実父（A氏, 60歳代） 実母（B氏, 60歳代）	2ヶ月	別居（県外）	里帰り中毎日	あまりない	娘	娘（C氏, 30歳代）
ケース２	義父（F氏, 60歳代） 義母（G氏, 60歳代）	3ヶ月	同居	毎日	まったくない ときどきある	息子, 嫁	息子（D氏, 30歳代） 嫁（E氏, 30歳代）
ケース３	実母（H氏, 60歳代）	3ヶ月	別居（県内）	1ヶ月10～15日	あまりない	実父	娘（I氏, 30歳代）
ケース４	実母（J氏, 70歳代）	3ヶ月	別居（同市内）	毎日	あまりない	娘, 婿	婿（K氏, 30歳代）
ケース５	実父（L氏, 60歳代） 実母（M氏, 60歳代）	3ヶ月	別居（県外）	週1回	あまりない	なし	なし
ケース６	実父（N氏, 70歳代） 実母（O氏, 60歳代）	2ヶ月	別居（県内）	里帰り中週4～5日 里帰り中毎日	ときどきある	義母	娘（P氏, 30歳代）
ケース７	義母（Q氏, 60歳代）	3ヶ月	別居（県内）	週1回	ときどきある	義父	なし
ケース８	義父（R氏, 70歳代） 義母（S氏, 60歳代）	3ヶ月	別居（県外）	ほとんどない	あまりない	なし	なし
ケース９	義母（T氏, 60歳代）	2ヶ月	別居（県内）	ときどき	ときどきある	義父	なし

Ⅱ．グループワークによる効果

ケースごとにその様子を述べていく。

ケース 2 は妊婦および夫、夫の両親でプログラムに参加していた。グループワークでは、妊婦の夫である D 氏が自らの父親に対する幼少期の思いを多く表出していた。D 氏は「自分の父親はお風呂も入れたことがないような父だったので、あまり父親には構ってもらえなかった。自分はそうならずに育児に関わっていきたい。」と自分の父親に対する思いを赤裸々に語り、育児に対する前向きな気持ちは、自身の幼少期の体験が影響していると述べていた。それに対して、D 氏の父親である F 氏は「仕事が忙しくて、自分の子どもの育児には関われなかった。（孫の育児では）できることはやってあげたい。無事に生まれてほしい。」と語っていた。このように、ケース 2 ではグループワークを通して、これから祖父となる父親が初めて息子に対し、自らの育児時代には仕事中心で、子どもに関わることができなかった反省を語るとともに、孫の育児における協力の意思について伝えることができていた。

さらに、D 氏は「妻が妊娠中から不安が強いので、産後うつとか、マタニティブルーになるんじゃないかと心配している。直接、親に話すことはできないので、第 3 者がいてこういう機会があってよかった。」と語り、産後の妻の状態に対する不安を表出し、普段は両親にさえ直接話せないことを、他者の存在があることで表出できていた。このことは D 氏の両親の立場からみると、息子が産後について不安を抱いていることを知る機会になっていた。

D 氏はグループワーク終了後に、「（家族で）話す機会はなかったので、今回のような場はいい。面と向かって話せないことが言えてよかった。」と話し、F 氏は「手助けする気持ちがあるっていうことを息子夫婦に伝えられた。」と話し、同居をしていても日常生活の中では互いの思いを伝えあう機会がないが、今回のグループワークによって、祖父母となる親も息子夫婦に対して、その思いを伝え、共有することができていた。

ケース 6 は祖父母となる両親のみの参加であった。このケースでは、祖母となる O 氏が自身の育児時代のことに触れ、涙を流しながら、「夫は仕事で忙しく、協力が得られなくて、1 人で子育てをしていたので、つらかった。」と当時の苦労を赤裸々に語っていた。それに対して、夫である N 氏は「こういう話を初めて聞いた。家族の思いがわかってよかった。これからはどんどんサポートをしていこうと思う。」と語り、グループワークによって祖母は自然と過去の苦労した体験を表出することができ、それにより夫は妻の思いを認識し、

妻へのサポートを重視していきたいと宣言し、互いに支え、支え合える関係づくりを見直すことができていた。

ケース 4 は祖母となる J 氏と娘夫婦の参加であった。ケース 4 では、妊婦が出産早期に仕事への復帰意欲が強く、グループワークを行う以前から、祖母を中心に育児をしていく予定であることが家族内で話し合われていた。J 氏は「子育ても家事も全部自分でやる。娘が仕事に復帰したら、朝私のところに子どもを置いていってもらえればと思う。」と語り、育児への積極的な意思を主張していた。それに対して、J 氏の娘は「仕事が大事なので、子どもは母に任せていく予定。健診とか予防接種はパパって決めている。私は仕事を大事にしたいので。うちの両親はけんかが絶えなかったので、孫の前ではしないでほしい。」と語り、家族内でのぞれぞれの役割について考えを述べていた。また、幼少期からの両親の関係性の悪さを孫には見せないようにと苦言を呈していた。婿である K 氏は「お義母さんに育児は任せたいと思う。でも、洗濯物の移動とか、できる限りおむつ交換とかお風呂とかはやっていきたいと思う。」と語り、育児の主体を祖母に置きつつも、可能な限り育児に関わる姿勢を見せた。J 氏は「本当にいいお婿さんなんです。」と話し、ケース 4 では育児における役割のイメージ化が図れており、祖母は育児に向けて順調に役割を獲得していた。

ケース 8 は遠方に息子夫婦が住んでおり、プログラムには祖父母となる夫婦で参加していた。祖母となる S 氏は「自分の子育ての時には働いていて、忙しくて抱いてあげられなかった。孫はしっかり抱いてあげたい。」と語り、自身の育児時代の反省をもとに、孫の育児には関わっていきたいという意思を述べていた。また、祖父となる R 氏は「(自分の子育て時代は) 人との付き合いに必死で、家のこと何もしなかった。孫が生まれると聞き、自分たちなりに勉強をしておこうとセミナーに参加した。そのことを息子に話すと、『こっちでやるから必要ない』と言われ、ショックだった。娘の出産のときに生かしていきたい。」と語り、仕事中心で息子の育児に関われなかった反省を踏まえ、今回のプログラムに参加したが、息子から育児への参加を拒否され、ショックを感じていたことを表出していた。

グループワーク終了後、R 氏は「(自分は孫育てに向けて) やる気満々なのに、息子からは必要ないといわれて、寂しかった。でも、(今は) 見守ってあげたいと思う。」と語り、グループワークでショックだったという思いを吐き出すことで気持ちの切り替えができ、R 氏なりに祖父母としての役割を受容していた。

ケース 9 は祖父母となる夫婦での参加であった。祖母となる T 氏は「長男の子どもだから、期待が大きい。でも、今は時代が変わったから、子どもたちを尊重して出すぎないよ

うにしようと思う。話し合って尊重してあげる。あまりにも違うときには正していきたい。」と語り、長男の孫であることの期待を素直に表現しつつ、今回のプログラムを受講したことで、時代の変化を捉えることができ、息子夫婦と話し合っていきたいという気持ちに切り替わっていた。また、T 氏の夫は今回のプログラムに参加したことで、孫の育児への意欲が高まり、「自分は 1 回しか（子どもを）お風呂に入れたことがなかった。孫にはできるかな。」と語り、祖父母としての役割を順調に獲得していた。

ケース 1 は妊婦と夫、妊婦の実父母での参加であった。ケース 1 では、妊婦である C 氏が育児における家族内の役割について「自宅に戻った時には夫中心に、子どもの母親と両親との間での調整役になってほしい。」と語り、グループワークで娘の思いを知ることができ、実母である B 氏は「(娘が）やってほしいことがわかってよかった。」と述べていた。実母にとってグループワークは、育児における祖父母としての役割について娘の具体的な思いを知る機会となり、祖母としての役割について考えるきっかけとなっていた。

Ⅲ．質問紙調査によるプログラム実施前後の変化

１．祖父母の役割獲得状況に関する調査（表 7）

プログラムを受講する前と受講した約 3 ヶ月後の結果を比較したところ、祖父母は育児対処能力に関して、「現代の育児についての知識がなく不安だ」という項目がプログラム実施前は平均値 3.35（SD0.70)、プログラム実施後は平均値 2.33（SD1.07)、「育児に関する技術ができるか不安だ」という項目がプログラム実施前は平均値 3.35（SD0.79)、プログラム実施後は平均値 2.08（SD0.90）であり、祖父母はプログラムへの参加によって現代の育児についての知識や技術への不安が弱まっていた（$P<.01$)。また、祖父母の役割意識については「祖父母として育児にどのように関わったらよいかわからない」という項目がプログラム実施前は平均値 3.29（SD0.85)、プログラム実施後は平均値 1.83（SD0.83）であり、「子ども夫婦から求められている祖父母の役割について理解している」という項目がプログラム実施前は平均値 2.88（SD0.86)、プログラム実施後は平均値 3.33（SD0.49）であり、育児における祖父母の役割意識が強まり、祖父母として求められている役割を認識していた（$P<.01$，$P<.05$)。さらに、子どもの両親との関係性については、「育児を手伝っていく上でどこまで介入して良いか子ども夫婦に遠慮がある」という項目で、プログラム実施前は平均値 3.06（SD0.90)、プログラム実施後は平均値 2.25（SD0.97）であり、育児を行っていく中で、祖父母の子どもの両親に対する遠慮が弱まっていた（$P<.05$)。

このように、プログラムに参加することによって、祖父母は孫の育児についての知識や技術を習得し、祖父母としての役割意識が芽生え、祖父母としての役割を遂行することにつながっていた。

表 7．祖父母の役割獲得状況に関する調査

項目	Mean±SD		*P*値
	プログラム実施前（n=15）	プログラム実施後（n=12）	
孫育てができることに喜びを感じている	3.88±0.33	3.75±0.87	n.s
現代の育児についての知識がなく不安だ	3.35±0.70	2.33±1.07	0.007
育児に関する技術ができるか不安だ	3.35±0.79	2.08±0.90	0.003
自分の子育て経験や知恵を子ども夫婦に伝えていきたい	3.12±0.93	3.50±0.52	n.s
祖父母として育児にどのようにかかわったらよいかわからない	3.29±0.85	1.83±0.83	0.004
子ども夫婦から育児参加への期待が大きいと感じている	3.18±0.81	2.83±1.03	n.s
子ども夫婦から求められている祖父母の役割について理解している	2.88±0.86	3.33±0.49	0.023
育児を手伝っていく上でどこまで介入して良いか子ども夫婦に遠慮がある	3.06±0.90	2.25±0.96	0.021
育児について子ども夫婦と考え方にズレが生じた場合には子ども夫婦の意見を尊重しようと考えている	3.82±0.39	3.83±0.39	n.s
自分たちの生活の質を保ちながら育児に関わっていきたい	3.65±0.49	3.33±0.49	n.s

*P*値：Wilcoxon の符号付き順位検定

２．祖父母の役割受容と家族機能、情緒的役割関係における変化（表 8，9）

役割受容尺度はプログラム前後で有意な差はみられなかったが、プログラム実施前は平均値 55.24（SD6.85）点からプログラム実施後は平均値 56.75（SD5.77）点と若干高くなっていた。また、家族機能尺度においては、プログラム実施前は平均値 70.67（SD8.83）、

プログラム実施後は平均値 72.42（SD7.43）とやや高くなっていたものの、有意な差はみられなかった。しかし、家族機能測定尺度の結果をもとに、家族の凝集性と適応性について集計し、日本語版 FACESⅢに沿って分類した結果、プログラム実施前には極端群が 6 人（40.0%）であったのに対し、プログラム実施後は 2 人（16.7%）に減少し、中間群が 6 人（50.0%）に増加していた。情緒的役割関係尺度においては、プログラム実施前は平均値 1.13（SD1.54）、プログラム実施後は平均値 0.83（SD0.83）であり、やや低下していたが、有意な差はみられなかった。

表 8. プログラム前後での 3 つの尺度における合計得点比較

尺度	Mean±SD		*P*値
	プログラム実施前（n=15）	プログラム実施後（n=12）	
役割満足	30.00±4.14	31.08±3.26	n.s
役割達成	25.24±3.67	25.67±3.20	n.s
家族機能測定尺度	70.67±8.83	72.42±7.43	n.s
情緒的役割関係葛藤尺度	1.13±1.54	0.83±0.83	n.s

*P*値：Wilcoxon の符号付き順位検定

表 9. 家族機能測定尺度による家族の変化　　人（%）

	プログラム実施前（n=15）	プログラム実施後（n=12）
バランス群	6（40.0）	4（33.3）
（詳細）	結合/柔軟 2 結合/構造化 2 分離/柔軟 2	結合/柔軟 1 結合/構造化 3
中間群	3（20.0）	6（50.0）
（詳細）	膠着/構造化 2 結合/無秩序 1	膠着/柔軟 5 結合/無秩序 1
極端群	6（40.0）	2（16.7）
（詳細）	膠着/無秩序 6	膠着/無秩序 2

Ⅳ．産後３ヶ月時の育児の実態からみたプログラムの効果

産後３ヶ月までの間、直接孫の育児に携わった７組の祖父母は、子どもの両親との関係において役割関係葛藤が増大することなく、子どもの両親との間で役割を調整しながら、育児を遂行していた。詳細について、ケース毎に述べていく。なお、語りは斜体で示した。

A．ケース１

１．ケースの紹介

プログラムには実父母のみ参加し、娘は参加しなかった。参加した理由としては、「初孫であり、昔の育児との違いを知っておいた方が良いと思った」からであった。娘は妊娠末期から里帰りをしており、出産後は２ヶ月まで実家で過ごしていた。実父母ともに仕事をしており、週の半分は日中不在のことがあるが、仕事から帰宅後、育児を支援していた。今回、子どもの母親からも面接調査への協力が得られた。

２．役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果

ケース１では、本プログラムへの参加による効果として、＜産後の母親への理解＞＜現代の育児に対する共通理解＞の２つがあった。

まず、＜産後の母親への理解＞について説明する。プログラムの中で、出産直後の場面で多くの家族は新生児ばかりに目が向きがちであるが、産婦へのねぎらいの言葉をかけることの大切さについて説明をした。実母はこの説明が印象的であったといい、出産直後娘に対し、出産へのねぎらいの言葉をかけていた。この言葉かけについて娘は嬉しさを感じており、子どもの母親への情緒的側面でのサポートとなっていた。

じぃじ・ばぁばセミナーの中で、お産をした後、労いの言葉って言ってましたでしょ。それはたしかに自分が妊婦の時はそういう風に考えはしなかったけど、今度逆になった時、労いの“ごくろうさん”って言うのはありがたいよね。気づかせてもらえたから、良かったなと思います。（B氏）

（実母が）一緒に陣痛室にいてくれて、戻ったときに、もちろんこの子が生まれてよかったねって言う言葉。その他に、私にも“ありがとうね”って言ってくれたので、それはありがたかったですね。（C氏）

また、子どもの母親は母親学級やインターネット等で情報を得ているが、祖父母が本プ

ログラムに参加し、最新の育児情報を得てきたことで、祖父母は子どもの母親と知識を確認しあうことができ、＜現代の育児に対する共通理解＞を図ることができていた。祖父母が最新の育児情報を得てきたことは、子どもの母親にとって、育児をサポートしてもらう上で、ありがたいものであったと評価していた。

いろんな話を聞いてきたことが、すごいありがたかったですね。私も母親学級みたいなやつに行って重なるところはあったんですけれども、私もそんな話聞いてきたよとか、逆にそれは、知らなかったとか、という話があったりとか。やっぱり私も里帰りが多かったので、期間が長かったから、色んな前の知識じゃなく、今の、ベビーパウダーはよくないとか、靴下は履かせなくてもいいよとか、そういう昔の知識じゃなく、新しい知識を持ってくれてるから、それも助かりましたね。（C氏）

そして、実母の育児時代には断乳や白湯の必要性を言われていたが、祖母はプログラムに参加したことで現代と昔の違いを知り、孫の育児において実践につながっていた。

おっぱいも前は、今はなんか、飲みたいまんま飲ませるって言っていましたよね。昔はあんまりやりすぎないって。私も勤めてたので、1年以内でやめました。それに、母乳をやっていて、お風呂上がってから、この暑さなので、湯ざましあげようかなどうしようかなって言っていたんですけど。飲ませなくていいっていう話だったから、おっぱいだけあげなって言っていたんです。（B氏）

さらに、実母はプログラムには参加していない義父母に対して、プログラムで得た育児の知識を伝え、役割関係葛藤の解消を図っていた。こうした実母のサポートによって、娘である子どもの母親は助けられていた。

母が仕入れてきた知識を、今は昔と違うみたいですよって言うと、あぁ、そうなんだって言って受け入れてくれるので、助かります。（C氏）

このように、ケース１では役割関係葛藤が生じやすい産後２ヶ月までの育児において、祖父母は子どもの母親との間で意見の相違は感じていなかった。しかし、子どもの母親からの評価として、１度だけ孫可愛さゆえに生じた実母の干渉によって、実母との間で関係葛藤を感じていた。

意見が合わないということはないですね。でも、1回私、母に怒ったというか、むかつ

いたというか。私がやりたいのに、やりすぎて。ばぁばのところにおいでって、ぽいっと持って行かれちゃうので、カチンと来て。もういいよ、やんなくってって。ありがたいけれども、ちょっとそっとしておいてっていう、そういう時もありましたね。（C氏）

３．家族関係の実態からみたプログラムの効果

ケース１の祖父母は、育児の中心は子どもの母親であると認識し、状況に応じて娘をサポートしていた。本プログラムでは、祖父母の役割について「見る」「聞く」「話す」の３つを説明しており、子どもの母親を見守り、必要時には孫の面倒を見て、子どもの母親の不安や話を聞き、状況に応じて祖父母自身の体験談を話すことの大切さを伝えていた。

ケース１の実父母は、この３つの役割を遂行し、手段的側面や情緒的側面から娘を「保護」しながら、育児を支えており、娘は実父母に対して自然に「甘える」ことができ、役割関係葛藤をほとんど生じることなく育児をしていた。また、実母は娘の義父母に対して、現代の育児について得た知識を提供し、娘と義父母との「調整」を図っていた。

ほとんどママが見るんだけど、お掃除したり、いろいろ用事があるときはあやしています。（B氏）

夕方くらいには帰って来てくれるので。そこからの、あやしてくれたり、それから、眠たいときに泣きだすので、寝かしつけをやってくれたりだとか。（C氏）

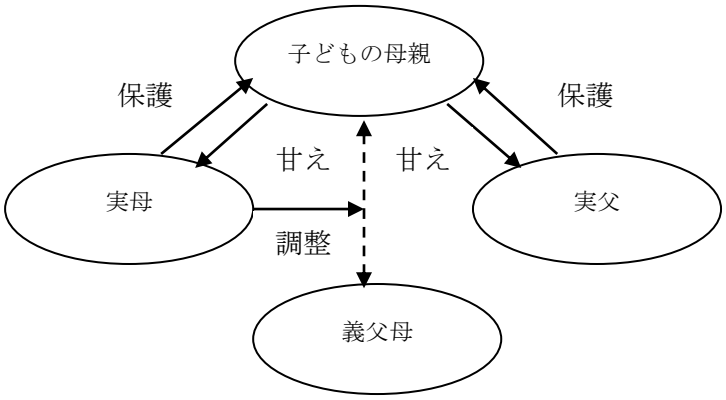

図 2. ケース１における産後２ヶ月時の家族関係の実態

Ｂ．ケース２

１．ケースの紹介

家族構成は祖父母と息子、嫁の４人家族であった。プログラムには家族４人で参加していた。参加した理由としては、息子が「自分の両親に今の育児について知ってもらいたかった」という強い思いと、息子自身、「育児についての知識を得たい」という思いがあった。その背景には、息子自身の幼少期に、実父から育ててもらった体験がなく、自分の子どもには積極的に関わっていきたいという思いが根底にあった。息子にとって幼少期の体験が現在の育児への意識に強く影響をしていた。グループワークにおいても息子はその思いを語っていた。息子の両親はグループワークを通じて息子の思いを認識し、息子の育児に関わることができなかった事実を深く受け止めていた。また、嫁は退院後、義理の両親と同居している自宅に戻り、夫と義父母から支援を得ていた。

（息子の実父母に）ちょっとお願いして行った。なにせ初めてのことですから。そこで勉強させてもらえたらなって思って。（D 氏）

彼が本音で言いたいことは、やっぱりお父さんが仕事一生懸命だったでしょう。うち自営だったので。まあ、関わっていないところが根底にあると思うの。だから、自分がやってあげたいとか、すごくあると思うので。お父さんもわかっていますよ。自分があの頃は高度成長の前だったので、忙しかったし、あの、色んな意味で。なんていうかな、関われなかった。（G 氏）

２．役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果

ケース２においては、本プログラムへの参加による効果として、＜現代の育児に対する共通理解＞が得られていた。一方で、現代の育児に理解の得られない祖母との衝突が生じていた。

本プログラムに参加した祖父母は、育児方法の変化について理解を示しており、時代に伴う育児方法の違いについて根拠に基づいて説明されることで、納得につながったと話し、手段的側面でのサポートにつながっていた。

きっと、年寄りとかもさ、お部屋の中では履かせない方が、運動神経が良くなるんだって、とかさ、そういう風にいえば納得するんだけど。（G 氏）

一方、プログラムに参加しなかった嫁の実母は、自分の育児経験をもとに子どもの両親

にアドバイスをすることが多く、子どもの両親との間で育児の仕方について考えが合致しないことから折り合いがつかない状況にあった。そのため、嫁の実母と子どもの両親との間で現代の育児に理解の得られない祖母との衝突があり、役割関係葛藤が生じていた。

もう納得が。私の実家の母も、それで私を育てているから、実績じゃないけど、納得がいかないみたいな。湯ざましはすごい飲ませたがったり。そういうのが結構あった。結構強く言っても、やっぱり納得いかない、という感じで。うちの母の方は。なんか、年寄りの言うことを聞かないんだから！という感じで。（E 氏）

もめました。まずは、靴下でしょう。あとは白湯。何で飲ませないんだって。（プログラムに参加した義理の両親の方が実母よりも理解があるんですね？という問いに対して）それは、全然違かった。（嫁の実母にも）行ってほしかったなと思ったな。（D 氏）

子どもの父親は、現代の育児に理解の得られない祖父母との間で役割関係葛藤が生じることについて、看護者からの説明が必要であると実感していた。このことから、経験世代の祖父母で、かつよりその意識が根強い祖父母には本プログラムによる介入が必要であり、祖父母と子どもの両親の関係性を保つためにも、看護者の介入が必要であることが明らかとなった。

そんな風に言っても（靴下を履かなくてもいい理由を伝えながら実母に話しても）、なかなか聞いてくれない。生の、本当に先生に言ってもらわないと納得しない。大変だった、最初は怒っちゃって。最後っていうか、ずっと（靴下を履かせた方がいいって）言っていた。（D 氏）

３．家族関係の実態からみたプログラムの効果

ケース 2 では、プログラムにおけるグループワーク以外に、妊娠中に育児における各家族員の役割について家族で話し合う機会はなかった。その理由として、息子は実父母との価値観の違いにより、役割関係葛藤が生じることを恐れていたと捉えていた。

育てるっていうのは、育てた経験のある人と、これから育てる人の間の、やっぱりそう簡単に折り合いはつかないんじゃないかなと。最初の俺の印象ですよね。感覚的なものとか、正しいと思っていることの違いがあるじゃないですか。個人一人一人の価値観が。それでやっぱり、気に障ったことを、言ったりとか、で、もめるのは怖いというか。それで話し合いはできないです。（D 氏）

子どもの出産後、子どもの父親は義母との間で役割関係葛藤が生じた際には、ある程度のところで相手の意見を取り入れ、状況を見て自分たちのやり方に戻すという方法をとっていた。プログラムに参加していない祖母との関係性において、子どもの父親は関わりの難しさを実感していた。

ある程度のところで折れて、靴下を履かせて、ちょっと、むずむずして、脱がしたりとか。（D 氏）

ケース 2 では祖父母と子どもの両親間の関係性よりも、夫婦間で育児において役割関係葛藤が生じることがあり、祖父母を巻き込み、衝突することがあった。その際に義母は家庭における女性の負担の大きさを自らの体験から理解し、同姓として共感を示し、嫁を情緒的側面から「保護」しながら、子どもの両親間の「調整」を図っていた。義母は、育児のつらさについて嫁から素直に表現してもらう方が“かわいい”と思えると表現していた。

最近は夫婦間の方が多いよね。揉めはね。ごちゃごちゃと、やってますけど。（D 氏）

私、（夫と）喧嘩したりとかして、大騒ぎ、じぃばぁを巻きこみ、大騒ぎをして、喧嘩して、大騒ぎしています。そんなときには（義父母に）慰めてもらう。（E 氏）

女性の方が大変に決まってるものね。私もやってきた道だし。私たちの時代は私たちのもう親にとにかく心配かけないようにってやってきちゃったから、あんまり、なんていうのかな、そうやって表してもらった方が、可愛いっていうか、逆に。男の人だからわからない意味と、女性だからわからない、男の気持ちがわからない、あるじゃないですか。価値観の違いとか。そういう違ったところがあって。お嫁さんもそうだし、息子もそうだし、やっぱりもう、私くらいの年齢になると、可愛いというか、ああそうだよな、言いたいこと私たちだってあったよな、なんて。（G 氏）

ケース 2 ではグループワークにより、義父が息子の思いを知ることができ、＜家族員相互の理解の場＞につながっていた。義父は息子を育てていた時代に、仕事中心で関わることができなかった反省を踏まえ、孫育てでは育児の直接的なサポートよりも、洗濯物を干したり、たたむ等、間接的に子どもの両親を支援していた。また、義母は状況に応じて、孫を抱っこしたりして、手段的側面から子どもの母親をサポートしていた。ケース 2 では子どもの父親が育児に積極的に関わっていることから、義父母は子どもの両親が育てるこ

とが一番だと感じており、できるだけ距離を置いて育児を支援するようにしていた。こうした義父母のサポートについて、嫁であるＥ氏は感謝の気持ちを表していた。

（義父は）洗濯干しから、洗濯たたみからです。この通りで、私があんまりやらないので、ずっとばぁばに抱っこしてもらって。（E 氏）

自分たちが育てるのが一番いいんじゃないかなと思って。それで、頼まれたことはお手伝いしますし。まあ、ちょっと言い過ぎちゃったかなとか、やりすぎちゃったかな、と思うことはありますけど。なるべく、こう離れるように。とにかく２人の子なんだから、２人がいいようにやってくれれば。（G 氏）

このように、ケース２は結婚してから１年半というまだ浅い家族関係ではあるが、義母が子どもの両親間の「調整」を図り、育児において子どもの両親が困っている際には手段的側面から「保護」し、祖父母としての役割を遂行していた。これにより、嫁は義父母に対し「甘える」ことができ、夫との役割関係葛藤が生じた際には義父母に頼り、情緒的側面からサポートを受けることができていた。グループワークで息子は父親に対する幼少期の思いを表出し、父親は息子の思いを理解し、現在は自分のできる範囲で孫の育児を間接的にサポートしていた。一方で、子どもの父親は嫁の実母との関係において、役割関係葛藤が生じた際には、状況に応じて「合わせる」という対応をしていた。しかし、育児に対する価値観の相違が強く、産後３ヶ月の時点では互いに折り合いがつかない状況にあると語っていた。

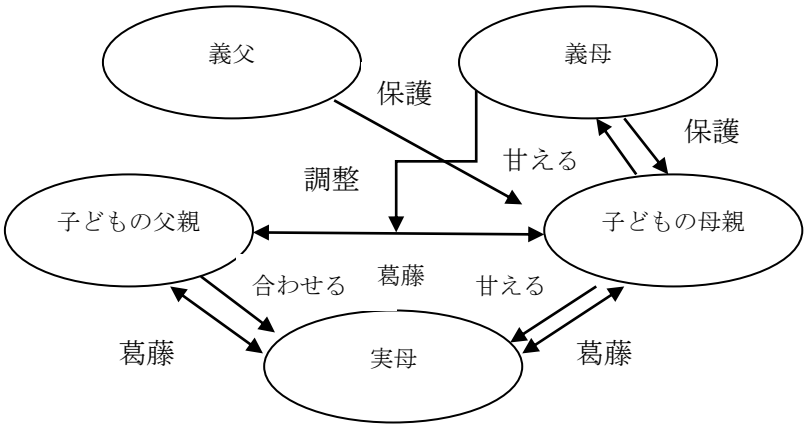

図 3. ケース２における産後３ヶ月時の家族関係の実態

Ｃ．ケース３

１．ケース３の紹介

プログラムには２日間とも妊婦と実父母が参加し、妊婦の夫は２回目に参加した。妊婦は双胎であり、妊娠中から実家に里帰りをしており、産後３ヶ月まで実父母は育児において直接的な支援をしていた。実父母がプログラムに参加した理由は、「初孫であり、自分たちの時とは育児が違うため今の育児を知りたい」という思いと、「生まれてくること自体が不安」という実母の気持ちからであった。実父もプログラムの参加に対しては積極的姿勢であった。実父は日中、仕事をしているが、実母は専業主婦であった。

２．役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果

ケース３においては、本プログラムへの参加による効果として、沐浴の演習をすることで＜孫の育児に自信がつく＞＜孫の育児へのきっかけづくり＞という効果が得られた。また、＜現代の育児に対する共通理解＞が図られており、祖父母は子どもの母親との間で役割関係葛藤は生じていなかった。しかし、プログラムに参加していない義父母との関係において、子どもの母親と義父母との間で、孫に対する祖父母の荒い関わりによって、役割関係葛藤が生じていた。

＜孫の育児に自信がつく＞について、実母は沐浴の演習を事前にしたことで、自信につながったと語っていた。また、実父は娘を育てていた時代に沐浴をした経験はなかったが、育児経験のない実父であっても、演習を重ねることで即実践に生かせており、＜孫の育児へのきっかけづくり＞という効果がみられた。

やればできるんでしょうけど。その“とっかり”というのが。ぱっときて、ぱっとできるものでもないから。だからやっぱりここでね、勉強できたのはすごくよかったなと思いますね。（H氏）

うちの主人、全然、自分の娘たち、入れたことないんですよ、お風呂。いつも母がやっていて、ところが、帰ってきたら、やっぱり、即入れられたもん。主人は教わって、ここで、何回もやらされててね。（H氏）

実母が娘を育てていた時代には姑に頼り、白湯や果汁を与えることが常識であったが、プログラムに参加し、根拠を含めて違いの変化を理解したことで、＜現代の育児に対する共通理解＞が図れ、育児において葛藤の解消につながっていた。

私なんかは、おばあちゃんにみてもらっちゃったから、あれなんですけど。必ずお風呂から出たら、番茶とか白湯をつくっておいて、飲ませてましたね。それから、離乳食の前には、果汁で口を慣らせなくちゃだめだとか。それが、全部違うっていうのが（今回のプログラムに参加して）わかって。そしたら、今はミルクが、昔のミルクよりもうんとよくなってるから必要ないなんて聞いたりしてたので。そういうもんなんだって。本当にわからないこと、いっぱいありますよ。（H 氏）

考え方が合わないということはなかった。なんかもうバタバタして終わってきてる感じだったので。今のところ考えたことはない。（I 氏）

一方、子どもの母親が感じた祖父母との役割関係葛藤として、義父母の孫に対する荒い関わりが気になっていたが、そのことを直接話せずにいる状況であった。その状況について、子どもの母親の実母は、今と昔の育児の違いを双方の祖父母が理解することが大事であり、理解することで役割関係葛藤の解消にもつながると考えていた。

（義父母に対しては）小さいことが気になる。実家のうちの母とか父がけっこう大事に、大事にやってくれていたので。そんなに荒々しくやるのっていうね、男の子じゃないのよ、女の子なのよっていう風に、言いたいときがあるけど、言えないんだよね。（I 氏）

両方の親が、昔のあれと違うっていうことを、ここで勉強したほうがいいと思いますよね。私なんかは孫ができるなんて言ったら、教えてくれる人がいっぱいいたけど。お母さんみたくね、教えてくれる人がいなかったら、昔のまんまだもんね。（H 氏）

さらに、本プログラムは初孫を迎える家族という同じ境遇にある者同士が集ったことで、ピアサポートの効果があった、と子どもの母親は語っていた。

けっこう、年配のじいちゃん、ばあちゃん、お話好きが多かったじゃないですか。だから、沐浴の練習しながら、けっこう話始まっちゃって。年配の人が教えてくれるんですよ。そうやっちゃだめって。本当にみんな、和気あいあいと、良かったですよね。（I 氏）

３．家族関係の実態からみたプログラムの効果

ケース３は実父母と娘の間柄ではあったが、家族内で妊娠中に家族内役割について話し合う機会はなく、今回のプログラムで初めて実父の育児に対する思いを家族が知ることができていた。プログラムにおけるグループワークは＜家族員相互の理解の場＞につながっ

ていた。また、グループワークで実父は自身の役割を考えたことで、＜祖父母としての役割受容＞が高まっていた。

（グループワークで）お風呂はおじいちゃんが、自分で入れるみたいなことを書いてあったので。おぉ、お父さんやる気だな、なんてね、言ってたんです。だから、きっと、書きだして、書きだして、じぃじの中でも（考えたんじゃないかな）。こういうことがなかったら、しょうがないやるみたいな、だと思うんですよね。（I 氏）

出産後は、双子の育児を家族全員で関わり、子どもの様子を見ながら、子どもが泣く前に手が空いている者が自然と人工乳を作ったり、夜間は子どもの両親と祖父母で子どもを１人ずつ世話する等、子どもの両親を手段的側面からサポートしていた。

私が脱がせて、じぃじに（お風呂に）入れてもらって。で、私が一緒に洗って、出して。で、ママがミルク飲ませてね。（子どもの両親が）二人で入れるときは、私はただ脱がしたり、ミルクをやったりする当番なんですよ。（H 氏）

ミルクはもう、おばあちゃんと交代、交代でね。（I 氏）

（子どもを）泣かさないように。ふんふんってはじまると、ミルクって。（子どもの母親と）どっちかが手が空いてる方が作ることになってるんだよね。（H 氏）

夜中泣くじゃないですか。だから、しまいには、パパとママがそっち（１人の子ども）を見て、私と主人が違う部屋に（もう一人の子どもと）寝て、隔離してお互いに。そうしないと、こっちが泣くとこっちも泣くで、まわりが寝られなくなっちゃうからね。（H 氏）

本プログラムのグループワークにおいて、祖父は「沐浴をしたい」という気持ちを表出していたが、沐浴以外の育児においても子どもの母親に褒められながら、人工乳を与えたり、抱っこをするなど、育児に手段的側面から協力していた。

この頃はね、ミルクはね、（実父が）やだって言いながら、だんだん、上手、上手っていうと、そうか？って言ってね。（I 氏）

ほめ上手になることですよね。子どもだけじゃなくてね、じぃちゃんばぁちゃんに対してもね。（H 氏）

（実父は）けっこう耳が遠いのにね。（夜中に）ミルク作ってると、おれは眼鏡をかけなおさないとならないから、俺が抱くって、私がミルクをつくって。私はすぐ疲れちゃうから、寝かせようとするけど、１時間は抱っこしてるもんね。

また、祖父は孫の出産後、自身の生活を変え、孫のお風呂の時間に合わせて、帰宅するようになった。沐浴演習の際に、子どもに生活のリズムをつけるために沐浴は遅い時間帯には行わないことを伝えており、実際に祖父は生活の調整を図っていた。さらに、祖父は夜中の授乳においても自ら率先して抱っこを行い、孫がぐっすり眠るまでひたすら抱っこをして寝かしつけていた。このように、祖父は＜孫の育児のための生活調整＞をしていた。

最初の頃はね、飲み会もお酒も飲まずに帰ってきて。（飲み会がある日は）夜９時までに入れさせなくちゃだめなんだからって。最初は６時って決めてたんですけど。最悪の時は、なんか、あんまり遅くは良くないって聞いたらか、９時までには入れなきゃだめなんだって言ったら、すぐ帰ります、なんて言って。（H 氏）

育児をしていく中で、子どもの母親が不安になったり、パニックになった際には実母が情緒的側面からサポートをして、子どもの母親を支えていた。

もう、私が泣きたいことが何度あったことかって感じだよね。もう、お母さん、私無理って。あのときは首に筋に入っちゃって、それが取りきれないと、すぐに赤くなっちゃっていて。それがすごく痛々しくて、パニックになっちゃったんですけど。でも、母が大丈夫、大丈夫って言うと、あぁそうかなって。それはありますね。それは主人でも父でもだめなんですよね。母がやっぱり一番。（I 氏）

ちょっとね、湿疹ができると、医者に行こうって（娘が言ったり）。そんなときにはまだ少し様子を見たらって、笑って話す。（H 氏）

このようにケース３では、本プログラムに参加したことで、特に祖父は＜孫の育児へのきっかけづくり＞となり、育児において多くの場面で協力していた。また、双子の育児という負担の大きさもあり、祖父は＜孫の育児のための生活調整＞をしたりして、家族全員で協力し合いながら、育児をしていた。その中心は子どもの母親であったが、祖父母が子どもの母親を手段的側面から「保護」し、ときには「追従」し、孫の育児を遂行していた。産後３ヶ月の時点において、家族関係は強まっており、役割関係葛藤が生じにくい状況であった。

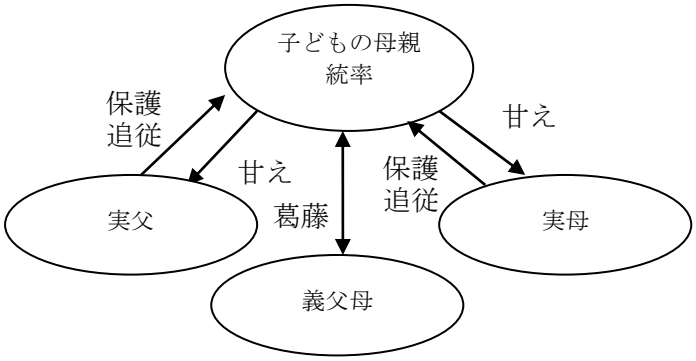

図 4．ケース 3 における産後 3 ヶ月時の家族関係の実態

D．ケース 4

1．ケースの紹介

プログラムへの参加は実母と娘が 2 日間とも参加し、妊婦の夫は仕事の都合で 2 日目だけ参加した。参加した理由としては、祖母自身、仕事を退職後、孫の育児ができることへの楽しみからであった。ケース 4 では、子どもの母親が産後 1 ヶ月から仕事に復帰し、近所に住む実母が日中子どもの世話をしている状況であった。面接調査には、祖母と子どもの父親からの承諾が得られた。

ぜひ、私出たいわって言ったの。じじばばというとね、結局仕事のない人でしょう。ああいうところへ出るっていうのは、すごくね、楽しみなんですよね。仕事一段落して、これから孫のっていうんで、私もね、70 でね、仕事を辞めて、店を閉めて、娘もちょうど結婚したので、やることもなかったので、ちょうどよかったんですよ。(J 氏)

2．役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果

ケース 4 の実母は、プログラムへの参加前から育児に意欲的であったが、本プログラムへの参加により、現代の育児を知ることで、＜孫の育児に自信がつく＞という効果が得られた。一方で、プログラムには入っていなかった項目において、祖母は昔からの通説による心配やわが子では体験しなかった孫の状態に対する心配を抱いていた。子どもの父親と姑の関係性は、子どもの父親が姑を信頼し、祖母という存在を大事に考えていた。日々の関係においては互いに気を遣わない距離を保っていた。

まず、＜孫の育児に自信がつく＞という効果については、祖母自身が娘を育てていたときに言われていた「抱き癖」について、今回のプログラムで説明したことを受け、祖母は

安心して孫を抱っこすることができ、自信をもって手段的側面から育児をサポートすることができていた。

娘のときもやっぱしね、あんまり抱くとね、抱き癖がつくからって言われたんですけど。でも、抱き癖っていうのはないって先生がおっしゃったんで。もう自信を持ってね、可愛い、可愛いでね。育てました。（J 氏）

昔から産後早期は字を書かない方が言われていたため、祖母は子どもの母親が産褥早期から字を書くことに対して気にかけ、子どもの母親に直接注意をしていた。しかし、子どもの母親は仕事が好きであり、辞められない性格であると理解し、最終的には意見を押しつけることなく、見守っていた。

21 日過ぎにはもう、仕事にぽつぽつ行っていてね。それとね、10 日くらいから字書きをしていて、私が怒ったんですよ。21 日までは仕事をしちゃいけないって。今そんなに目を使うとね、年を取ってから目にでるよって、そういう風に言ったんですよ。うちの娘に説明したんですけどね。でもね、仕事があれでね。やっぱし、仕事が好きだから。（J 氏）

毎日孫の面倒を見ている祖母にとって、「孫の人工乳を飲む量が少ないこと」や「よだれの多さ」など、孫の個性なのか、具合が悪いのかの判断が難しく、心配を抱いていた。プログラムの中で、夜間に子どもの体調が悪くなった際の小児救急相談の連絡先について、紹介をしていたが、すぐに病院を受診するような状態ではなかったことから、祖母は予防接種等で病院を受診した際に、医師に相談をしていた。このように、ケース 4 の祖母は孫の状態について気にかけ、自ら対処をしながら、孫の育児を遂行していた。

日中ミルク飲まないんでね。それが一番ね、心配です。今でも心配ですね。ミルクは。あと、すごくよだれを垂らすんですよ。それでちょっと医者に行ったときに診てもらったの、あんまりよだれを垂らすから。（J 氏）

子どもの父親は義母との関係で、“距離感”を大事にしており、互いに気を遣わないで済む距離を保つように留意していた。

お義母さんは夜 10 時には寝たいと言っているので、あまり遅くならないようにしています。（義母とは）距離感ですかね。あまり近づきすぎず。3 時間以上はここにいないようにしています。それ以上いると、私も気を遣いますし、お義母さんも気を遣うので、そろそ

ろ帰ろうかと私から言って、あまり長くならないようにしています。(K氏)

また、子どもの父親は義母を信頼しており、基本的には育児を義母に任せ、義母の考えのもとで育児をしてもらっていた。その理由として、子どもの父親自身が幼少期に、祖母に育てられた体験があり、祖母の存在は大事であるという考えから生じていた。

なるべく私の希望を言わないようにしていますので。基本的に育児はお義母さんに任せているので、お義母さんの考えでやってもらえたらと思っています。(子どもの)お母さんもちょっと困るなと思うことがあっても、お義母さんがよく見てくれていますから。私は祖母に育ててもらった記憶があるので、祖母の存在は大切だと思っているんですよね。私の母も亡くなっているんですよ。だから、お義母さんの存在はありがたいです。(K氏)

３．家族関係の実態からみたプログラムの効果

妊娠中、家族内での役割についての話し合いは特になく、子どもの両親は「祖母に育児を任せたい」と考えていた。グループワークにおいても、子どもの母親は「育児は実母にお任せ」という考えを示しており、子どもの父親に対しては予防接種や乳幼児健診を任せたいと語り、「私は仕事」という意思を示していた。その考えに対して、実母も理解を示し、グループワークにより＜家族員相互の理解の場＞となり、＜祖父母としての役割受容＞がさらに高まっていた。しかし、実際に育児をしていく中で、当初考えていた予防接種等は子どもの状況に合わせて役割を修正していた。

(婿は)お義母さん、頼むねって。だからどうしたらとか、どういう風に、っていうのはなかった。娘さんを育てたようにね、育ててくれればいいんですって、婿さんはそういう風にいうんです。最近はね、娘もね。お母さん、私を育てたみたいに育ててって。娘もそういう風にいうんですよ。(J氏)

妻は働きたいという気持ちがあったので、お義母さんに育児はお願いするつもりでした。ただ、妊娠中にイメージしていた状況と違って、予防接種とかは母親か、お義母さんでないと、抱き方が違うみたいで。ぐずぐず泣いているときには私じゃダメで、妻が連れて行っています。(K氏)

子どもの母親は休みなく、毎日仕事をしているため、祖母は毎日朝から晩まで、孫の世話をしていた。子どもの父親は週に１日仕事が休みであるが、婿への気遣いから、婿が休

みの日も祖母は孫の面倒を見ており、子どもの父親を情緒的側面からもサポートしていた。ただし、孫のお風呂は１人ではできないため、仕事の合間に子どもの母親が実家に戻り、祖母と２人で行っていた。毎日の育児も、祖母は“孫の可愛さ”から、疲れを感じることなく行えていると語っていた。

（孫の面倒をみる時間は）その日によって。大体 12 時間くらい毎日みているんですよ。仕事があると、夜９時くらいになったりするんですよね。１回５時か６時かに来てね、お風呂入れに。一人じゃ私も入れられないので。お風呂入れに来たりして。それからまた行ったりね、してるんですよ。（J 氏）

（孫の世話は）毎日ですよ。１日も休みないです。うちの娘１日も休まないんです。仕事。（子どもの父親は）休むんですけど、週１回。でも。男の人が子どもを見てるっていう訳にはいかないからね。でも可愛いんで。可愛いの一言です。みんなね、疲れるでしょうって言うけどね。もう可愛さが先でね、疲れないんですよ。（J 氏）

このように、ケース４では祖母が育児の中心となり、子どもの両親と祖母との関係性は祖母に対する子どもの両親の信頼で成り立っていた。産後３ヶ月の時点で祖母は子どもの父親との間で役割関係葛藤が生じることは少なく、子どもの父親は祖母に対して“距離感”を大切にしながら、祖母の考えに「合わせる」という関係をとっていた。また、子どもの父親が休みの日には祖母が気遣い、孫の面倒を見て、情緒的側面からサポートしており、子どもの父親は祖母に「甘え」、自分の時間を確保してもらっていた。祖母は孫の育児において時折不安を抱えながらも、「自立」して育児をしており、不安が生じた際には、医師に相談する等の対応をとったりして、子どもの両親から求められている祖父母としての役割を遂行していた。もともと孫の育児に対して意欲的な祖母であったが、本プログラムに参加したことでより自信を持ち、孫の育児を遂行していた。

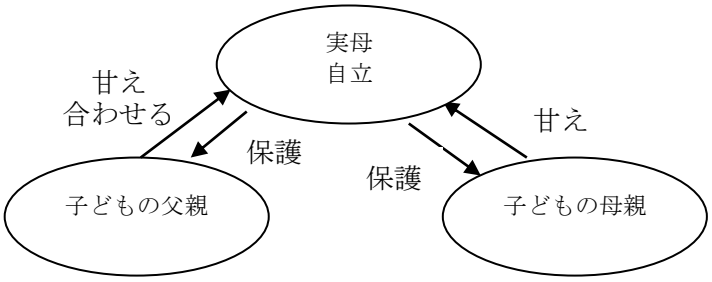

図 5．ケース４における産後３ヶ月時の家族関係の実態

Ｅ．ケース５

１．ケースの紹介

プログラムには妊婦の実父母が参加した。娘は出産後、実家に帰り、１ヶ月ほど過ごし、県外の自宅に戻った。その期間、子どもの父親は週末になると嫁の実家に行き、過ごしていた。自宅に戻った後も、週に１日、子どもの母親は子どもとともに実家に行き、実父母から支援を受けていた。

２．役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果

ケース５においては、本プログラムへの参加により、祖父母は＜孫の育児に自信がつく＞＜孫の育児へのきっかけづくり＞となり、積極的に孫の育児に関わっており、子どもの母親は自宅に戻ってからも１週間に１回は実父母を頼り、実家に帰省していた。また、＜現代の育児に対する共通理解＞を図ることができていた。

一方、産後１ヶ月までに実母は子どもの母親との間で、子どもの泣きによる子どもの母親の精神的不安定さや授乳に対する考えのズレから役割関係葛藤が生じていた。

＜孫の育児に自信がつく＞と＜孫の育児へのきっかけづくり＞については、演習で新生児人形を用いて沐浴を実践してみたことで、実母は孫の育児において自信をもって実践することができ、娘に対して自らがモデルとなり指導していた。また、実父は娘を育てていた時にはまったく育児をしていなかったため、今回の演習時には難しさを感じていたが、実践したことで育児が身近なこととして捉えられるようになっていた。娘の育児にはほとんど関わらなかった実父にとって、沐浴演習は祖父となる役割を意識づけるきっかけになっていた。

（沐浴を）やるときに。（娘に）よく見てなとか言って。うちでお風呂に入れたときに、まずはこういう風にセットしといてみたいに。うつぶせにする時、あれね、すごくやっていてよかったというのはある。あれはやっぱり勉強していたから、良かったなって。結構役に立ちましたね。（M 氏）

お風呂入れとか、ちょっと難しいじゃないけど、そういう感覚が、とっつきやすくはなかったけどね。あとまあ、やっておいた方がいいっていうのは、当然わかるから。（L 氏）

実父母は娘を育てていた時代の育児知識が、現代において変化してきていることをプログラムに参加したことで認識し、＜現代の育児に対する共通理解＞を得て、素直に受け入

れ、実践につなげていた。

抱きぐせがついちゃうからって、よくおばあちゃんに言われていたけど、抱き癖は関係ないんだってね。シッカロールとかも普通はつけちゃうけどな。あ、元は、つけてたんだ。（L 氏）

しかし、産後 1 ヶ月までの間に、実母は子どもの母親との間で、子どもの泣きに対する対処において役割関係葛藤を感じていた。実母は自らの育児経験をもとに、子どもが泣いている時の対処方法を子どもの母親に伝えていた。しかし、子どもの母親はなぜ子どもが泣いているのかを理解できず､産後 1 ヶ月という精神的に余裕がない時期であることから、実母のアドバイスを素直に聞くことができず、衝突が起きていた。そのため、実母は子どもの母親が落ちつくまで“そっとしておく”という対応をとっていた。ケース 5 の実母は、プログラムで説明した祖父母の役割において、まず自らの経験を「話す」という役割を遂行し、子どもの母親がそれを受け入れられない状況であると判断した上で、「見守る」という役割をとっていた。また、グループワークでは、家族内で役割関係葛藤が生じた際に、誰の意見を尊重するかについて話し合っており、各家族ともできるだけ子どもの両親の考えに沿うという意見が出されていた。ケース 5 においても、実母は＜産後の母親への理解＞を示し、最終的に子どもの母親の意見を尊重し、情緒的側面から支援していた。

一時は、それこそ（子どもが）泣いていて、（娘は）何が何だか分からないって、何をやっても泣きやまないっていうときがあって。あの時は、さすがに髪の毛を振り乱してさ。その時に言ったの。だって、具合が悪くなければ、お尻か眠いか、お腹か、どれかなんだから、そんなに余分に考えることないでしょうって言ったの。具合が悪ければ、ぐんなりしているんだろうし。ぎゃんぎゃん泣いてるのに、元気がいいんだから、たぶんミルクだよとかさ、お尻みてみなとかさ。（M 氏）

こういうのをやったら？って、言うでしょう。わかってるよ！って、その頃はもう（子どもの母親は）頭がいっぱい。生まれて間もないから、何が何だかさっぱりわからない。表情も何もわからない、そういうときありましたね。そういうときは、そろっとしておく。産まれて、そう 1 カ月くらいまでが。（M 氏）

また、授乳において、母乳の場合、分泌量がわからないため、実母は孫を預かった際に、どのくらい人工乳を補足していいのかについて悩んでいた。人工乳の補足について、実母

は投資の時期であり、もったいがらずに多めに作って準備した方が良いと考え、一方子どもの母親は自分の思い通りの量で与えてほしいと考えており、双方で授乳に対する考えのズレが生じ、役割関係葛藤が生じていた。プログラムでは人工乳の補足について、具体的に説明をしておらず、役割関係葛藤が生じていた。

今は、最初おっぱいやるでしょう、そうすると、おっぱいの量が分からなくて、120くらい作って、今はじゃあ普通だとどのくらい飲ませるの？って聞いたら、200くらいかなっていうから。じゃ、おっぱいの量がわからないし、120でたくさんなの、おっぱい80も出るっていうんですよ。今、私的はそれが悩みかなと。140作ると残しちゃう時があるからって娘が言うし。じゃあ120でいいんだって。120飲ませるでしょう。（娘が）居ないときは。そうすると、120空っぽに飲んじゃって、空っぽをちゅっちゅっちゅっちゅ吸ってるし。じゃあ、追加で作るって言って、40くらい作ると、今度は飲まないし。その辺どうすれば。40作っても全然飲まなくて捨てちゃうし。もったいないって、娘が。今は投資の時期だから、なんでも投資しなくちゃだめだって。（M氏）

３．家族関係の実態からみたプログラムの効果

実父自身が娘を育てていた時代は姑に頼っており、実父自身は仕事を中心とし、休日には遊びを入れ、ほとんど育児に関わっていなかった。祖父自身、当時は“子どもは女性が育てるもの”という感覚でいたと語っていた。しかし、今回のプログラムに参加し、実践したことのない沐浴演習を行ったことで、＜祖父としての役割受容＞につながっていた。現在は娘から授乳後の排気や沐浴などの育児を頼まれ、以前はやったことがなかった育児を遂行することができていた。実母は子どもの母親と暗黙の了解の中で、自然の流れで育児を分担していた。

暗黙のうちにお母さん、みたいな。じゃあ私やるねって。たまにお父さんやってみるって娘が言ってみたり。だから、ベビーバスの時は、ほとんど私がやって。日中入れちゃうからね。娘が、お父さん（げっぷを）やっといて、みたいな。あれだったらね、大概できるじゃないですか。抱っこしてね。（M氏）

（おむつ交換は）何回かやったよな、（娘から）やってって頼まれるからね。頼まれると、（実父が）嬉しいみたい風に、娘はとっているから。（L氏）

また、実母は子どもの母親が１人で出かけられる時間を確保できるよう配慮していた。

子どもの母親は自宅にいると、常に子どもが目の前にいる生活であり、精神的につらいこともあるが、実家に行くと祖父母が面倒を見てくれるため、気持ちが安らぐ時間をもつことができており、情緒的側面からもサポートされていた。

いつも（子どもの母親が子どもを祖父母に預けて）出かけるとき、そうやっている。最初におっぱいやって、おっぱいだけじゃ足りないでしょう。あとミルクの時は、はい行ってきなって。お腹がいっぱいならね、あとは問題ないから。あとはお尻か、眠いかだけだから。（M氏）

（娘が）いつも目の前に○○ちゃんいるしって。ここに来ると、目の前に○○ちゃんがいない生活ができる、ホッとできるって。（M氏）

さらに、実母は孫が泣いていた場合はそのほとんどが授乳か、おむつか、眠いか、３つのいずれかであると考え、子どもの母親が神経質になりすぎないように、助言していた。このように、子どもの母親が悩んでいるときに、実母は祖父母の役割の１つである「話す」という役割を実行し、子どもの母親が育児に対して神経質になりすぎないように配慮していた。

そういう風に泣きやまないとかあるでしょう。すると、おっぱいが足りないんじゃないかとか。お尻が汚れてるんじゃないかとか、眠いんじゃないかとか。大体３つ。で、熱があるときっていうのは、そんなに泣かないでしょう。あまり神経質になっちゃうと、あぁってなっちゃうでしょう。どれかなって。（M氏）

一方、義母と子どもの母親との関係は、子どもの母親が義母の体調を気にして、育児を頼めない状況にあり、遠慮が生じていた。そのため、義母宅では子どもの母親は心身ともに休まらない状況にあると語っていた。

向こうのお母さんも、私よりもちょっと上だから、首を痛めたんだか、ミルクをやっていて、痛いっていうのに、ミルクをお願いして悪かったかなとかさ。そんなことを言うから。お母さんが、やるよって言ったときは頼めるけど、なかなか、自分からはできないみたい。（義母の家に）行くと、娘は一人で○○ちゃん（孫）とっていう感じだから。あんまり休めない。（M氏）

このように、ケース５の実母はプログラムへの参加によって育児に自信をつけ、子ども

の母親を手段的側面で「保護」し、育児において子どもの母親が神経質になりすぎないように、情緒的側面でも「保護」をしていた。それに対して、子どもの母親は産後１ヶ月までは衝突し、実母の意見を受け入れることが難しい状況もあったが、産後１ヶ月を過ぎると子どもの母親が育児にも慣れ、精神的にも安定し、産後３ヶ月の時点では実父母を頼り、「甘え」、心身ともに育児の負担が軽減していた。一方、実父は本プログラムへの参加によって、孫の育児へのきっかけが得られ、娘の依頼に「追従」し、これまで行ったことのない育児も実践し、娘を手段的側面から支援していた。

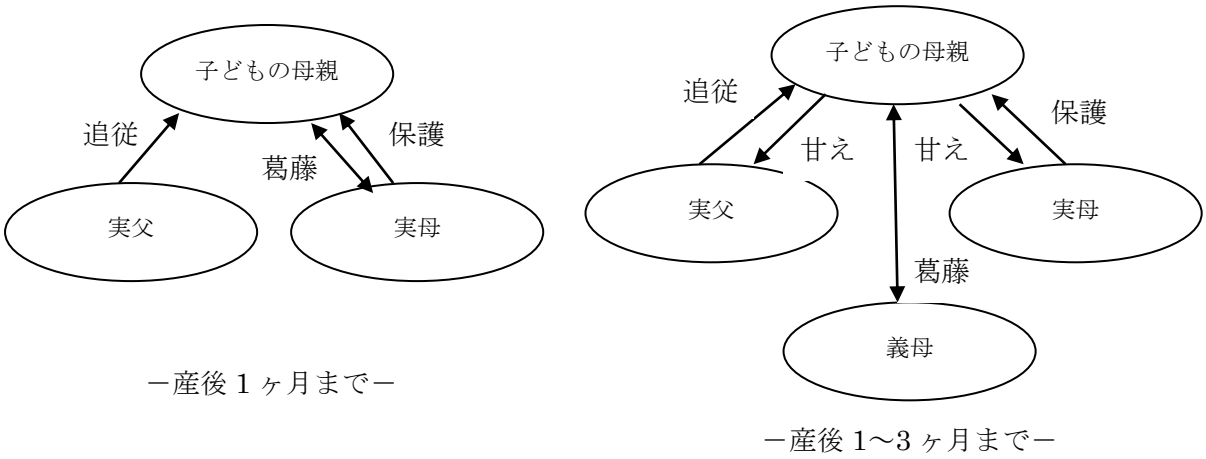

図 6. ケース 5 における産後 3 ケ月までの家族関係の実態

Ｆ．ケース６

１．ケースの紹介

プログラムには実父母と義母で参加していた。今回の面接調査には実父母と、プログラムには参加していなかった、子どもの母親からも承諾が得られた。出産まで、妊婦は義母と同居している自宅で過ごし、退院後実家に戻り、産後２ヶ月まで実父母から支援を受けていた。プログラムに参加した理由は、祖父自身が娘の育児をしていた時代は、高度成長期の時代で仕事が忙しく、子どもと接する時間が少なかったため、孫の育児をするにあたって不安があったためであった。

私が子どもを持ったときっていうのは現役で、しかもある程度責任的な立場にあるときだったので、意外と頭ではわかっていても接する時間って少なかったと思うんですよね。ちょうど高度成長期でしたから、すごく忙しくて、日曜出勤すると２週連続ということもときにはあったんですね。そうすると、頭ではわかっていても（子どもと）接する時間というのがなくて。そういう意味ですごく不安もあったし。セミナーを受けていろんな意味

で、あっ、そうやればいいんだなって。ああ、よかったって。（N氏）

２．役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果

ケース６においては、本プログラムへの参加により、＜孫の育児に自信がつく＞と＜産後の母親への理解＞という効果があった。子どもの母親にとって、祖父母がいることで育児不安が増強することなく、安心して育児が行えていた。

＜孫の育児に自信がつく＞については、実父はプログラムの中で沐浴を練習していたことで、不安が増大することなく、沐浴を実施することができていた。沐浴演習は実父に孫の育児への自信感を与えていた。また、子どもの母親は祖父母から情緒的な側面でもサポートを受けており、育児において祖父母は重要な存在であると語っていた。

私は端的に言ってお風呂に入れる実習をさせて頂いたので、ある程度多少の不安はありますけれども、おかげさまでできたのではないかと思っています。（N氏）

（実父母が）ないとダメですね。自分が持たないと思います。安心します。一人でいると、めぐりめぐってしまうから。（気持ちが）分散されるので。（P氏）

子どもの母親は義母との関係について、実父母よりも普段からよくコミュニケーションをとっており、多少の気遣いはあるものの、我慢をしあう関係ではないと語っていた。今回プログラムに参加した内容についても、嫁は義母から話を聞いており、義母がプログラムに参加したことで、＜現代の育児に対する共通理解＞につながり、よりいっそう嫁との間でコミュニケーションが深まることにつながっていた。

うちの両親からというよりは、一緒に行った義理の母からこういうのをやってきたよとか、資料を読んでみてってもらったりだとか、昔と今は違うことが結構あるんだねとかという話を聞いたりしていましたけど。（P氏）

きっと自分の仕事のこととか、身近なこととかは両親よりも知っていると思います。よく話をするので。職場の愚痴とかも話をするので。多少は気を遣いますけど、でも全部を我慢しちゃうとか、そういう関係ではないです。（P氏）

３．家族関係の実態からみたプログラムの効果

妊娠中、嫁は義母と同居している自宅で過ごしていたため、実父母と娘で育児における役割について話し合う機会はなかった。しかし、グループワークでは実母が自身の育児時

代の苦労を赤裸々に語り、そのつらさを実父はそのとき初めて認識した。そこで、今後はできるだけ実母のサポートをしていきたいと実父は述べていた。このように、ケース 6 において、グループワークは＜家族員相互の理解の場＞となっていた。

娘と孫の退院後、実母は家事を中心に手伝い、娘が外出する際には子どもの面倒をみるように保護をしていた。また、子どものお風呂については実父母で協力し合い、実施していた。

退院してからのお手伝い、食事関係やお洗濯、そういうね。赤ちゃんはできるだけ本人がお世話をして、っていう感じですね。それで、病院に行く時だけはその間見て。（O 氏）

（沐浴後は）私が拭いています。お着替えなんかをして。（夫と）2 人三脚でやっています。（O 氏）

ケース 6 では、プログラムに参加した実父母、義母は子どもの母親との関係において、産後 3 ヶ月の時点では役割関係葛藤がほとんど生じていなかった。義父母と嫁の関係性はもともと良好であり、義母がプログラムに参加し、現代の育児を得てきたことで、さらに関係性が強まっていた。育児の中心は子どもの母親であり、実父母は娘を家事という手段的側面から「保護」をしていた。また、実父母は子どもの母親が育児で不安がある際には、「甘え」させ、情緒的側面からもサポートしていた。娘を育てていた時代に、仕事中心で育児があまりできなかった実父も、プログラムに参加したことで自信を得て、孫の育児に協力的であった。

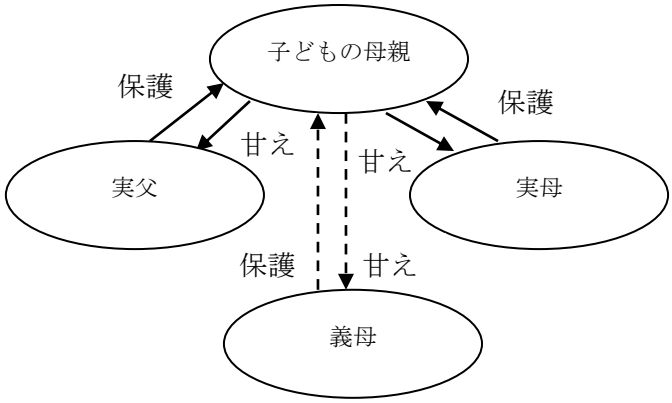

図 7. ケース 6 における産後 3 ヶ月時の家族関係の実態

G．ケース７

１．ケース紹介

双子を出産予定の嫁を持つ義父母であり、義父は仕事の都合上、1回目のみの参加で、義母は両日ともに参加した。参加した理由としては、「すっかり子育てを忘れてしまったこと」と「孫が一卵性双生児で不安が先立ち、今の育児について知りたいと思った」ためであった。また、祖母自身は2人の息子を育てた経験があるが、生まれてくる孫は2人とも女児であり、そのことも不安につながっていた。産後1ヶ月までは両児ともに、NICUに入院となり、子どもの母親は義理の実家から病院まで母乳を届けるために通っていた。産後1ヶ月以降は、車で30分ほどのところに子どもの両親の自宅があり、義母が通い、育児のサポートをしていた。その他に、子どもの母親の叔母が近くに住んでおり、交替で育児をサポートしていた。

２．役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果

ケース7においては、本プログラムへの参加により、＜現代の育児に対する共通理解＞という効果があり、義母は孫育て手帳を活用し、妊娠経過について随時嫁と確認をしていた。また、本プログラムに参加した際に、義母から個別に双胎妊娠に関する相談があったため、義母に双子に関する雑誌を紹介したところ、早速購入し、妊娠中に嫁と一緒に雑誌を活用してコミュニケーションを図っていた。

一番びっくりしたのは、あれですね。お風呂上りに湯ざましがなくなっているということと、昔はよく日光浴をさせようって言ってさせていたじゃないですか。日光浴はあまりさせないですよね。（Q氏）

紹介していただいたでしょう、本。これ、すごい役立って。早速買って。お嫁さんにも1冊買ってあげたんです。すごくわかりやすくて。週数ごとに書いてあったので、これ本当に良かったです。これ（孫育て手帳に経過を）書いたり色々していたので。だから安心して。お嫁さんとの会話も、何週ね、何週ね、じゃあ、そろそろねなんて、私もいくらか知識が。これすごく役に立ちました。（Q氏）

ケース7の義母は、嫁から依頼されたサポートを遂行する過程においては、役割関係葛藤が生じていなかった。しかし、子どもの母親が期待する以上の祖母の介入によって役割関係葛藤が生じていた。また、義母がプログラムで学んだ内容と、子どもの母親の思いが

異なり、抱っこに対する考えのズレがあった。義母はプログラムで“抱き癖はない”と学び、授乳後も十分に抱っこをしてから寝かせることが必要であると、子どもの状態を見た上でも感じていた。その点において当初は子どもの母親と考え方の相違が生じていた。しかし、徐々に子どもの母親は抱っこの必要性を気づき、義母の考えに賛同するようになっていった。

私はつい抱っこしてあげちゃんだけど。（嫁は）少し泣かせて、泣かせていてもいいのにっていうのが、言葉では言わないんですけど、なんかそんな風な感じがひしひしと。（プログラムの資料に）昔はいろんな仕事の関係で抱き癖っていうのがあったけど、今はどんどん抱っこしてあげると、自立も早いなんて書いてありましたもんね。

*飲んだ後も、飲んで、げっぷって置くよりも、やっぱり十分抱っこしてあげて、こう触れ合って、下に寝かせるとぐずらないですけど。機械的にげっぷなんてやると、なんかぐずるんですよね。だからやっぱり、十分抱っこしてあげるのも必要かな、なんて思いますね。それもお嫁さんも、なんか気づいたみたいで。十分、抱っこしてあげてくださいなんて、この頃は言うようになってきたんですけど。（**Q** 氏）*

子どもの母親が期待する以上の祖母の介入による役割関係葛藤については、孫が双子であるため、義母は嫁の育児負担を考え、食事や洗濯などの家事をサポートしていた。しかし、嫁にとっては遠慮があるのか、自分でできることを義母にされることに対して、役割関係葛藤が生じていた。子どもの母親と義母との役割関係葛藤が生じた際に、直接子どもの母親が義母に伝えるのではなく、子どもの父親を介して義母に注意を促していた。義母は嫁との関係性について、「永遠の課題」と捉えており、祖母としての想いの空回りを感じ、嫁への関わり方について、反省をしていた。

*（嫁に対して）ちょっとやりすぎちゃったですね。お昼を一緒に食べようと思って、お昼を作って持っていくでしょう。で、御夕飯なんかも準備している暇ないだろうと思って、御夕飯も持って行ってあげたの。そしたらなんかね、やっぱりなんかこう、遠慮っていうか。息子から“お母さん、やりすぎ”って言われて。遠慮しちゃうのかな。やっぱり。これは永遠の課題なのかな。（**Q** 氏）*

お母さん、そんなに高いものを買ってこなくてもいいよって、でも栄養をつけてあげたいと思って。母乳が出るようにと思って。こっちの思いとね、ちょっと空回りしちゃって。だってね、お嫁さんはね、双子を育てているだけでもう、大変だろうと思うから。ついね。

（嫁に干渉しすぎたことが）もうそれが一番。反省、反省。（Q氏）

（息子が）お母さん洗濯物を畳んだの？っていうから、忙しそうだったから、乾いていたから畳んだよって言ったら、○○だってできるんだから。洗濯ものなんか畳むなって。（Q氏）

義母は周囲の友だちから、嫁への干渉について忠告をされており、子どもの母親を見守るように言われていた。しかし、嫁の実母が亡くなっていることもあり、実母の分まで嫁に尽くしてあげたいという思いから、世話をしすぎてしまうと語っていた。子どもの両親にその思いを理解されず、話をしながら何度も涙を浮かべていた。このケースでは、プログラムへの参加は義父母のみであり、妊娠中に義父母は子どもの両親と互いの思いを共有する機会をもつことができていなかった。義母の思いが子どもの両親に伝わらず、役割関係葛藤が生じていた。

先輩の忠告ね。忠告なんです。やりすぎちゃだめよ。やりすぎちゃだめって、もうみんなに言われる。だから、見守ってあげなさいっていうんですよね。だからそれがね、できなくて。世話を焼きたくて。（Q氏）

（嫁が）お母さんを早く亡くしたから。ほら、おばあちゃんに育てられたりしたから、今度はいっぱいね、その分お母さんがやってあげなきゃって。（涙を浮かべる）（Q氏）

３．家族関係の実態からみたプログラムの効果

ケース７では、妊娠中に双子と判明したことで、息子から祖母への子どもの両親の漠然とした依頼はあったものの、どのようなことをサポートしてほしいという具体的な話は出ていなかった。しかし、プログラムの中で、１日の祖父母の役割例を提示したことで、祖母の中ではイメージをもつことができていた。

双子だってわかった時には、おふくろ手伝ってくれよって、直前までには言われていたけど、実際どういうことをするっていうのはなかったですね。セミナーでも教わりましたけど、おばあちゃんがやることは、お洗濯をしてあげるとか、ご飯の支度とか、沐浴の手伝いとか、まあそんな風かなとは思っていましたからね。（Q氏）

育児のサポートの実際としては、2人の孫のお風呂を子どもの母親と協力し合いながら、手段的側面からサポートをしていた。また、双子を母乳で育てているため、子どもの母親

は睡眠不足であることから、日中嫁を休ませるために出向き、授乳後は義母が 2 人の育児をしていた。義母は本教育プログラムに参加した際に紹介した双子の雑誌をもとに、妊娠中から双子の育児をイメージし、出産後の育児においても実践することができていた。

私が二人抱いてそれで、まだ小さいから短時間で大丈夫じゃないですか。ベビーバスにあの、赤ちゃん二人入れて、私が受け取って着せて、はい、もう一人って、上がりましたって着せて、それで、連係プレーでやってます。（Q 氏）

（嫁は）まめに母乳をあげているんですね。夜もなんか眠れないので。私は日中行って、なるべくお嫁さんを休ませてあげて。というそれが、なんか名目見たいなね。ちょっと何時になったらお義母さん声をかけてくださいって言われて。その時間になったら声をかける。その母乳をあげた後、おしめをかえたり、げっぷをさせてあげたり。（Q 氏）

義父は直接育児の支援は行わないが、義母が子どもの母親を支援している間、自宅の家事を行っていた。孫が出産するまで、茶碗を洗ったり、洗濯物をしたり、家事の手伝いをすることがなかった義父であり、義母にとって夫の今の状況は“進歩”として捉えていた。プログラムでは祖父母の役割について考える時間を設け、祖父はお洗濯や掃除などを役割として例に挙げた。ケース 7 の祖父はこれまで家事をしたことがない状況であったが、プログラムに参加したことで、＜祖父母としての役割受容＞となり、＜孫の育児のための生活調整＞を行い、間接的に育児をサポートしていた。

私が赤ちゃんを見に行って、帰ってくるまでの、お洗濯をこんだりとか。私が早起きして食事の支度をしていくので。それを食べて、食べ終えたときにお茶碗を洗うくらいで。けっこう私が忙しそうに。向こうに持って行く食事支度してると、自分ひとりで食事したりとか、それはするようになりましたね。すごい進歩。あの年代の男性はあんまりやらないでしょうからね。（Q 氏）

このようにケース 7 では、妊娠中に息子から育児の支援依頼はあったものの、具体的な役割について話し合いは持たれていなかった。その結果、子どもの母親を思い、支援をしていた義母の関わりが“干渉”と捉えられ、子どもの母親との間で役割関係葛藤が生じていた。子どもの父親から義母に対する注意もあって、義母は子どもの母親が求める支援に対して「追従」という関わりをするようになっていった。義母は自身の関わりを反省しながら、子どもの両親を手段的側面から「保護」し、祖父母としての役割を遂行していた。

また、義父は育児を間接的にサポートし、妻の家事の負担を軽減していた。

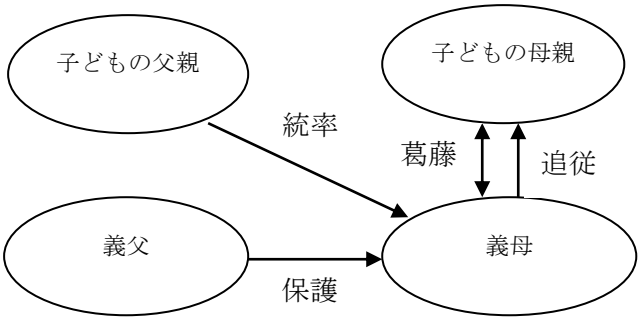

図 8. ケース 7 における産後 3 ヶ月時の家族関係の実態

H．ケース 8，ケース 9

１．ケース紹介

ケース 8 では子どもの両親の自宅が県外であり、ケース 9 では他市町村に住んでいるが、孫が嫁の実父母と同居していることもあり、孫との関わりが少なく、産後 3 ヶ月までの間に 2 回ほど、孫に会ったという状況であった。

ケース 8 は 2 回とも義父母で参加していた。参加理由としては、息子を育てていた時代に、育児に関わっていなかったという「反省」からであった。R 氏自身は積極的に孫の育児に関わりたいという思いはなく、自身の反省から少しでも育児のことを理解したいと考えて参加していた。しかし、その思いは息子に伝わっていないと感じていた。

やっぱり反省が、うん。でもすごくいい、あれに参加させていただいて。(S 氏)

出席する動機が、我々の反省から出てるもので。なかなか向こうまで伝わらないんですけど。(息子に) こういうのをやったって言ったら、何のために受けるの？って言われて。いやだから、まあ別にその、僕らが一生懸命面倒をみたいっていう意味ではないと、でもまあやっぱり、自分たちが子育てしていてね、必ずしもうまくやっていたかっていうことは、分からないから。そういう反省という意味もあるし。(R 氏)

祖父母がプログラムへの参加に対して主体的であったことに対し、子どもの両親は祖父母がプログラムに参加することに対して、肯定的な反応ではなかった。

こういうのをやったって (息子に) 言ったら、何のために受けたの？って (息子から) 言われて。(R 氏)

両方参加型だよって。もしかしたら、一緒に行けるといいねって言っていたんですけど、

もともと参加する意思がなかったんじゃないかと。お父さんたち行くの？っていう雰囲気だったことと、あと、嫁は本当にしっかりと、病院のお母さんたちの参加、妊婦さんたちの勉強会、町の保健センターで主催するものに、全部参加してたような。（T 氏）

ケース 9 も 2 回とも義父母で参加していた。参加理由としては、義母が息子を育てていた時代は仕事をしていたこともあり、育児について学んだ機会がなかったこと、また夫に孫に対する意識づけをさせたかったという思いからであった。

私も仕事をしていたので。あんまりこうセミナーとかを受けたりしないで、手探りで育ててしまったんですよ。だから今聞くと、お母さんありえない、というような、アバウトな育て方していたので。この際だから、今は時間がきっちり取れているので、聞いてみようかなっていう。それに、孫に対する意識づけ、夫にもさせたほうがいいかなって。（T 氏）

２．役割関係葛藤の実態からみたプログラムの効果

ケース 8 の義父母は、グループワークによって祖父母としての役割を「見守る」ことと捉え、＜祖父母としての役割受容＞を行い、産後 3 ヶ月の時点では子どもの両親との間で育児観のズレはあまり感じておらず、子どもの両親に任せて安心している状況であった。ただ、義父は昔からの通説による心配を案じており、息子に対してその思いを伝えていた。出産後、祖父は以前よりも子どもの父親と話をするようになったと語っており、関係性が強まっていた。

ずれっていうか、あんまり感じないですけどね。（S 氏）

ほっといても安心というようなところはありまして。だからね、こちらはあんまり（連絡しない）。だから 3 ヶ月の間のズレとか、そういうのあんまり感じたことはありませんね。（R 氏）

嫁さんが、色々メールを打ってくるので、僕らが小さい時は小さい字を見たり、例えば針の穴を通すような作業はやめないといけないと、その目に後遺症が出るという話を聞いたことがあるんですね。だからそれも、根拠というのはちょっとわからないですけど、そういう心配もあって。ちょっと息子にはね、色々知らせてくれるのはありがたいけど、あまりね、小さい字をこうやったりするのはどうなんだろうって話はちょっとしたんですけどね。（R 氏）

ケース９では、育児について基本的に子どもの両親に任せており、違う方法がいいと感じた際には一応提案するが、その意見を受け入れていないので、子どもの成長とともに変えていくだろうと考え、祖父母の意見を強く言わないようにしていた。プログラムのグループワークにおいて、このケースでは子どもの両親と役割関係葛藤が生じた際には、間違ったことを言っているときには正すけれども、子どもの両親の意見を尊重すると述べており、その発言通り、孫育てにおいて一歩引いた態度をとっていた。

（子どもの両親に育児を）任せてますね。私は。間違ったことをやってるようなときは、なんかおむつ替えなんかも、もうちょっとお尻洗ってやればいいのになって思うんですけど。なんか、お尻もペーパーで拭いているし、100 ショップみたいなところでさ、お醤油さしみたいのでさ、しゅしゅってやってあげるといいんだよって言うんだけど、はーいって言いながら聞かないから、まいっかって。１回だけここでやってあげてもね。もうちょっと大きくなるとね、小股とか洗わなくちゃなるだろうし、そうしてからでいいかなという感じで。（T 氏）

一方で、孫のお祝い行事の日程等で、義父母は子どもの両親との間で意見がずれ、役割関係葛藤が生じることがあり、義父が不快感を抱くことがあったが、義母が間に立ち、関係の調整を図っていた。

どっちかっていうと、私たちが、折れてっていいますか。夫は言いますよ。（子どもの両親が）いなくなってから。例えば、お宮参りの行事とかいつにするとか、こういうにしたいとか、やりたいとか、買ってとかいうんだからいいじゃんて。何だかんだ言ったって、買わなくちゃならないんだし。何だかんだ言ったって、その日はだめなんだし。だから、何だかんだ言うのは、損しちゃうよって、気持ちよく、そうかい、って言ってやってやればいいじゃんって。（T 氏）

３．家族関係の実態からみたプログラムの効果

ケース８では、妊娠中に祖父母が本プログラムに参加したことについて、子どもの父親から否定的な反応があり、祖父母はショックを感じていた。しかし、グループワークにおいて、息子を育てていた時代の反省からプログラムに参加したという動機や、息子からの反応にショックを感じたという思いを表出したことで、育児における祖父母としての役割を受け止めるきっかけとなっていた。産後３ヶ月の時点において、祖父母は子どもの両親

から適宜メールを通じて近況が報告されており、直接育児に関わることはないが、退院のお祝いやお宮参りのイベント時に会いに行っていた。自身の子どもを育てていた時代の反省から、プログラムに参加した義父母であるが、子どもの両親の育児を目の当たりにし、安心して任せている状況であった。そのため、ケース 8 の祖父は現時点において自分の出番は必要なく、小学生くらいになってから孫に関わることができるだろうと考えており、祖父としての役割を認識していた。現段階で義父母は子どもの両親を遠方から見守り、気になったことは子どもの父親を介して助言している状況であった。

僕らとしては、もうちょっと大きくなって、夏休みとかそういう時には、我々の出番もいよいよあるかなっていう。だから、まぁ小さいうちは向こうに任せて。(L 氏)

すごく可愛がってますので。母親が。母親っていうのは嫁が。まあ本当に可愛がってるから。まあ男の子は初めてなので。しばらくはこのまま、いいんじゃないかなと思ってますけどね。(R 氏)

ケース 9 では、現在孫が子どもの母親の実家で育てられており、たまに子どもの両親が孫と一緒に遊びに来た時には、義母はできるだけ孫の面倒を見て、子どもの母親の疲れを少しでも緩和できるように配慮し、情緒的側面からサポートをしていた。義母は祖父母の役割の一つである「見る」という役割を遂行していた。

嫁が普段ね、抱っこするのが疲れちゃうじゃないすか。いつも抱っこしてるからね。だから来た時はなるべく面倒をみようと思いますね。ミルク以外の時間に抱っこしたりとか。抱っこしたいというより、嫁の体を労ってあげたいっていうのがありますよね。だからなるべく来た時には、嫁の日頃の疲れをとってあげたり、道の駅とか、ミルクの間があれなら、行ってもいいかなみたいな感じですかね。行かせたいなとか、思いますけど。(T 氏)

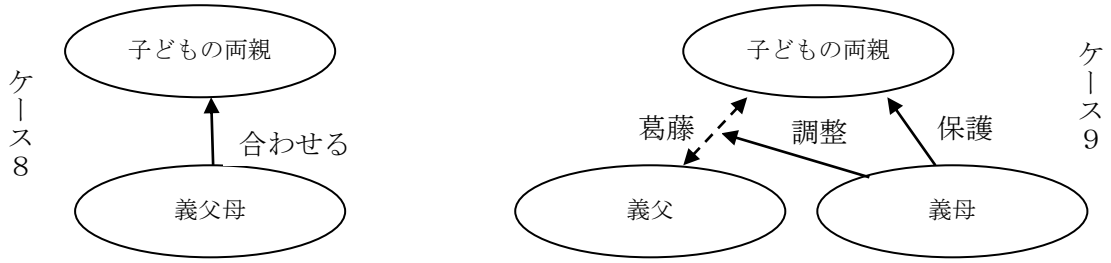

図 9. ケース 8，9 における産後 3 ヶ月時の家族関係の実態

９．全ケースからみた初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムの効果

１）祖父母として育児を手段的側面からサポートすることへの効果（図 10）

すべてのケースに共通して見られた効果として、講話で現代と昔の育児の違いについて根拠に基づき知識の提供を行ったことで、＜現代の育児に対する共通理解＞が図れ、祖父母は子どもの両親に対して、育児観の相違を生じることなく、手段的側面からサポートを行うことができていた。対象者の語りで多く挙げられていた昔と現代の育児との相違項目は、白湯やベビーパウダーが不必要であること、断乳から卒乳へ、日光浴はしない、抱き癖はないといった内容であり、これらについて事前に理解していたことで、子どもの両親と共通認識のもとで育児が行えていた。ケース 6 やケース 7 では義母と嫁の関係において、現代の育児についてプログラムで義母が学んできたことを、帰宅後嫁と共有をしており、よりいっそうコミュニケーションが深まり、手段的サポートの実践にもつながっていた。

育児経験のある祖母であるが、ケース 3 の祖母は妊娠中に沐浴演習を行うことで自信をつけ、孫の出産後、実践につながっていた。これはケース 5 の祖母も同様であり、自信をつけたことで、孫の出産後、子どもの母親に対して自らがモデルとなり沐浴の指導を行うことができていた。また、ケース 4 の祖母は自身が娘を育てていた時代に「抱き癖」を注意されていたことについて、今回のプログラムで「抱き癖はない」との説明を受け、安心して抱っこをすることができ、自信をもって育児を遂行することができていた。

次に、育児経験の少なかった祖父のケースをみると、ケース 3 の祖父は娘を育てていた時代には沐浴を行ったことがなかったが、今回プログラムに参加し、沐浴の演習を数回行ったことで、即実践につながっていた。これはケース 5 の祖父も同様であり、娘の育児に関わった経験が少ない祖父であるが、沐浴演習を行うことで＜孫育てのきっかけづくり＞となり、娘から育児を頼まれることで＜祖父母としての役割受容＞をし、授乳後の排気や沐浴といった育児を引き受け、わが子の育児では経験したことのない育児を、孫の育児では遂行することができていた。

このように、育児経験のある祖母にとっては沐浴演習を通じて＜孫の育児に自信がつき＞、育児経験の少ない祖父は＜孫の育児へのきっかけづくり＞となり、育児において手段的側面からサポートを担うことができていた。

さらに、ケース 3 の祖父はグループワークにおいて、孫の出産後の自身の役割について初めて考え、家族にその思いを語ることで、＜祖父母としての役割受容＞につながっていた。そして、ケース 3 の実父は、沐浴演習の際に、子どもに生活のリズムをつけるために、

沐浴は遅い時間帯には行わないと説明されたことを受け、孫の出産後、自身の生活を変え、孫の沐浴時間に合わせて帰宅するようになっており、＜孫の育児のための生活調整＞をしていた。妊娠中に沐浴演習を行い、グループワークで自身の役割を認識したことで、孫の育児において手段的側面からサポートすることができていた。

ケース 4 の祖母は、もともと孫の育児への意欲が高かったが、グループワークで子どもの両親から出産後は祖母に育児を任せたいという思いを受け、＜祖父母としての役割受容＞がさらに強まり、孫の出産後、自立して意欲的に孫の育児を遂行していた。

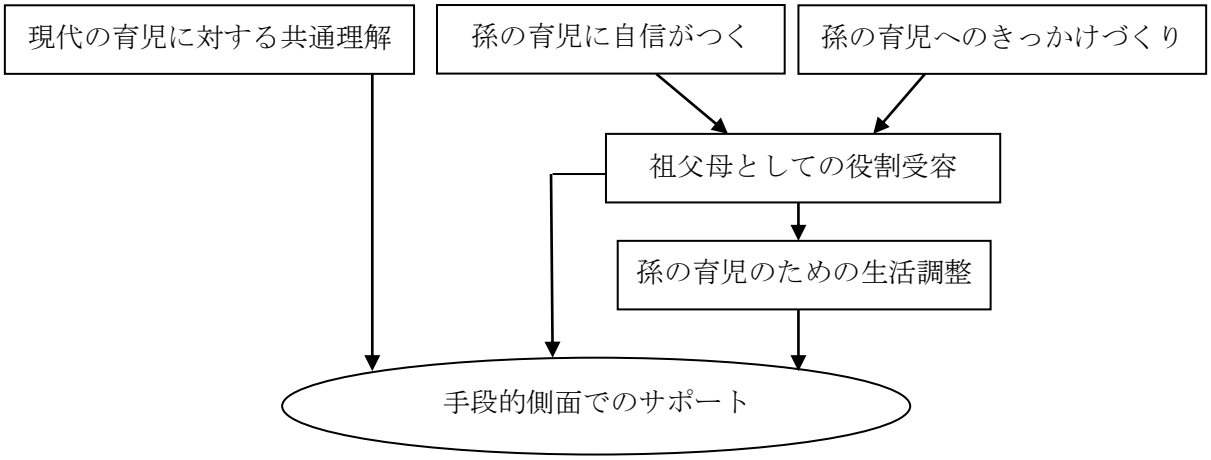

図 10. 育児において手段的側面でのサポートにつながる関連図

２）祖父母として育児を情緒的側面からサポートすることへの効果（図 11）

ケース 1 の祖母は、講話で産婦へのねぎらいの言葉かけの大切さについての説明を聴くことによって、＜産後の母親への理解＞を示し、出産後娘に対して、ねぎらいの言葉かけを行い、情緒的サポートをしていた。また、ケース 5 では産後 1 ヶ月までの間に、子どもの母親が子どもの泣きによって精神的に不安定になっていた。プログラムでは産後生じやすいマタニティブルーや産後うつ病について説明し、祖父母の役割として「見る」「聞く」「話す」という 3 つの役割について説明していた。ケース 3 の祖母は自らの経験をもとに、子どもが泣いているときの対処法を伝えたが、子どもの母親は祖母のアドバイスを聞くことができない状況であり、子どもの母親が落ち着くまで“そっとしておく”という対応をとっていた。このように、ケース 3 の祖母は自らの経験を「話す」という役割を遂行し、子どもの母親が受け入れられない状況であると＜産後の母親への理解＞を示した上で「見

守る」という役割をとっていた。ケース 9 の祖母は、孫に関わる機会が少なく、直接サポートをすることは少ないが、時々子どもの両親が孫と一緒に来た際には、＜産後の母親への理解＞から子どもの母親の疲れを少しでも緩和できるように配慮していた。

ケース 6 の子どもの母親は、祖父母の存在が育児において大切なものであると認識していた。1 人で育児していると不安になってしまうが、祖父母による情緒的側面からサポートがあることで安心して育児ができていた。同様に、ケース 5 では子どもの母親が産後 1 ヶ月以降、実家から自宅に戻った後も、週に 1 回実家に行くことで子どもの面倒を見てもらえ、気持ちが安らぐ時間を持つことができ、子どもの母親は情緒的側面からサポートされていた。

このように、特に祖母は、プログラムへの参加を通じて＜産後の母親への理解＞を示し、育児において子どもの母親を精神的にサポートしていた。

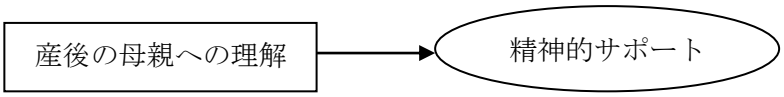

図 11. 育児において精神的側面でのサポートにつながる関連図

3）祖父母として育児を間接的にサポートすることへの効果（図 12）

ケース 2 ではプログラムのグループワーク以外には、家族で出産後の役割について話し合う機会を持っていなかった。その理由として、子どもの父親は祖父母との価値観の違いによって役割関係葛藤が生じることを恐れていたと語っていた。しかし、今回のグループワークを通じて、祖父は子どもの父親の祖父に対する思いや、育児に対する思いを知り、息子の育児に関わることができなかった事実を深く受け止めていた。グループワークによって＜家族員相互理解の場＞となるとともに、＜祖父母としての役割受容＞となり、祖父は孫の出産後、洗濯物を干したり、畳むなど、間接的に育児をサポートしていた。

ケース 8 では、今回のプログラムに参加したことについて子どもの父親からネガティブな反応を受け、ショックを受けたことをグループワークで語っていた。しかし、グループワークで思いを表出したことで＜祖父母としての役割受容＞となり、産後 3 ヶ月の時点では祖父母として、子どもの両親を「見守る」という役割を担っていた。祖父は以前よりも子どもの父親と語るようになり、話を聞くことで間接的に支援をしていた。

ケース 6 ではグループワークによって初めて祖父が祖母の育児に伴う苦労を知り、でき

るだけ祖母を支えていきたいと語っていた。孫の出産後、祖父は祖母とともに、孫の沐浴を行ったり、二人三脚で孫の育児をしていた。このように、ケース 6 の祖父は育児への手段的サポートとともに、間接的に祖母を支えるというサポートも担っていた。この間接的側面からのサポートはケース 7 においてもみられた。ケース 7 の祖父は直接的な育児支援は行っていなかったが、祖母が子どもの母親を支援している間、自宅の家事を行うようになっていた。孫が生まれるまでは、食器を洗ったり、洗濯物をするなど、家事をすることがなかった義父であったが、プログラムに参加し、＜祖父母としての役割受容＞ができ、＜孫の育児のための生活調整＞を行い、双子の育児を支援している祖母を支え、間接的に育児を支援していた。

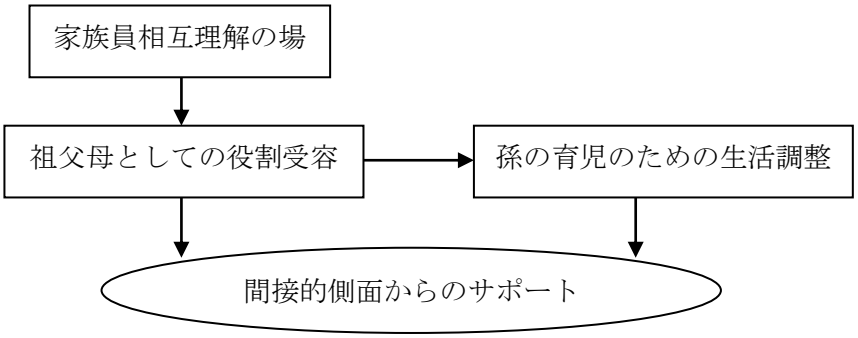

図 12. 育児において間接的サポートにつながる関連図

４）子どもの両親との間で役割関係葛藤が生じた際の祖父母の対応

産後 3 ヶ月の時点において、ケース 3，4，6，8 では子どもの両親との間で役割関係葛藤は生じていなかった。

ケース 1、2，9 では、役割関係葛藤が生じた際に実母が「調整役」となっていた。ケース 1 ではプログラムに参加しなかった義父母に対して、実母がプログラムで得た知識を伝え、義父母と娘との役割関係葛藤の解消を図っていた。また、ケース 2 では、産後に子どもの両親間で役割関係葛藤が生じることが多く、義母は嫁の立場に立ち、家庭における女性の負担の大きさを理解し、嫁を情緒的側面から「保護」していた。ケース 9 では、孫のお祝い行事等で、義父と子どもの両親との間で意見がズレ、役割関係葛藤が生じることがあったが、義母が間に立ち、「調整」を図っていた。

ケース 5 では先述したように、産後 1 ヶ月までの間に、子どもの泣きのことで子どもの母親が精神的に不安定となっていたが、祖母は子どもの母親を見守り、子どもの母親の意

見を尊重し、「保護」の役割を担っていた。

ケース７では、子どもの母親から依頼されたサポートを遂行する過程においては役割関係葛藤が生じていなかった。しかし、子どもの母親が期待する以上の祖母の介入によって、役割関係葛藤が生じていた。その際に、子どもの母親は祖母に直接話をするのではなく、子どもの父親を介して不満を伝えていた。祖母は思いの空回りを感じるとともに、自身の関わりに対して反省を示し、子どもの母親が求める支援に対してのみサポートをしていく「追従」という対応をとっていた。

第７章　考察

本研究の結果から、初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムの有用性および効果について考察をしていく。

Ⅰ．本プログラムの有用性および効果

本研究では、初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムを開発し、妊娠 30 週以降の妊婦をもつ祖父母とその家族を対象に、プログラムを実施した結果、9 家族において産後 3 ヶ月までに役割関係葛藤が増大することなく、祖父母としての役割を遂行していた。また、本プログラムへの参加は、孫の育児において祖父母が子どもの両親を手段的側面あるいは情緒的側面からサポートしたり、間接的に育児をサポートしていくことにつながることが示された。

本プログラムでは予備研究において明らかとなった、役割関係葛藤の要因の 1 つである【時代背景による育児観のギャップ】を少なくするために、現代の育児に関する知識の提供を根拠に基づき説明した。その結果、すべてのケースにおいて、祖父母は＜現代の育児に対する共通理解＞を示し、これにより祖父母は子どもの両親との間で、【時代背景による育児観のギャップ】によって、役割関係葛藤を生じていなかった。石井（2011）は新しい情報を提供する際には祖父母の経験が有用でないという自尊感情の低下を招かないように配慮する必要があると述べている。本プログラムでは、現代の育児について知りたいというニーズのある祖父母に対して、現代の育児の知識を説明していく際に、時代背景に伴い変化してきた育児の知識を根拠に基づいて説明をしていったことで、祖父母は受け入れやすく、世代間ギャップが解消されたと考える。その結果、祖父母は現代の育児を理解した上で孫の育児を担い、手段的側面で育児をサポートすることができていた。日本助産師会報告書（2011）によると、現代祖父母となっている世代は、共働き時代を生きてきた人が多く、育児に対する自信のなさや今の子育てとの違いから、支援に戸惑っている場合が多いと報告されている。しかし、本プログラムに参加した祖母は沐浴演習で育児技術を見直し、現代の知識を得ることで、＜孫の育児に自信がつく＞という効果を得ていた。さらには、祖母が現代の育児に沿った手段的サポートを遂行することで、子どもの母親にとって大きな支えとなっていた。質問紙調査の結果をみても、現代の育児についての知識と技術への不安や、祖父母としての育児への関わり方への不安、育児のサポートにおける子ども

夫婦への遠慮という 4 つの項目において、いずれもプログラム実施後に有意に得点が低くなっており、祖父母としての役割理解についてはプログラム実施後に有意に得点が高くなっていたことから、プログラムへの参加によって、祖父母は育児対処能力を高め、祖父母としての役割を認識できるようになることが明らかとなった。石井ら（2008）は産後 1 歳未満の孫をもつ 2 名の祖母を対象に孫育児支援プログラムを実施し、祖父母の育児対処能力が高まるように、育児に関する知識や技術の提供を行った。その結果、現代の育児方法に対する戸惑いや提供が軽減し、現代の育児方法を取り入れていこうという気持ちが芽生えており、本研究と同様の結果であった。一方で、同研究では家族の相互理解や役割分担といった家族の関係性においてはプログラム実施前後で変化がなく、家族の関係性に対してプログラムの効果は見られなかった。しかし、今回のプログラムによって子どもの両親への遠慮が有意に減少しており、出産後に家族の関係性にアプローチするのでは効果が得られず、妊娠中にアプローチしたことが効果的であったと考える。

本プログラムに参加した祖父のうち、自身の子どもを育てていた時代に仕事中心で、育児にあまり携わっていない男性にとって、沐浴演習において新生児人形を抱っこしたり、おむつを交換したりして、新生児に触れるという体験は、＜孫の育児へのきっかけづくり＞となり、改めて自分が祖父母となるということを認識させ、＜祖父母としての役割受容＞につながっていた。新道（2010）は、育児期の支援は「娘の母親がする」という認識を祖父母ともにもっていたと報告している。しかし、今回プログラムに参加した祖父は、全員孫の育児において、直接的にサポートしたり、間接的にサポートをしており、プログラムに参加したことで、祖父母としての役割を受容したことが役割遂行につながったと推察する。祖母は子どもの母親にとって育児における重要他者である。しかし、現代では初産年齢の高齢化に伴い、祖父母となる世代も高齢化してきている。また、祖父母自身が勤労世代であることを踏まえると、育児を支援している祖母の負担が増大しないよう、祖父の力が必要となってくる。祖父は祖母に比べて直接的支援や情緒的支援の量は少ないが、成人子から支援を頼まれたらいつでも支援したいという支援意向は強まってきている（新道, 2010）と言われているように、孫の育児に向けて祖父の気持ちを引き出すような本プログラムは必要な介入であると考える。

一方で、役割受容尺度において、プログラム実施前後で有意な差は認められなかった。産後 3～4 ヶ月は、母親役割獲得に向けた葛藤と調整の途上にある母親が多く（中垣ら, 2012)、産後 4 か月であっても母親は常に試行錯誤しながら、子どもと自分に合わせた方法

を模索している状況にある（鈴木ら，2009）。そのため、産後 3 ヶ月は役割獲得の途上であるの時期であることが推察される。祖父母においても同様に、産後 3 ヶ月という時点は祖父母としての新たな役割とこれまでの職業人としての役割、夫あるいは妻としての役割等、さまざまな役割との調整段階にあり、役割獲得の途上にあると考えられる。また、三川（1990）は 50 歳代になると、役割受容は全般的に低くなると述べており、このことからも役割受容尺度において、有意な差が認められなかったと推察する。しかし、質問紙調査の結果からは、本プログラムが役割受容を高めることに至っておらず、1 回の介入だけでは変容することは難しいことも考えられる。この点に関してはさらなる検討が必要であり、今後の課題である。

次に、予備研究において明らかとなった役割関係葛藤の 2 つ目の要因である【孫の育児における役割関係葛藤解消のためのコミュニケーションの困難さ】を解消するために、本プログラムでは祖父母が子どもの両親と向き合い、育児に対する思いや育児における役割について語り合う場としてグループワークを行った。その結果、祖父母はこれまで家族に伝えていなかった思いを表出することができ、＜家族員相互の理解の場＞という効果が得られていた。久保ら（2008）の調査において、孫の育児により夫婦関係の好転となり、孫の話題で夫の会話が増える等、祖母は夫の関係に変化が表れていたことが明らかとなった。今回の研究では、ケース 6 のように祖母が娘を育てていた時代の苦労を赤裸々に語ったことで、夫は初めて妻の思いを理解し、夫婦関係の再構築が妊娠期に行えていた。「親」から「祖父母」へと役割が変化する時期であるからこそ、短時間でも時間をとって互いに向き合って話し合う場が必要であると考える。

ケース 3 やケース 7 では沐浴体験を通して、祖父母としての役割を認識することで、＜孫の育児のための生活調整＞を行うことにもつながっていた。このように、家族内で生活調整がスムーズに行えた要因を質問紙調査の結果から分析していく。まず、家族機能測定尺度の得点をみると、プログラム実施前は極端群が全体の 40.0%を占めていたのに対し、プログラム実施後は 16.7%と減少し、中間群が介入前の 20.0%から 50.0%に増えていた。極端群では家族機能がうまく働かず、家族のライフサイクルを通して問題が多く、中間のレベルでは家族機能が適切に働くと言われている（草田ら，1993）。このことから、本プログラムに参加することにより、家族の機能が高まり、家族が情緒的につながり、家族に状況的危機が生じた場合に、役割関係などを変化させることができるようになったと考える。一方で、バランス群が 40.0%から 33.3%に減少していた。産後 3 ヶ月の家族機能測定尺度

の結果を詳細に分析してみると、中間群のうち 5 人は「膠着/柔軟（べったり/柔軟）」群、1 人は「結合/無秩序（ぴったり/てんやわんや）」群であり、また極端群の 2 人は「膠着/無秩序（べったり/てんやわんや）」群であった。このことから、妊娠期に比べ、家族の凝集性（情緒的きずな）が高すぎ、適応性も高すぎる群が増加していたことが明らかとなった。妊娠期には家族員間で適度な距離を保ちながら関わることができていたが、孫の出産により、育児に向けて家族のきずなが高まりすぎてしまい、互いに育児への関心が強いゆえに、子どもの両親と祖父母が互いに離れがたく、柔軟に対応ができていない関係性にあったといえる。今回の対象者である祖父母は、産後 3 ヶ月の時点においても、育児に多く携わっており、子どもの両親も祖父母を頼りに育児をしている現状であった。このことから、バランス群が少なくなり、尺度において有意な差がでなかったものと考える。家族機能が向上していくには、時間がかかると予測されるが、質問紙調査の結果を踏まえると、プログラムによって家族機能に変化が見られなかったことから、プログラムの内容や実施回数について検討する必要があり、この点については今後の課題である。

また、石井ら（2011）は孫育児支援プログラムへの提言として、孫の育児に関する思いに寄り添うために、その人の育児経験を把握した上で孫育児支援を行うことが大切であると述べている。妊娠中、助産師は妊婦に関わることは多いが、家族に介入する機会は少なく、妊婦健診に祖父母が同席した場合であっても、直接祖父母と対話をする機会はほとんどない現状にある。しかし、予備研究から祖父母と子どもの両親が妊娠中にコミュニケーションをもつ場を設けることが重要であり、意図的に場を設定する必要があると考え、今回グループワークを実施した。その結果、初めての孫の出産を迎える祖父母とその家族を集い、各家族成員の内に秘めた思いを語り合うという家族の関係性にアプローチしたことで、互いの思いを理解でき、祖父母としての役割について認識することができていた。先行研究において、役割関係葛藤が生じた際に直接話し合う者は 1 割未満であり（柳川，2003；角川，2009）、予備研究においても産後 3 ヶ月において義父母と子どもの両親との間でコミュニケーション不足が問題となっていたが、今回妊娠中に家族で話し合うきっかけを設定したことで、育児において家族で随時話し合うことができ、役割関係葛藤の増大を防いでいた。家族への介入方法には家庭訪問等もあるが、初孫を迎える家族という同じ境遇にある者同士が集まったことで、ピアサポートとしての効果もあった。今回のプログラムでは看護者が対象者である祖父母の育児経験を把握しただけでなく、家族間の理解にもつながり、より家族の絆を深める機会となっていた。実父母と娘との関係においても、

妊娠中にじっくり互いの役割について話す機会は少なく、ケース 7 のように祖母への子どもの両親の漠然とした依頼はあっても、具体的な話し合いの場をもつ家族は少ないことが明らかとなった。小野寺（2004）は現行の祖父母クラスにおいて、祖父母の多様性について考慮されず、一律のケア要因として捉えられていると述べている。しかし、本プログラムでは妊娠中に、各家族員のさまざまな個人的背景による苦悩や不安を 1 人 1 人が表出することで、祖父母が子どもの両親と向き合い、互いの思いを理解することができ、家族の絆を深めていく上で、有効であったと考える。

本プログラムに参加した対象者は、産後 3 ヶ月の時点においてプログラムに参加した家族員間で【孫の育児における役割葛藤解消のためのコミュニケーションの困難さ】は生じておらず、子どもの両親との間で役割関係葛藤が生じた際に、祖母は子どもの母親を見守り、保護をする役割を担ったり、他の家族員との調整を図り、役割関係葛藤の増大を防いでいた。前原ら（2007）は育児中の母親を対象にしたディスカッションにおいて、祖父母の気持ちを代弁することで、子どもの両親と祖父母の関係性にアプローチをし、相互理解を深める介入を行った。しかし、参加した子どもの母親のうち、その内容について祖父母とコミュニケーションを図らなかったケースがみられた。本プログラムでは祖父母だけではなく、子どもの両親の参加を促したことで、双方が向き合い、助産師が家族員 1 人 1 人の思いに共感し、否定することなく、ありのままを受け入れることにより、それぞれの気持ちを表出することにつながったと考える。また、渡邉（1999）は新しい役割を取得するにあたり、父親は不安を持っており、両親学級にて少人数グループで話し合う機会を設けることが重要であると述べている。本プログラムでは 2 家族で 1 グループとし、少人数でのグループワークとした。その結果、1 人 1 人がじっくり話す時間を持つことができ、ケース 2 では実父に対する思いを息子が表出することができ、家族内コミュニケーションの場として有用な場であったと言える。このように、グループワークによって、他の家族員も互いの思いを知ることができ、互いの思いを尊重しながら、育児における役割について話し合う機会をもつことができ、有効な介入であったと言える。

今回対象となった家族は、いずれも祖父母が子どもの両親を「保護」し、それに対して子どもの両親は祖父母に「甘える」という関係性が図れていた。そして、祖母が「調整」という役割も担っているケースが半数であった。津間（2013）によると、祖母は孫の育児において「よい関係を築く努力をする」ことが明らかとなっている。本調査でも同様の結果であり、祖母ならではの役割が見出せた。また、特に祖母は子どもの母親との間で役割

関係葛藤が生じた際に、子どもの母親を見守り、「保護」をし、情緒的側面からサポートをする役割を担っていた。これは同姓として子どもの母親の苦労を理解するとともに、本プログラムにおいて、産後の母親の特徴と対応について講話したことで、＜産後の母親への理解＞につながったと推察する。祖父母と子どもの両親との間でさまざまな役割関係葛藤が生じることがあるが、祖母が家族員間の調整を図ることで家族の関係性がうまくいくと考えられる。Laura ら（1992）は、祖父母と子どもの両親との間でサポート授受がうまくいけば、個人のセルフ・エスティームを支持する他、家族を強くすると述べている。個々の家族内で、役割関係葛藤が増大しないためには、役割関係葛藤が生じた際に、祖父母が調整役となることも大事な要因であると考える。

また、予備研究の研究結果から、妊娠先行婚などにより結婚期間の短い家族では家族内コミュニケーションを図ることが難しいことが明らかとなった。さらに、結婚期間が短い夫婦では第 1 子の育児早期における父親の役割間葛藤が大きくなると言われているが（三井, 2005）、本調査ではケース 2 のように夫婦間で関係葛藤が生じた際に、祖父母が「保護」をし、情緒的側面からサポートをしていくことで役割調整が図れていた。このケースでは祖父母が役割の中で「見ること（見守ること）」「聞くこと」を重視し、嫁の思いを傾聴していた。石井（2011）は孫育児支援活動の実態において、「祖父母の役割を説明する」という内容はごくわずかであったと述べている。しかし、今回の結果から、プログラム内で、祖父母の役割として「みること」「聞くこと」「話すこと」を祖父母に伝えていくことは重要であるといえる。

以上のことから、本プログラムでは育児における役割関係葛藤の解消に向けて、初孫を迎える祖父母に対して、現行のプログラムで行われている育児に関する知識や技術の提供に加え、新たな試みとして、妊娠中に家族で話し合う場を設けるグループワークを行ったことで、祖父母としての役割獲得を促進させ、家族関係の強化につながるという効果が得られた。宗像（1996）は、家族間の役割調整を行うことで、気持の通じ合う人間関係を回復させたり、お互いの良さを理解し合うことによって、気持ちが通じ合える人間関係を回復することができると述べている。単なる育児知識の提供だけではなく、家族の関係性にアプローチするという教育プログラムによって、本来家族の持っている機能を高めることができ、育児において役割関係葛藤が増大することなく、祖父母としての役割を遂行することができていたと考える。この点において、本プログラムはこれまでのプログラムにはない、大きな成果があったといえる。

そして、本プログラムは 2 部構成にしたが、第 1 部のテーマである「現代の育児を理解する」によって、祖父母としての育児対処能力が高まり、その上で、第 2 部のテーマである「子どもの両親との関係性の見直しを図る」によって家族が互いの思いを理解することができていた。その結果、産後 3 か月の時点において、祖父母として子どもの両親を手段的あるいは情緒的側面から支え、子どもの両親から頼られながら、家族全員で育児を遂行することができていた。以上のことから、妊娠期に祖父母と子どもの両親を集い、育児に向けて家族の関係性にアプローチしていく本教育プログラムは、育児において子どもの両親との役割関係葛藤の増大を防ぐことに効果的であったと考える。

Ⅱ．本研究の限界と今後の課題

本プログラムは、初めて祖父母となる方々を対象に、孫の育児において生じうる役割関係葛藤の解消に向け、祖父母としての役割獲得を促進し、家族の関係性の強化をはかるため、現代の育児に関する知識を提供したり、孫の育児に向けて祖父母が子どもの両親と向き合い、育児に対する思いを表出する場を設けるといったグループワークを行った。その結果、孫の育児において祖父母の力を生かして関わることができていた。その反面、講話には含めなかった内容において、昔からの通説による心配を抱く祖父母がいた。また、今回の研究の結果から、妊娠中に伝える内容として育児早期までが適当であり、産後 3 ヶ月以降に、改めて助産師が相談に対応できる場を設けることが必要であることが明らかとなった。そのため、本教育プログラムは妊娠期の家族を対象としたものであったが、育児中の家族全員を対象とした「子育てセミナー」を開催することで、これらの問題が解消されるのではないかと推察する。

また、本プログラムでは文脈療法の考え方を参考にグループワークを実施したが、祖父母世代の特性として 1 人当たりの話が長くなることがあり、1 人 1 人の思いをじっくり話せる反面、時間制限の難しさもあった。この点に関しては今後の検討課題である。

さらに、本プログラムに参加しない祖父母への介入が課題である。今回プログラムに参加した祖父母は、前述したように自らの育児時代の反省や、現代の育児に対する不安から、プログラムに参加してきた意欲的な方々である。しかし、祖父母自身が育児体験に自信を持っている場合、プログラムに参加しない可能性がある。そのため、プログラムに参加しない祖父母に対する介入の在り方について検討していく必要がある。

最後に、本研究は初孫を迎える祖父母に対する教育として、新たなプログラムを開発し

評価することを目的とし、対象者がプログラムによって、どのように変化していくのかを質問紙調査および面接調査の結果から明らかにした。今後、本研究をより発展させるためには対照群を設定し、比較検証することが必要であると考える。

第８章　総括

初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムを開発し、評価した結果、以下の効果が明らかとなった。

1. 初孫を迎える祖父母に対する教育プログラムを開発し、実施したところ、9 組の家族において、祖父母は子どもの両親との間で役割関係葛藤が増大することなく、育児をサポートすることができていた。

2. 第 1 部の「現代の育児を理解する」というプログラムにて、現代の育児に関して根拠に基づき説明することにより、祖父母は＜現代の育児に対する共通理解＞を示し、子どもの両親との間で時代背景による育児観のギャップを生じることなく、育児を遂行できることが明らかとなった。

3. 育児経験のある祖母は、講話や沐浴演習を通して、＜孫の育児への自信がつき＞、育児において手段的側面で子どもの両親をサポートしていた。このことから、孫の出産前に育児に関する知識や技術を提供することで、祖母は過去の経験を思い出し、育児においてその力を発揮できることが明らかとなった。

4. 育児経験の少ない祖父であっても、沐浴演習を行うことで、＜孫の育児へのきっかけづくり＞が可能となり、手段的側面で子どもの両親をサポートすることができていた。また、グループワークにおいて、育児における過去の反省を言葉にしたり、他の家族員の思いを知ることで、＜祖父母としての役割受容＞につながり、間接的に子どもの両親をサポートすることにつながっていた。

5. プログラムの実施により、「現代の育児についての知識がなく不安だ」「育児に関する技術ができるか不安だ」「祖父母として育児にどのように関わったらよいかわからない」「育児を手伝っていく上でどこまで介入してよいか子ども夫婦に遠慮がある」という、4 つの項目においてプログラム実施後、有意に得点が下がっていた。また、「子ども夫婦から求められている祖父母の役割について理解している」という項目において、プ

ログラム実施後、有意に得点が上がっていた。プログラムにおける講話や、グループワークにより、祖父母の育児対処能力が高まり、祖父母としての役割を認識できるようになることが明らかとなった。

6. 第2部「子どもの両親との関係性の見直しを図る」において、グループワークを実施したことで、＜家族員相互の理解の場＞という効果が得られた。妊娠期に祖父母が子どもの両親と向き合い、互いの思いを語る場を設けることで、＜祖父母としての役割受容＞につながり、孫の育児に向けて役割意識が高まることが明らかとなった。妊娠期から育児期にかけて、「親」から「祖父母」へと役割が変化する時期であるからこそ、祖父母という役割を遂行していくにあたり、自身の過去を振り返り、思いを語るという作業を行うことで、祖父母としての役割受容につながることが明らかとなった。

7. 産後3ヶ月までの間に、子どもの母親との間で役割関係葛藤が生じた際に、祖母は子どもの母親を保護したり、家族員間の調整を図っていた。また、手段的側面での役割調整だけでなく、情緒的側面においても子どもの母親をサポートし、育児が円滑に行えるように支援していた。

謝辞

本研究に快く協力してくださいました、予備研究における対象者のみなさま、そして本プログラムに参加してくださいましたご家族の皆様には心より感謝を申し上げます。

また、本プログラムでは 4 名の助産師の皆様にお忙しい中、プログラム開催前の段階から実施に向けての打ち合わせにも参加してくださいまして、感謝の念に堪えません。本当にありがとうございました。

本教育プログラムは祖父母と子どもの両親、双方を対象としたプログラムとしましたが、実際に開催するまでは、別々のプログラムの方が祖父母自身、思いの表出がしやすく、参加がしやすいのではないかという疑問がありました。しかし、今回延べ 45 名の参加者があり、ニーズの高さが伺えました。また、今回の調査により、実父母と娘の関係においても、妊娠中に育児に向けての役割について話し合いをしていないことが明らかとなり、本プログラムでグループワークを行ったことで、祖父母や他の家族員の思いを初めて知るという家族が多かったことに、私自身、驚きでもあり、大きな発見でもありました。家族の関係性への介入は難しい看護ではありますが、家族でコミュニケーションを図る場を設定することは現代において重要なケアであり、家族が互いの思いを知る機会となったことが今回の大きな成果であると考えます。

また、参加者のうち、祖父全員がこのような育児プログラムに参加するのは初めてであり、孫の育児に向けて祖父は学習意欲が高いにもかかわらず、これまで学習する場が提供されていなかったことが明らかとなりました。さらに、多くの参加者から「このようなセミナーは毎月行われているのですか？私たちはラッキーでしたね」といった、プログラムに対する肯定的な評価をいただき、大変嬉しく思っております。さらに、「すごく楽しかったです」という感想が多く、2 回目には参加者同士も顔なじみとなり、グループワークが進めやすいという効果も見られました。近所づきあいが希薄化してきている現代ではありますが、“初孫の出産を迎える”という同じ境遇にある者が集うことで、ピアサポートが形成されることを実感しました。

祖父母にとって孫は特別な存在であり、生きがいにもなります。さらに、育児において子どもの両親から頼りにされながら、祖父母としての役割を遂行していくことで、祖父母の力をより発揮していくことにもつながると思います。子どもの健やかな成長発達に向け、家族が互いに協力し合い、育児を担っていけるよう、今後も家族に対する支援を、妊娠期

から育児期まで継続的に関わっていきたいと思っております。

最後になりましたが、長きにわたり、終始熱心にご指導をしてくださいました、安藤広子教授、武田利明教授に深く感謝の意を表します。

そして、副査である福島裕子教授、山内一史教授には具体的で、かつ貴重なご意見を多々ご指摘してくださいまして、誠にありがとうございます。研究目的に沿って一貫性をもって、端的に、かつ論理的にまとめていくことの難しさを感じるとともに、研究の奥深さを実感いたしました。

今後もこの研究テーマを自己の課題として、さらに追求していきたいと思います。

引用文献

渥美由喜（2007）：子育ての楽しさを家庭・地域・職場全体で分かち合える社会に，子どもの未来を育むシンポジウム報告書，岩手県（財）自治総合センター， 24-29.

Albrecht R（1954）：The parental Responsibilities of Grandparents．Marriage and the Family Living，16，201－204.

Aldous J（1995）：New Views of Grandparents in Intergenerational Context．Journal of Family Issues，16（1），104－122.

安藤究（2001）：祖親性の国際比較における課題．福祉社会学部論集，20(2), 1-15.

飯島久美子，松園典子，大日向雅美，沢田啓司（1991）：母親に対する育児に関するアンケート調査から－母親の就労，夫の協力，祖父母同居とのかかわりと母親の意識－．小児保健研究，50（1），16－19.

石井邦子，井出成美，佐藤紀子（2008）：家族員の育児対処能力向上のための孫育児支援プログラムの有用性と課題．千葉看護会誌，14（1），107－114.

石井邦子，井出成美，佐藤紀子，林ひろみ（2011）：孫育児に参加する祖父母が持つ孫育児支援に対するニーズ．千葉看護会誌，16（2），27－34.

石井邦子（2011）：乳児期にある孫をもつ祖父母に対する孫育児支援活動の実態と課題．母性衛生，52（2），311－318.

井関敦子，南田智子，大橋一友（2013）：里帰り分娩を行った娘に対する実母の支援姿勢と支援を通じて体験した思い．54（1），191－199.

大月恵理子，森恵美，中村康香，林ひろみ，中野美佳，陳東，前原邦江（2006）：日本における妊娠期の母親役割獲得を促す家族看護の構成概念．千葉看護会誌，12（1），50－57.

小野寺理佳（2003）：祖母からみた家族境界--育児支援対象子は「家族」なのか．家計経済研究，60，69-77.

小野寺理佳（2004）：別居祖母へのヒアリングデータにみる孫育ての悩みと求められる支援．季刊・社会保障研究，166－176.

神庭純子，藤生君江，飯田澄美子（2006）：養育期の家族における育児不安とその要因に関する研究(第 2 報)育児にかかわる思いの特徴．保健の科学，48(3), 231-237.

狩野鈴子（2011）：祖父母の育児支援に関する文献概観．島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要，5，275－284.

北濱まさみ，竹下さやか（2011）：育児の常識の変化による世代間の戸惑い　母親と祖母への育児指導を行って．小児保健いしかわ，23，18－21.
北村安樹子（1998）：現代の嫁姑関係－姑世代へのアンケート調査を通して－. LDI report, 95，33－61.
木下康仁（2003）：グラウンデッドセオリー・アプローチの実践，弘文堂，東京.
草田寿子，岡堂哲雄（1993）：心理測定尺度集Ⅱ　人間と社会のつながりをとらえる - 対人関係・価値観 - 家族機能測定尺度，サイエンス社，東京，143－148.
久保恭子，刀根洋子，及川裕子（2008）：我が国における祖母の育児支援－祖母性と祖母力－．母性衛生，49（2），303－311.
久保恭子，及川裕子，刀根洋子（2011）：祖母性の因子構造．母性衛生，51（4），601－607.
厚生労働省（2000）：平成 22 年度「出生に関する統計」の概況　人口動態統計特殊報告. http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyu/syussyo06/.
厚生労働省官房統計情報部（2012）：グラフで見る世帯の状況－平成 24 年国民生活基礎調査（平成 22 年）の結果から－. http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/20-21-01.pdf.
小林由希子（2010）：出産前後の里帰りにおける実母の援助と母子関係・母性性の発達．日本助産学会誌，24（1），28－39.
榮玲子（2006）：産後 1 ヶ月の育児協力者別にみた褥婦の乳児への愛着と母親としての意識．母性衛生，47（1），81－87.
笹田ひとみ，伊田早苗，森本桂，阪本喜代子（2010）：孫育てに関する祖父母の思い．奈良県母性衛生学会雑誌，23，18－21.
三川俊樹（1990）：心理測定尺度集Ⅱ　人間と社会のつながりをとらえる - 対人関係・価値観 -　役割受容尺度，サイエンス社，東京，297－302.
三川俊樹（1990）：ライフ・キャリアの視点からみた役割受容．CAREER GUIDANCE STUDY，11，10-17.
島田三恵子，（2006）：産後 1 か月間の母子の心配事と子育て支援のニーズおよび育児環境に関する全国調査－「健やか親子 21」5 年後の初経産別，職業の有無別による比較検討－．小児保健情報，65（6），752－762.
社団法人　日本助産師会（2010）：孫育て講座プログラムおよび教材開発ならびに助産師指導者育成および普及事業．東京.
白井瑞子，井関敦子，久保素子，高島明美（2006）：母のサポートに対する娘（第 1 子育児

早期）の認識と依存の関係．香川母性衛生学会誌，6（1），29－36.
杉井潤子，堀智晴，泊祐子，早川淳（1996）：祖母「孫育て」に関する研究―主観的幸福感との関連においてー．家族関係学，15，89－102.
鈴木有紀乃，小林康江（2009）：産後４ヶ月時の母親が母親としての自信を得るプロセス．日本助産学会誌，23（2），251-260.
角川志穂、佐藤ツセ子（2006）：岩手県における子育て環境の実態　祖母の子育て参加に焦点をあて．母性衛生，47（3），181.
角川志穂（2009）：子育て支援に向けた祖父母学級導入の検討．母性衛生，50（2），300－309.
総務省（2012）：労働力調査．http://www.stat.go.jp/data/roudou/longtime/03roudou.htm.
総務省統計局（2012）：平成23年社会生活基本調査．http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/.
津間文子，四宮美佐恵（2012）：祖母による「孫育て」に関する文献検討．看護保健科学研究誌，12（1），154－162.
津間文子（2013）：祖母の担う「孫育て」が祖母自身に及ぼす影響－子ども世代に対する子育て支援－．母性衛生，53（4），573－582.
内閣府（2007）：平成19年度版国民生活白書．http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/10_pdf/01_honpen/.
内閣府政策統括官（2011）：少子社会に関する国際意識調査報告書．http://www8.cao.go.jp/shoushi/cyousa/cyousa22/kokusai/mokuji-pdf.html.
中垣明美，千葉朝子（2012）：母親役割獲得支援に向けた産後3～4ヵ月の母親の現在と妊娠中の思いおよび希望する支援の検討．母性衛生，53（1），125-133.
中釜洋子（2010）：個人療法と家族療法をつなぐ，東京大学出版会，東京.
長戸和子，中野綾美，野嶋佐由美（2005）：家族を対象とする質的研究の方略－家族の合意形成を支援する看護介入モデルの開発－．保健の科学，47（5），341-347.
中村陽吉（1972）：人間関係と役割．木村駿，相場均，南博編，現代人の病理第２巻，77-80，誠信書房，東京.
林志保，多田玲子，田中恵子，寺下利美，近藤静江，三好紀代美，名尾純子，真鍋佳津子，安部紀美枝，池田澄子（2000）：子育てに期待される祖母の役割－香川県母子愛育会員の実態調査から－．香川医科大学看護学雑誌，4（1），83－89.

前原邦江，大月恵理子，林ひろみ，井出成美，佐藤奈保，小澤治美，佐藤紀子，荒木暁子，石井邦子，森恵美（2007）：乳児を持つ家族への育児支援プログラムの開発－出産後 1～3 か月の母子を対象とした家族支援プログラムの評価－．千葉看護会誌，13（2），10－18.

Martell LK（1990）：The Mother-daughter relationship during daughter's first pregnancy. The transition experience，Journal of Holistic Nursing，4（3），47－55.

松岡知子，宮中文子，岩脇陽子（1996）：祖母の子育て参加が母親に与える影響．母性衛生，37(1), 91-98.

三井由紀子，喜多淳子（2005）：第 1 子の早期育児期における父親の家庭内役割行動及びその関連要因．神大保健紀要，第 21 巻，63－77.

宮中文子，松岡知子，岩脇陽子，西田茂樹（1996）：祖母の子育て参加の実態について （第 1 報） 子育て参加の内容．小児保健研究，55(1), 82-87.

宮本みち子，山田昌弘，岩上真珠（1997）：未婚化社会の親子関係，有斐閣，東京.

三輪聖子，内田照彦，木澤光子（2006）：次世代育児支援における祖父母の役割について－母親の子育て不安とのかかわり－．岐阜女子大学紀要，35，79－83.

宗像恒次（1996）：行動科学からみた健康と病気，メヂカルフレンド社，東京.

八重樫牧子，江草安彦，李永喜，古河孝則，渡邊貴子（2003）：祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響．川崎医療福祉学会誌，13（2），233－245.

柳川真理（2002）：娘の妊娠・出産に対する実母の援助行動．香川母性衛生学会誌，2（1），50－57.

柳川真理（2003）：周産期保健指導に関する一考察．香川母性衛星学会誌，3（1），32－44.

柳川真理（2003）：妊娠から産後 1 ヶ月の援助と二者関係－実母と義母の比較を中心に－．香川医科大学看護学雑誌，7（1），109－118.

Ramona T.Mercer (1981) : A theoretical framework for studying factors that impact on the maternal role. *Nursing Research,* 30 (2)，73–77.

Reva Rubin 著，新道幸恵，後藤桂子訳（1997）：ルヴァ・ルービン母性論－母性の主観的体験，医学書院，東京.

W.K.Kellogg Foundation(2001) : Using Logic Models to Being Together Planning，Evaluation，&Action : Logic model development guide．Battle Creek，MI : Author.

渡邉育子（1999）：妻の妊娠期から分娩後までの父性の変化．神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録，24，478－485.

研究協力依頼文書
育児中の母親用（予備研究）

子育て中のお母さま
研究へのご協力のお願い

私は岩手県立大学看護学部の大学院で学生をしています、木村志穂と申します。現在、「孫育てに向けた祖父母教育プログラムの開発と評価」というテーマで研究を行っています。

従来の大家族、多産化の時代から、現代は核家族化、少子化の時代となり、子育てにおける社会背景が大きく変動する中で、いま祖父母の力が注目されています。しかし、初めて祖父母となられる方にとっては、祖父母としてどのように役割を担っていけばいいのかわからないという不安の声も聞かれています。

そこで、初めてのお孫さんの孫育てをしていく中でのどのような不安や戸惑いがあり、現在どのような役割を実際に担っていらっしゃるのかについて、祖父母のみなさまから１時間程度お話をお聞かせ頂きたいと思っています。

そこで、同居をしていらっしゃる、あるいは近くにお住いの祖父母のみなさまに別紙１をお渡ししていただければと思います。協力をして頂ける方には、再度研究者が研究の趣旨と方法について説明を致します。ご協力に同意をしていただける方は下記までご連絡をお願いいたします。

研究へのご協力は強制ではございませんので、拒否されても構いません。調査に関して、何かご不明な点がございましたら、下記までご連絡をお願い致します。

【調査に関する問い合わせ先】
岩手県立大学看護学研究科博士後期課程
木村　志穂
指導教員　安藤　広子
電話　090－6251－3401

別紙１

研究協力依頼文書
祖父母用（予備研究）

祖父母の皆様へ
調査へのご協力のお願い

私は岩手県立大学看護学部の大学院で学生をしています、木村志穂と申します。

現在、「孫育てに向けた祖父母教育プログラムの開発と評価」というテーマで研究を行っています。

従来の大家族、多産化の時代から、現代は核家族化、少子化の時代となり、子育てにおける社会背景が大きく変動する中で、いま祖父母の力が注目されています。

しかし、初めて祖父母となられる方にとっては、祖父母としてどのように役割を担っていけばいいのかわからないという不安の声も聞かれています。

そこで、初めてのお孫さんの孫育てをしていく中でのどのような不安や戸惑いがあり、現在どのような役割を実際に担っていらっしゃるのかについて、1時間程度お話をお聞かせ頂きたいと思っています。祖父母となられたみなさまがどのようにして役割を担っていらっしゃるのかを知ることで、看護者としての支援のあり方について検討をしていきたいと考えております。

なお、調査へのご協力は強制ではございませんし、協力に賛同された後に、途中で中断をされてもみなさまに何ら不利益はございません。また、今回得た情報は論文及び学会にて発表する予定ですが、個人名は一切出しませんので、個人が特定されることはございません。知り得た情報については研究の終了後、機械にかけて破棄致します。

ご協力をしていただける方、あるいは調査に関してご不明な点がある方は、下記までご連絡をお願いいたします。

調査内容については別紙２をお読み頂き、ご検討をお願い致します。

【調査に関する問い合わせ先】
岩手県立大学看護学研究科博士後期課程
木村　志穂
指導教員　安藤　広子
電話　090－6251－3401

調査内容説明文書
祖父母用（予備研究）

別紙２

調査の内容についてのご説明

１．　面接前に、アンケートへのご協力をお願いいたします。回答時間は５分程度です。また、お時間のあるときに15分程度のアンケートへの回答をお願いいたします。こちらは調査後１週間以内に郵送にて返信して頂ければと思います。

２．　１時間程度で下記の内容についてお話を伺いたいと思っています。なお、もしよろしければ、お話の内容をまとめるにあたり、ICレコーダーにて録音をさせてください。強制ではございませんので、拒否をされても構いません。

① 子どもの両親からは祖父母としてどのような役割を期待されていると認識していらっしゃいましたか。

② 妊娠中期頃から産後３ヶ月までの間に、孫育てをしていく中で、どのような不安や戸惑いがありましたか。

③ 妊娠中期頃から産後３ヶ月までの間に、子どもの両親との間で、どの時期にどのような考え方のズレがありましたか。

④ 考え方のズレが生じた際に、どのような対応をしましたか。

３．　面接の場所と時間はみなさまのご希望を伺い、調整させて頂きます。

岩手県立大学看護学研究科博士後期課程
木村　志穂
住所　岩手県滝沢村滝沢字巣子152-52
岩手県立大学看護学部　共同研究室２

研究協力依頼文書
家族用（プログラム実施後）

ご家族の皆様へ
調査へのご協力のお願い

この度はじぃじ・ばぁばセミナーにご参加くださいまして、誠にありがとうございました。

質問紙調査の配布時にご説明しましたが、私は現在「孫育てに向けた祖父母教育プログラムの開発と評価」というテーマで研究を行っています。

従来の大家族、多産化の時代から、現代は核家族化、少子化の時代となり、子育てにおける社会背景が大きく変動する中で、いま祖父母の力が注目されています。しかし、初めて祖父母となられる方にとっては、祖父母としてどのように役割を担っていけばいいのかわからないという不安の声も聞かれています。

そこで、今回初孫を迎えるご家族を対象にセミナーを開催致しました。

本プログラムの内容が参加して頂いたみなさまにとって、どのような意味があったのか、また本プログラムに対する要望など、生の声を聞かせて頂くことで、今後さらなるセミナーの改善につながります。

お忙しい時期に大変恐縮ですが、1 人でも、多くのご家族のみなさまにご協力をして頂けると幸いです。調査日は産後 3 ヶ月頃を予定しており、皆様のご都合のよい日に設定したいと考えております。

なお、調査へのご協力は強制ではございませんし、協力に賛同された後に、途中で中断をされてもみなさまに何ら不利益はございません。また、今回得た情報は論文及び学会にて発表する予定ですが、個人名は一切出しませんので、個人が特定されることはございません。知り得た情報については研究の終了後、機械にかけて破棄致します。

ご協力をしていただける方、あるいは調査に関してご不明な点がある方は、下記までご連絡をお願いいたします。

調査内容については、調査説明文をお読み頂き、ご検討をお願い致します。

【調査に関する問い合わせ先】
岩手県立大学看護学研究科博士後期課程
木村　志穂
指導教員　安藤　広子
電話　090－6251－3401

調査内容説明文書
家族用（プログラム実施後）

調査の内容についてのご説明

１．面接前に、アンケートへのご協力をお願いいたします。回答時間は 5 分程度です。また、お時間のあるときに 15 分程度のアンケートへの回答をお願いいたします。こちらは調査後 1 週間以内に郵送にて返信して頂ければと思います。

２．1 時間程度で下記の内容についてお話を伺いたいと思っています。なお、もしよろしければ、お話の内容をまとめるにあたり、IC レコーダーにて録音をさせてください。強制ではございませんので、拒否をされても構いません。

① 現在、育児において家族内でどのように役割調整を行っていますか。
② 妊娠中期頃から産後３ヶ月までの間に、子どもの両親と祖父母の間で、どの時期にどのような考え方のズレがありましたか。
③ 考え方のズレが生じた際に、どのような対応をしましたか。

３．面接の場所と時間はみなさまのご希望を伺い、調整させて頂きます。

岩手県立大学看護学研究科博士後期課程
木村　志穂
住所　岩手県滝沢村滝沢字巣子 152-52
岩手県立大学看護学部　共同研究室 2

研究同意書
（対象者･研究者保管用）

(対象者保管用と研究者保管用の各１部作成)

「孫育てに向けた祖父母教育プログラムの開発と評価における調査」同意書

私は、孫育てに向けた祖父母教育プログラムの開発と評価における調査について、文書を用いて説明を受け、その内容を理解いたしました。

その結果、この調査に参加協力をすることに同意いたします。

平成　　年　　月　　日

参加者（署名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

研究者（署名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＜連絡先＞
岩手県立大学看護学研究科博士後期課程
木村　志穂
指導教員　安藤　広子
住所：岩手県滝沢村滝沢字巣子 152-52
岩手県立大学看護学部　共同研究室 2
電話番号：090－6251－3401

面接調査における
事前調査用紙

下記のことについて、あてはまるところに〇をつけ、(　　)内には必要事項をご記入ください。お手数ですが、必ずすべての質問にお答えください。

１．年齢　　(　　)歳

２．性別　　男性　・　女性

３．職業　　あり　・　なし

４．現在、一緒にお住まいの方を教えてください　(例) 夫，二男

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

５．現在、お孫さんは何か月または何歳ですか？　(　　)

６．お孫さんのお住まいはどちらですか
①同居している　②同じ市町村内に住んでいる
③同じ市町村ではないが、県内に住んでいる　④県外に住んでいる

７．現在、どのくらい孫育てをしていらっしゃいますか　(例) 1週間に1回

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

８．自分のお子さまを子育てしていたときに、ご両親と同居をしていましたか
①同居していた　②同居はしていなかった

９．現在、孫育てをしていく中で、不安や戸惑いはありますか
①かなりある　②ときどきある
③あまりない　④まったくない

以上です。ご協力を頂きまして、ありがとうございました。

質問紙調査

祖父母の皆様へ
調査へのご協力のお願い

私は岩手県立大学看護学部の大学院で学生をしています、木村志穂と申します。

現在、「孫育てに向けた祖父母教育プログラムの開発と評価」というテーマで研究を行っています。

従来の大家族、多産化の時代から、現代は核家族化、少子化の時代となり、子育てにおける社会背景が大きく変動する中で、いま祖父母の力が注目されています。

しかし、初めて祖父母となられる方にとっては、祖父母としてどのように役割を担っていけばいいのかわからないという不安の声も聞かれています。

そこで、じぃじ・ばぁばセミナーを企画し、少しでも孫育てに向けての準備へのお手伝いができればと考えております。

セミナーの内容については開発途上にありますので、ぜひみなさまから忌憚のないご意見を伺いたいと考えております。

研究の趣旨をご理解いただきまして、質問紙調査へのご協力をお願いいたします。なお、調査はセミナー開始前と生後 3 ヶ月の 2 回行います。それぞれの回答時間は 15 分程度です。調査へのご協力は自由ですので、拒否をされても何ら支障はございません。

また、記号化して学会への発表や論文には記載いたしますので、個人が特定されることはございません。得られたデータにつきましては、研究終了後シュレッダーにて破棄いたします。

調査に関して、何かご不明な点がございましたら、下記までご連絡をお願い致します。

【　調査に関する問い合わせ先　】
岩手県立大学看護学研究科
博士後期課程　木村　志穂
指導教員　安藤　広子
電話　090－6251－3401

質問紙調査

計２回アンケートを行いますので、ニックネームをつけてください。

なお、ニックネームは２回の調査で、同じものを使用してください。

ニックネーム（　　）

問１．下記の項目について、あてはまるもの１つに○をつけてください。

項　　目	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
１．孫育てができることに喜びを感じている	１・・・	２・・・	３・・・	４
２．現代の育児についての知識がなく不安だ	１・・・	２・・・	３・・・	４
３．育児に関する技術（お風呂の入れ方等）ができるか不安だ	１・・・	２・・・	３・・・	４
４．自分の子育て経験や知恵を、子ども夫婦に伝えていきたい	１・・・	２・・・	３・・・	４
５．祖父母として育児にどのように関わったら良いかわからない	１・・・	２・・・	３・・・	４
６．子ども夫婦から育児参加への期待が大きいと感じている	１・・・	２・・・	３・・・	４
７．子ども夫婦から求められている祖父母の役割について理解している	１・・・	２・・・	３・・・	４
８．育児を手伝っていく上で、どこまで介入したら良いか、子ども夫婦に遠慮がある	１・・・	２・・・	３・・・	４
９．育児について子ども夫婦と考え方にズレが生じた場合には、子ども夫婦の意見を尊重しようと考えている	１・・・	２・・・	３・・・	４
10．自分たちの生活の質を保ちながら、育児に関わっていきたい	１・・・	２・・・	３・・・	４

ご協力を頂きましてありがとうございました

質問紙調査

ニックネーム（　　）

問 2. 現在のあなたの現状に一番近いもの１つに○をつけてください。

	まったくあてはまらない	ほとんどあてはまらない	あまりあてはまらない	かなりあてはまる	非常によくあてはまる
私は今の自分の役割に満足している方である					
私は自分の役割に合った生き方をしていると思う					
私は自分の能力を十分に生かしていると思う					
私は自分らしい生き方をしていると思う					
私は今の生活に生きがいを感じている					
私は今の自分に満足している方である					
私はそれなりの成績をあげている方である					
私は世間の常識にあった生き方をしていると思う					
私はやるべきことはきちんとやり遂げる自信がある					
私はもっと他のことをやってみたいと思う					
私は自分に与えられたことを積極的にこなしていける方である					
私は責任のあることはなるべくやりたくない					
私は家族や周りの人から何かを期待されていると思う					
私はたいていのことなら、うまくやれる方である					
私は自分の果たすべき役割がよくわかっている方である					

質問紙調査

問 3. 現在の家族の状況に、一番近いもの１つに○をつけてください。

	まったくない	たまにある	ときどきある	よくある	いつもある
家族で何かをするときはみんなでやる					
私の家族はみんなで何かをするのが好きである					
私の家族では自由な時間は家族と一緒に過ごしている					
私の家族はお互いに密着している					
家族の方が他人よりもお互いに親しみを感じている					
家族がまとまっていることはとても大切である					
私の家族では何かを決める時、家族のだれかの相談する					
私の家族は困った時、家族の誰かに助けを求める					
私の家族ではみんなを引っ張っていく者が決まっている					
私の家族ではだれがどの家事・用事をするか決まっている					
私の家族は子どもの言い分も聞いてしつけをしている					
私の家族では問題の解決には子どもの意見も聞いている					
私の家族では問題の性質に応じて、その取り組み方を変えている					
家族を引っ張っていく者は状況に応じて変わる					
私の家族は叱り方について親と子で話し合う					
家族はそれぞれの友人を気に入っている					
家族の決まりは必要に応じて変わる					
私の家族では家事・用事は必要に応じて交代する					
私の家族では子どもが自主的に物事を決めている					
私の家族はみんなで一緒にしたいことがすぐに思いつく					

問 4．現在のご家族の状況に、一番近いもの１つに○をつけてください。

	はい	いいえ
私たちはお互いの気持ちがよく通じあえない		
家では個人的な気持ちや秘密を打ち明けられない		
私たちはお互いの喜びをわがことのように喜び合う		
わが家ではお互いの考えや将来のことを話し合える雰囲気ではない		
私たちはお互いに会っても気が落ち着かず、イライラしやすい		
私たちはお互いの気持ちが敏感にわかる		
わが家では甘えられる雰囲気がない		
私たちがお互いを信じており、思うように振舞える		
私たちはお互いの行動や考えを支持し合える		

アンケートにご協力を頂きましてありがとうございました。

研究協力依頼文書
地域助産師用

地域助産師の皆様へ
祖父母教育プログラムへのご協力のお願い

私は岩手県立大学看護学部の大学院で学生をしています、木村志穂と申します。

現在、「孫育てに向けた祖父母教育プログラムの開発と評価」というテーマで研究を行っています。

従来の大家族、多産化の時代から、現代は核家族化、少子化の時代となり、子育てにおける社会背景が大きく変動する中で、いま祖父母の力が注目されています。

しかし、初めて祖父母となられる方にとっては、時代が大きく変わり、現代の育児についての知識がわからない、昔のことで育児のことを忘れてしまったという戸惑いの声が聞かれています。また、孫の出産に伴い、これまでの親としての役割から祖父母としての役割を担うこととなり、家族内においても役割調整が必要となってきています。

そこで、妊娠中から産後の育児に向けて、現代の育児に関する知識の提供と、各家族内で役割調整の機会を設け、家族全体で育児の準備を整えていくことを目的とした祖父母教育プログラムの企画・運営を行っていきたいと考えております。

つきましては、地域で活動をしていらっしゃる助産師のみなさまに本研究の趣旨を理解して頂き、沐浴などの演習にご協力を頂きたいと考えております。なお、ご協力頂ける場合には当日に向けて、事前打ち合わせを 3 時間程度お願いしたいと思います。ご検討の程どうぞよろしくお願い致します。

ご協力をしていただける方、あるいは調査に関してご不明な点がある方は、下記までご連絡をお願いいたします。

【　調査に関する問い合わせ先　】
岩手県立大学看護学研究科博士後期課程
木村　志穂
指導教員　安藤広子
電話　090－6251－3401

研究同意書
地域助産師用

「孫育てに向けた祖父母教育プログラムにおける協力について」同意書

私は、孫育てに向けた祖父母教育プログラムにおける協力について、文書を用いて説明を受け、その内容を理解いたしました。

その結果、このプログラムに参加協力をすることに同意いたします。

平成　　年　　月　　日

参加者（署名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

研究者（署名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＜連絡先＞
岩手県立大学看護学研究科博士後期課程
木村　志穂
指導教員　安藤　広子
住所：岩手県滝沢村滝沢字巣子 152-52
岩手県立大学看護学部　共同研究室 2
電話番号：090－6251－3401